第3回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 決定

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公開選考会は、九月五日土曜日山梨県立文学館において山梨文芸協会・山梨日日新聞・山梨県立文学館後援の下に六一名の選考委員、九名の特別選考委員によって行なわれました。

全国からの事前投票者三四名の基礎集計をもとに、候補作「雲の向こうのメメント　モリ」梶川洋一郎（「安藝文学」75号）・「繭の中」森崎房枝（「文学街」253号）・「カプセル・タイム」大西亮（「北斗」548号）・「どくだみ」波佐間義之（「九州文学」524号）・「風景―月壷―」山口馨（「渤海」57号）・「ここにおる。」野見山潔子（「季刊午前」39号）の六作品について激しい議論が交わされました。

それに基づいた二回の投票の結果、第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」は大西亮氏の「カプセル・タイム」と決定しました。また僅差の次点として、梶川洋一郎氏の「雲の向こうのメメント　モリ」と森崎房枝氏の「繭の中」は、特別賞とされました。

またそれぞれ支持者の多かった波佐間義之氏の「どくだみ」・山口馨氏の「風景―月壷―」・野見山潔子氏の「ここにおる。」は優秀賞として賞揚されました（詳細はレポートをお読みください）。

ここに決定とその内容を報告し、受賞作品を賞賛したいと思います。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（蔵野孝治氏・三田村博史氏・山川京子氏・藤田陽子氏・夏目日美子氏からの寄付によるものです）、記念トロフィー、記念品（樋口一葉筆跡額・特別選考委員著書）を贈らせていただきました。特別賞には賞状と賞金二万円・記念トロフィー・記念品を、また優秀賞には賞状と賞金一万円・記念メダルを贈らせていただきました。

今回はどれも力作で、作品の完成度は接近しており、どの作品が受賞してもおかしくない、まれに見る接戦であったと思います。同人雑誌の創作の豊かな結実が見られました。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈願し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

次回第四回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇〇七年一月一日より二〇〇九年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

第3回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞

「カプセル・タイム」（「北斗」548号）

大西　亮

また、どうぞ公開選考会や投票にも多数の方が御参加くださり、皆様自らの手で同人雑誌の優秀作品を選び育てていっていただきたいと存じます。

なお、第四回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公開選考会は、明年二〇一〇年十月三十日・三十一日徳島県三好市で開催される全国同人雑誌フェスティバルのなかの一つのイベントとして三十一日午前九時より行なわれます。全国の同人雑誌諸氏の熱い御参加を心からお願いする次第です。

特別賞

「雲の向こうのメメント　モリ」（「安藝文学」75号）　梶川洋一郎

「繭の中」（「文学街」253号）　森崎房枝

優秀賞

「どくだみ」（「九州文学」524号）　波佐間義之

「風景―月壷―」（「渤海」57号）　山口　馨

「ここにおる。」（「季刊午前」39号）　野見山潔子

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞　受賞のことば

大西　亮

この度は「最優秀賞・まほろば賞」を受賞し、心から喜んでいる。七七歳の今日までで初めての栄誉である。

五十年も前の二十歳代のころ、小説を書きかけては挫折を繰り返していた。三十歳を過ぎると仕事（教職）が忙しくなって現代文学に関心は持っていて読んではいたが、書くほうにまでエネルギーが回らなかった。定年の後、非常勤講師になって時間と体力に余裕ができて、やっと書き始めた。

書いたものは、文芸雑誌の新人賞に応募したが、「文學界」の第一次選考に通ったことが一回あっただけだった。私は高齢だからはねられたのだと、年齢のせいにした。だが、新人賞と銘打つ以上将来にわたって書ける可能性が求められるのは当然だろうとあきらめた。

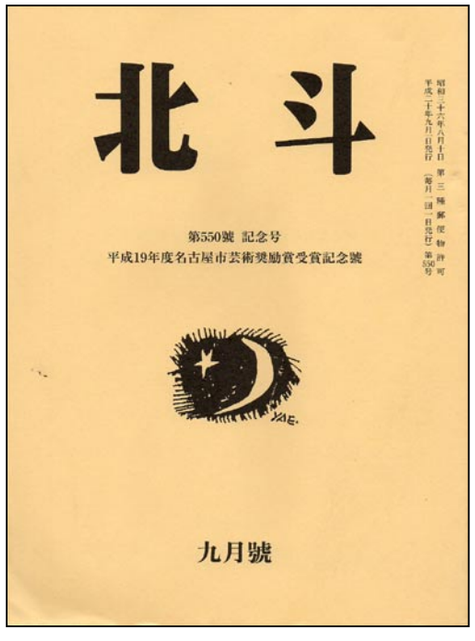
私は生来の性向からか、同人雑誌へはなかなか入会する踏ん切りがつかなかった。だが、七二歳のとき、思い切って名古屋の同人雑誌「北斗」に加わって、そこで作品を活字化するようになった。

その第三作目が『カプセル・タイム』である。いったん発表した以上、それについてあれこれ弁解したり、後付けの注釈めいたことは差し控えたいが、ひとつだけ言わせてもらうならば東京へ行ったとき、貧乏性の私は出費を押さえたくてカプセル・インを利用したことがあって、そこで見たカプセルとその利用者の様子にヒントを得たのである。

発表するとき、この作品に自信がなく、はじめに弟に読んでもらって「これはいいと思うよ」との返答を得て「北斗」へ送った。それ以後、多くの人々に読んでいただけた。就中、「文芸思潮」の五十嵐氏の眼に留まったことで今回の受賞に至ったわけである。ここに読んでくださった方々に厚くお礼を申し上げたい。そして、この受賞を励みにこれからも短篇を中心に発表していくつもりである。

おおにし　あきら

1932 名古屋市生まれ
56 三重大学学芸学部（現教育学部）卒業
56 ～ 93　三重県公立学校勤務
93 ～現在まで　公立高校・三重大学・松阪大学短大部・東海学園大学（名古屋）各非常勤講師（図書館学）
所属同人誌　「北斗」（名古屋市）



特別賞　受賞のことば

梶川洋一郎

今回、「まほろば賞」特別賞に選んで頂き、大変光栄に思っております。立派なトロフィ、賞状等を頂戴し、ありがとうございました。

我が半生をふり返ってみますと、幼少の敗戦混乱期、戦後復興期、高度成長、学園紛争、バブルの崩壊等、巨大なエネルギーに振り回され、今日まで来た、というのが偽らざる実感です。己の浅学非才を省みず、その時々で、枯れた川床からいきなり濁水が噴出し、周りを驚かすパターンの繰り返しでしたが、病膏肓に入る、で長い年月が経ちました。下村湖人著「次郎物語」を読み、創作の衝動を覚えました。あれから、もう五十年が過ぎました。この間、幾つか職場、地域で賞を頂戴しましたが、久しぶりに熱中して創作に取り組み、その結果を評価して頂くことは、やはり嬉しいものです。

今回を通じて、世間には苦節四十年、五十年、その道一筋に精進され、真摯に取り組んでおられる方々が如何に多いかを知り、あらためて皆様に尊敬の念を抱いたところです。

今、胸元には、書きたいこと、書くべきことが山積し、筆の遅さに呻吟しております。今後、受賞を励みとして、呂新吾の「年老いたからと言って嘆くことはない。嘆くべきは、年老いて、何の目的もなく生きていることである」を座右の銘とし、老い知らずで突っ走りたいと考えております。

かじかわ　よういちろう

1940 年生まれ
鳥取県立倉吉東高校卒
警察大学校本科卒
60 広島県巡査
広島警察署長、県本部外事課長、本部教養課長を経て
2001 定年退職
現在　広島県遊技業防犯協力会連合会専務理事
広島市民文芸など小説入選多数

特別賞　受賞のことば

森崎房枝

この度特別賞を頂きました「繭の中」は、昭和四二年から四八年まで、腰椎カリエスで寝たきりだった私が、五十年に骨移植手術を受けて元気になり、女子学生アパートの管理をしながら、文学教室に通って書き上げた最初の作品でした。

仕事に追われて書くことからも離れて時が過ぎ、平成一八年に夫が逝きました。一人暮らしになった私が呆然としていた時、ある編集者にお目にかかり、勧めて頂いて、書き直した「繭の中」を「文学街」に掲載致しました。それが思いがけないご好評を頂き、この度晴れやかな賞に恵まれ、嬉しく、厚く御礼申し上げます。そろそろ彼岸からお招きがくる年頃でございますが、それまでを励みたいと思っております。ありがとうございました。

もりさき　ふさえ

1925　広島県呉市生まれ
県立呉高女在学中肋膜炎で休学
44　呉海軍水交社へ勤務
45　罹災、川内村役場へ勤務
被爆者の看護で微熱再発、上京
49　結核性右脇下リンパ腺炎
56　洋裁学院を肺浸潤で退職
59　結婚。
67　腰椎カリエス
75　骨移植手術、アパート経営
2006　一人暮し
東京都杉並区在住

第3回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 公開選考会

大西亮「カプセル・タイム」が受賞

山梨県立文学館

第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会は、九月五日午後一時より山梨県立文学館で開催されました。山梨文学館は甲府市の西南のはずれに位置し、樋口一葉原稿及び資料、芥川龍之介原稿、飯田蛇笏資料など貴重な文学資料を保有する近代文学館です。展示規模は全国一を誇る重厚な建物で、六月まで太宰治展も開催されていました。全国から多くの文学ファンが集まる甲信の文学メッカです。フランス絵画で有名なミレーの「種撒く人」「落ち穂拾い」などバルビゾン派の絵も多数保有する山梨県立美術館がその前に建ち、文学や美術の落ち着いた芸術空間を作っています。

晴天に恵まれ、東京、愛知、富山、神奈川、三重、京都をはじめ地元山梨など全国各地から七十一人の選考委員が、山梨文学館に集い、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会の幕開けとなりました。

まず作家集団「塊」小沢美智恵氏の開会の言葉に続き、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の司会にバトンタッチされました。編集長は、主催者の立場から、「まほろば賞」の意図についての短い説明を行いました。現在の同人雑誌をめぐる文学状況などに触れながら「『文學界』の同人雑誌評が打ち切られたりしているものの、現在は個人から直接社会へつながる新しい時代のコミュニケーションが始まっている。同人雑誌からも直接社会への発信として同人雑誌自らがその優秀作品を取り上げ、選び、共有することによって創造エネルギーを盛り上げ、新しい表現行動をしていこう」と簡単にしかし力強く述べたのち、全国同人雑誌振興会会長・森啓夫氏が挨拶をしました。「回を重ねるたびに参加人数が増えていることはとても喜ばしいことです。同人雑誌自らが優秀作品を選ぶという画期的なことがこれから行われるわけです。自分を貫いて書かれている六篇の優秀な候補作に点数をつけて選ぶということは酷なことではありますが、その過程が大事で、過程を大切にしたい。

全国同人雑誌振興会会長・森啓夫氏の挨拶

それがこの選考会の大きな意義だと思います」と述べられました。

続いて山梨文芸協会会長の白倉一由氏から「小説作品には現代社会の中で生きるということに応える新しさが必要で、それに応える作品を期待したい」というお言葉をいただきました。

さらに山梨文学館前副館長の鬼丸智彦氏から「山梨文学館も全国の同人雑誌を収集しておりまして、閲覧室でいつでもだれでも自由に見ることができます。またぜひみなさんの同人雑誌をここにお寄せください。公開選考会を通じて全国の同人雑誌の交流がますます行なわれ、いっそうの同人雑誌の興隆につながっていくことを祈念します」とお祝いの言葉をいただきました。

つづいて、司会から選考のおおまかな流れ、また投票の仕方が説明され、いよいよ選考討議です。特別選考委員は三神弘氏、福岡哲司氏、水木亮氏、都築隆広氏、森啓夫氏、小沢美智恵氏、小浜清志氏、八覚正大氏、五十嵐勉編集長の九人です。

候補作は「雲の向こうのメメント　モリ」梶川洋一郎（「安藝文学」75号）・「繭の中」森崎房枝（「文学街」253号）・「カプセル・タイム」大西亮（「北斗」548号）・「どくだみ」波佐間義之（「九州文学」524号）・「風景―月壺―」山口馨（「渤海」57号）・「ここにおる。」野見山潔子（「季刊午前」39号）の六作品。

まず、郵送による事前投票では圧倒的な高得点で他を引き離していた「雲の向こうのメメント　モリ」から論議に入りました。

●「雲の向こうのメメント　モリ」

福岡哲司さんは「私はこの作品をいちばん評価したわけですが、特に作者は終戦のとき四歳だったということに注目しました。この作者が銀蔵、修平という八十代の人物を通して戦争を振り返っていることにリアリティがある。あのときはみん

山梨文芸協会会長・白倉一由氏の挨拶

山梨文学館前副館長・鬼丸智彦氏の挨拶

左から特別選考委員の福岡哲司さん、都築隆広さん、小浜清志さん、小沢美智恵さん

ながら戦争に向かっていたじゃないかということを忘れて戦後の平和の上に犯人探しをやっている。戦後の虚偽が浮かび上がってくる。あのとき自分の憲兵という職務に忠実であったことがどうして悪いのか、それを戦後派である作者が書いたというところに大きな価値があると思いました。ただ、異世代を絡ませてくるともっとスケールが大きくなったと思います」とコメントしました。

小浜清志さんは「私も戦争の被害の大きかった沖縄出身なので、戦争を語り継ごうとするところに意義を覚えた。またそれを書く大きなエネルギーに敬意を払いたい」と評しました。会場からは「インパクトがひじょうに強い。憲兵という側から、広島の原爆の心の傷を抉り出したところに、感銘深いものがある」という声も聞かれました。

山中知彦さんは「広島ならではの全人類的なテーマに取り組んだ作品である。軍人として教育を受けた人間の悲しみがよく表現されている。戦争の時代の新たな事実を知ることができた。重要な問題提起をしている優れた作品」と讃えました。何といっても原爆を背景にしたストーリー展開には迫力があるというのが、会場全体の感想と窺われました。

●「繭の中」

次に「繭の中」に討議が移りました。小沢美智恵さんは「『繭の中』はとてもいい小説だと思いました。出だしもいいですし、病院の中もよく書かれている。寝ている人の感じがよく出ているし、登場人物もみな生き生きとして病人でありながら動いている。絶望というものもよく出ていて、後半になると病人の共感を通してそこからほんとうに人を愛する方向へ踏み出していくところが深くしみじみと伝わってきて、心に染みるいい小説だと思いました」と批評。五十嵐司会者は「この小説にはその病院に長く入院している病人全体の苦しみや絶望や呻きや嘆きが流れ込んでいる。そこに生きることのリアリティがある。またそこから、さくという心の病を持ちながら介護する女性を通して救いの方向へ出て行くところも、感動的である」と評した。

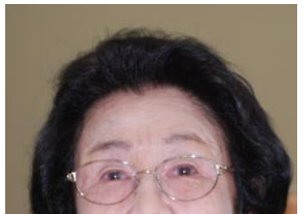
会場からは笠井忠文さんが「私も三年前に腰椎を骨折して入院したが、そのときのことを思い出しても、ひじょうによく病人の世界が描かれているし、ご自分の体験から、よくそこから人間とし

小沢美智恵特別選考委員

笠井忠文さん

左から、司会役五十嵐勉「文芸思潮」編集長、特別選考委員の三神弘さん、水木亮さん

て立ち直る過程が深く描かれています。執拗なほどの文体ではありますが、このくらいのほうが人間を描く筆は深くなると思います」と評価した。三谷静子さんも「二度、三度読むと、病人の不自由な生活のなかでの実感がよく伝わってきて、『繭の中』のほうが心のなかに深く入ってきました」と評した。「山梨ふるさと文庫」の岩崎正吾さんは「純文学の領域が狭められている現代の文学状況の中で、自己存在とは何かという問題を追求していく、純文学の純粋さを守っている作品という点で『繭の中』を評価します。前半寝ていて耳という聴覚だけで開かれている世界から、自分とは何かという問いが深く描かれている。いい作品だと思いました」と述べた。



三谷静子さん

●「カプセル・タイム」

つづいて討議は「カプセル・タイム」に入りました。水木亮さんは「題材がおもしろい。わかりやすくて、エピソードが効果的。発想がとてもしなやか。星を見るお姉さんの存在も魅力がある。終わり方も秀逸」と絶賛しました。つづいて都築隆広さんは次のように評しました。「この小説がダントツにいいと思って来ました。主人公がカプセルをつくっているというだけで相当おもしろいのに、お姉さんがドームまでつくっていたりしてさらにおもしろい。カプセルに閉じこもるのは江戸川乱歩の『鏡地獄』を想わせます。次の作品も読みたくなる。ひじょうにユーモラスで愉快な小説を読ませてもらいました」

また、三神弘さんは「社会に馴染めないものを持った家族、親子三人で個人タクシーを経営するというのがおもしろい。家の中にカプセルを置くという息子の発想もおもしろい。おもしろすぎるかなというくらいです。身近で日常的なリアリティを持っている。現代の寓話になっている」と高く評価した。

会場からは古屋久昭さんが「着想が特異。独自性がある。アイデアがある。ラストの鍵番号を忘れて生きるか死ぬかに追い込まれていくところは、現代のパスワード社会の恐怖につながるものがある。記号社会の危険性を暗示しているようにも思える。だれもが認知症になっていく可能性がある現代、このパスワードを忘れる恐怖は普遍的な恐怖につながる。それをこの小説は象徴しているような気もする」と高く評価した。

古屋久昭さん

特別選考委員の小浜清志さん

●「どくだみ」

四番目の作品「どくだみ」に批評が移りました。小浜清志さんは「途中までとてもよく描かれているが、最後簡単に女性を死なせてしまうのが惜しい」と中上健次との体験を回想しながら論評しました。小浜さんは「カプセル・タイム」の次にこれを買っていたそうです。

駆けつけた特別選考委員の八覚正大さんは「最初は筋が青春と文学のようなものかなといましたが、カネミ油のことが出てきたところから、社会的な問題に一気にひろがって、それが最後の自殺につながっていくところが、一つの問題をずっしりとあとに残しています。私はこの作品をとても評価しました。カネミ油症二世としてもよく書けていますし、ニキビという青春の象徴が、逆にカネミ油症事件の裏返しであるというところなども衝撃的ですし、それをよく文学として定着させていると思います。よく書けていて、胸に残る小説です。私はこの女性が自殺していいと思いますし、死によって何を残すか、生きた証を人はどう残すかということになれば、この女性が残したものは確かに存在すると思います。またどこにも身寄りがない彼女の骨を最後に引き受ける、引き受けざるを得ないところ、『こういう形でしか愛を表現できないとは残念だが自分の手でしっかりと和江さんを葬ってやろうと思った』というところの前後はすばらしいと思いました」と賞賛しました。

五十嵐司会者も、「この作品はカネミ油症事件という社会的な問題が背後にひろがっているので、その被害者の人間存在として社会問題を伴って描かれている文学性は意義があると思います」と評価しました。

会場からも強く推す声が聞かれ、東京の福本安廣さんも「どれもすばらしい作品で甲乙付けがたいのですが、私はなかでもこの『どくだみ』がいちばんいい作品だと思いました。それはいま世の中で問題になっている製造物責任がテーマになっているということです。たんにその薬物や有害物によってその人だけが冒されるというだけでなく、子孫にまで影響を及ぼすというひじょうに重い現実がある。この和江さんは自分の死場所を求めていた。自分も生を受けたからには、人間として愛を成就して死にたいという思いがあったんでしょう。もちろんそれは許されない愛だったかもしれない。子孫を残すのも問題があるわけで、自分と同じ苦しみを繰り返させるわけにはいかない。そうした葛藤が全編に流れています。ヤギの種付けの話がエピソードとしてありますが、これにはひじょうに深い意味が込められている。ヤギというのは人間に利用されているわけです。家畜として。しかしヤギにも動物の喜びや営みがある。そんなところでも、ふつうの作品には見られない深さがあるのかなと、感銘を受けました。昨今、食品の安全問題もありますけれども、あくまで責任を持たなければいけないという製造責任の問題を人類に警鐘している。最後に散骨という方法で弔うのもこの被害者にふさわしかった。いろいろな意味で考えさせられる作品でした」と激賞した。

福本安廣さん

浜松から出席された矢部一雄さんも、「どくだみ」を強く推薦しました。「この小説がいちばん読みやすかった。あとの小説は押しつけてくる印象があって閉口気味になるが、『どくだみ』は素直に入ってきた」と「どくだみ」を最も高く評価していました。

●「風景―月壺―」

「風景―月壺―」について、批評が移りました。

作者の山口馨さんも会場に出席されました。

まず三神弘さんは「完成度の高い作品だけに欠点を探したくなるような損なところがある。今日のような公開審査になるとポイントはそう多くは獲得できない。しかしこういう事実や文体を持った作品がないと、多様な作品のバランスが取れていかないというのも確かです。今日という一日、新しい時間を生きながら、しかし過去の人間関係がいつも登場する日常の生活を送っている、陰鬱な風貌を持った人たちが登場する。テーマは時間やできごとが交錯する複雑さだと思いますが、この時間の複雑さも人間関係の複雑さもきちんと書かれている。テーマも、月壺に託されたような象徴に高めていこうという意図もありますし、対象を持ち得ない現代人の愛とも窺われます。ただ、こういう作品は作者の体験を元にしたということではないはずで、作者によりかかって創作されていくはずですが、そうなると作品の中にいつも作者がいるということになるので、読者はもう少し自由に読ませてもらえないかという、息苦しさも持つ。意図や構成が明快すぎる、あるいは整いすぎているとも言えます。最後は和解ということになりますが、作品の中ではそうではあるけれども読者は果たして十分深呼吸をするように納得を得たかというと疑問だと思います。作品は書き手と読者の間にあって、作品の完成というのは実は読者の側にある。しかしたいへん好意を寄せて読ませていただいた作品です」と支持しました。

五十嵐司会者も「山口さんはこれまでこの『風景』という共通したタイトルでたくさん書かれているので、トータルとして評価すべき一面がある。この大きさは別の角度から評価すべき」とコメントし、山口さんに「長編としてはどう見ているか」と質問しました。山口馨さんは「長編という意識はなく、いろんな人間、いろんな世代、いろんな暮らし、いろんな思いを、人間の話をいただいてきて、それにある肉付けをしていきたいという思いが私の中にあります。一作ごとにこめた思いというものがあるわけで、もう一、二作書くと自分の中になにか生まれてくるかもしれない、とそれを楽しみにしています」と答えてくれました。

特別選考委員の三神弘さん

五十嵐司会者も「女性の作者であるが、男性の書き方が実にうまい。また賞をとっても次に書けない方がたくさんいらっしゃるなかで、常時これだけの作品を安定して書かれる力量は注目すべき」と山口さんがまほろば作家賞に一番近いところにいることを指摘しました。

会場からは「たいへん力のある作品で、書き出しもよい。農村の風景描写にしても草の匂いから始まる描写は優れている。この作者は長編が書けるのではないか。月の光に誘われて親子で絆を深め合う、あるいは月壺という壺を見てお互いの人間を知り合うというところなど理想的な形でまとまっている。肉親で集まったりすると、人生の奥を振り返りたくなる。お祖父さんの代から受け継がれているものを振り返って、そんなところからの人間の存在を考えさせられる。そういう過去の繋がりが、この小説の奥行きを作っている。ぜひ長編小説という方向の可能性も探って挑戦してみてほしい。立派な作品に感銘している」という深いコメントをいただきました。また中田澄江さんからも「個人的にはとても好きな作品で、最後のどんでん返しみたいなところもそれはそれで素直に胸にストンと落ちた気がする」と好意が寄せられました。

「風景―月壺―」の作者・山口馨さん

●「ここにおる。」

最後に「ここにおる。」について議論がまとめられました。

名古屋から出席された同人雑誌「弦」の中村賢三さんは「六編のなかで『ここにおる。』が描写力がいちばん優れている。母と娘の絆、死んだ母の影が映されるところ、農村が変貌していく様子、夫の離反などよく描かれています。とても感心しました」と称揚しました。三田文学新人賞作家の佐々木義登さんが「ここにおる。」を強く推奨しました。「私はこの作品を推すつもりで来ました。肉親で集まったりすると、人生の奥を振り返りたくなる。お祖父さんの代から受け継がれているものを振り返って、そんなところからの人間の存在を考えさせられる。そういう過去の繋がりが、この小説の奥行きを作っている。ぜひ長編小説という方向の可能性も探って挑戦してみてほしい。立派な作品に感銘している」という深いコメントをいただきました。また中田澄江さんからも「個人的にはとても好きな作品で、最後のどんでん返しみたいなところもそれはそれで素直に胸にストンと落ちた気がする」と好意が寄せられました。

三田文学新人賞作家の佐々木義登さん

心理描写にリアリティがあるところ、蛇のシーンですとか、子鼠を掃除機で吸い取ってしまうところとか、そのあたりの描写は秀逸であって、距離感をくずさずに丁寧に書かれているのには感心しました。最後も、母親がそれとなく出てきて母親の下着を身に着けるところで母親の影がすっと寄り添ってくる。そこで『ここにおる。』という言葉がタイトルになると考えました。私は総合的に考えて、このなかでは最優秀であると感じて、強く推したいと思いました」

佐々木さんの発言のあと、一五分の休憩に入り、この間に第一次の投票が行われました。

●第二次選考――決選投票

集計がまとめられて、いよいよ決定の第二次選考です。

集計は「雲の向こうのメメント　モリ」二三四・一点、「繭の中」が二一三・五点、「カプセル・タイム」二九五・九点、「どくだみ」一二四・五点、「風景―月壺―」一二〇点、「ここにおる」一四一点で、上位三作「雲の向こうのメメント　モリ」、「繭の中」、「カプセル・タイム」が決戦選考に残りました。

まずトップの得票を得た**「カプセル・タイム」**について、会場の高校生から感想が求められました。高校一年生の新海満帆さんは「発想が自由なのと、文章も自由な感じがいい」と述べ、同じく金川沙紀さんは「内側に向いていく主人公の行動が、いまの自分にもあるような気がして、合う感じがしました。ラストもいい」と少ない言葉でコメントしてくれました。

高校生の新海満帆さん

小浜さんは「『カプセル・タイム』は簡単に言えば大人の引きこもりですけれども、それは突き詰めていけば孤独で、それが構成的にもきちんとうまく出ていると思いました。最後にうまく収斂していくということで、脱帽という気持ちで最高点を付けさせてもらいました」と論評しました。

会場の坂本かつえさんは「今の時代に出るべくして出てきた作品で、拍手喝采です。この主人公は自閉症でも何でもなくて、今の時代の落とし子だと思います」と激賞。

逆に反対意見も出されました。福岡さんは「読み進めていくと期待が外されていく。ムードでしか書けていないのではないか。この主人公は閉所を好むのか、胎内回帰願望なのか、その点もはっきりしない」と批判しました。

「題材が変わっているので目を引くが、これが今年の同人誌の最高の作品となると、物足りない。特別賞があればそれにはふさわしいが」という声も会場から出ました。

名古屋の中村さんは「ソ連の戦車がタコ壺を回転して埋め塞ぐというエピソードは違和感がある」と指摘、八覚さんは「説明的で、自意識の部分が追求されていない」と批判しました。また「最後カプセルに閉じこもって内側から鍵をかけるけれども、ダイヤル錠である必要はない。なぜダイヤルなのか。その辺がやや不自然」「知的過ぎて、説明的に書いているところがあって物足りない。昔からあるパターンで、新しいものだとは思えない」という意見も出ました。

選考委員の八覚正大さん

「雲の向こうのメメント　モリ」については宮崎吉宏さんは「スケールの大きい作品」とトップに挙げました。八覚さんは「まほろば賞」に強く推薦されました。「メメント　モリは、リメンバー広島なんですよね。そのテーマの重さ、大きさにおいてこれは傑出した作品だと思います。亡くなった妻子が書けていないという欠点はあるにしても、憲兵というなかなか書けない立場から書いている。憲兵だって人間だ、と。船の上での記憶をどう取り戻すのか、メメント　モリ、リメンバー広島の記憶をどう取りもどすのか、取り戻せたら、すごい作品になると思いました。その実存的なものに迫りうる作品です」

逆に岩崎正吾さんは「『雲の向こうのメメント　モリ』は視点が一定していないところにぐらつきがある。これは『カプセル・タイム』にも言えることだが」とマイナス点を指摘されました。「主人公の『ぶった切るぞ』と銀造に迫ろうとする物言いが、軽率ではないか。こういう言動をする者が、被爆者が舟に這い上がろうとするとき、果たして切ることにためらいを見せるのだろうか」という批判も出ました。

最後に**「繭の中」**について、論評が進みました。

八覚さんは「タイトルから自閉的な印象を持って読み始めたのですが、新しさは感じなかったものの、さくという女性が出てくるところからはとてもよく書けているなと感銘を覚えました。実存的な人間の根本に迫っている」と優れた点を挙げました。

福本安廣さんは「人物がとてもよく書けていると思います。病のなかでの人間の描写、重い認識には深淵が覗いています。長く連れ添ってきた家族が、本人の長い病を境に冷たく疎遠になってきたりするそのあたりも、深いものを見せてくれます。文学作品としての深さがある。ただ、主人公のモノローグで『おれ』というのがやや多く出過ぎて耳障りなところもあります。これは作者が女性であるのに、主人公をあえて男性として書いているために生じたのかもしれません」と批評しました。

会場の矢崎茂男さんも「人物はとてもよく書けていて、六編の中でこれが一番感銘を深くしました。テーマとしては新しくないのでしょうが、その深さにおいて、最も掘り下げられている。傷を負った主人公がさくという女性の真心というか誠実さによって癒されていって生きる希望を抱いていくというのはひじょうに心温まる話で、私はこういう深い感動を与えてくれる作品に魅かれます。またこの小説は完成度がとても高くて、主人公が負傷する事故のいきさつについて詳しい説明がないのですが、説明抜きで状況が把握できるという筆力も感心しました」と賞賛しました。

第３回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会投票結果

作品名	雲の向こうのメメントモリ	繭の中	カプセル・タイム	どくだみ	風景―月壺―	ここにおる。
事前郵送投票	75.6	8	8.4	4	2.5	5.5
当日選考委員投票	158.5	205.5	289.5	120.5	117.5	135.5
第１回投票合計	234.1	213.5	295.9	124.5	120	141
最終投票合計	281	248	389			

最後に五十嵐司会者から「いよいよ最終決定投票ですが、この選考会で全国の同人雑誌の最優秀賞が決定され、ここから全国へ発信されるわけです。この選考会の責任において、悔いのない投票をお願いします」と強調され、決定投票に入りました。

その結果、「雲の向こうのメメント　モリ」二八一点、繭の中二四八点、「カプセル・タイム」三八九点と集計され、「カプセル・タイム」が第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」と決定しました。

まほろば賞受賞の大西亮さん

優秀賞の賞状を受ける山口馨さん

会場に来席されていた大西亮さんには記念品として、福岡哲司さんの樋口一葉の真跡額、および山梨名産の雨畑硯が贈られました。また山口馨さんには記念メダルなどが贈られました。さらに山口さんには三神弘さんからサイン入り著書・横尾忠則装丁の「三日芝居」がプレゼントされました。会場は拍手に包まれました。

長い、しかし激しい議論の末の決定でしたが、今回はどれが受賞してもおかしくない優れた作品が揃い、充実した文学時間を享受することができました。森啓夫さんが言われたように「結果ではなく、選考のプロセスに意味と価値がある」ことを再認識して、閉会となりました。

明年は、四国の徳島県三好市で十月三十一日に全国同人雑誌フェスティバルのなかでの「まほろば賞」公開選考会で再会することを楽しみにしながら、山梨文学館をあとにしました。（西田宏明）

同人雑誌優秀作

北斗 548号

カプセル・タイム

大西　亮

疲れたからだで洗車を済ませ、キーを所定の位置に戻して運行記録を専務の机の上に置いて、大宅善平はシャワーを浴びた。

父の大宅善太郎は今頃は市内を流しているのだろう。酔客が酒臭い息を吐いてしゃべり散らすのを我慢して郊外の団地へでも走らせているのかもしれない。親子三人の家族経営のタクシー会社は夜が遅い。

善平は冷蔵庫から缶ビールを取り出すとテーブルの唐揚げの皿を持って自分の部屋へ入った。八畳の洋室には隅に机が置いてある。善平が小学校へ入った時のスチール製の学習机である。高さを調節して大学を出るまで使い続け、今も使っている。それほどに気に入っている。その頃の学習机は前面にパネルがあり、それに時計から鉛筆削り器、温度計、時間表、筆立てまでついて、ごてごてと付属品が多いほどこどもに人気があった。善平は父に頼んでものが落ちないように机の両側面にベニヤ板で囲いをしてもらった。三方を囲まれた机の上へ首を突っ込むようにして善平は頬杖をつくのが大好きだった。こうしていると、学校であったいやなことが心のなかで溶けていくような気がした。

学年が進むと、彼はその三面に絵を貼りつけた。それは一面の若草の牧場に牛が三三五五草を食んでいる絵だったり、帆船の操舵室から見る荒波狂う大海原だったり、宇宙船の窓から見る地球やたくさんの星が浮かぶ宇宙だった。そのどれもが善平が運転する席からの風景で、彼は思うまに空想の羽を伸ばしていつまでも飽きなかった。

三方の囲いは今もそのままで、つまり三十男が児童用の学習机を未だに愛用しているわけである。

もともと善平は狭い所が好きだった。物心ついた頃、彼がいないことに気付いた母親がタンスの横の凹みなどを見れば、狭い隙間にうずくまってじっとしているのをみつけたものだった。何をするわけでもなく狭い所をみつけると、無性にそこへ入り込んでみたくなるのだった。

善平が四、五歳の頃、父から祖父の戦死の話を聞かされた。祖父は昭和二十年八月の敗戦間際に満州でソ連軍との戦いで死んだ。圧倒的な戦車隊の前に日本軍はなすすべもなく敗退した。兵器の乏しい祖父たちは、蛸壺と呼ばれる穴を掘ってその中に一人ずつ身を潜めた。直径も深さも一メートルたらずの穴である。その中で、祖父たちは敵の戦車が通り過ぎるのをじっと待った。だが、気付かずに通り過ぎるものばかりではなかった。若い兵士だった祖父は運悪く見つかって殺された。

無事に帰国した戦友の話によると、ソ連軍の戦車は蛸壺の日本兵をみつけると、その穴の上にキャタピラを差し渡して停まる。そして、いきなり戦車は穴の上のキャタピラを軸にして回転を始めるのだそうだ。すると、穴の縁の土は鉄のキャタピラで下へ下へと削られていく。穴の底に伏せている日本兵は、やがて踏み潰される。狭い穴に閉じこめられて、上から徐々に迫ってくる鉄の塊の恐怖に若かった祖父はどんな思いで耐えていたのだろうか。

父は多分祖父の年忌の折りにでも何気なく語ったのだろうが、この話は善平に強い印象を与えた。その頃、彼の狭い所への関心は押入の中へ移っていた。押入の下の衣装箱の隙間に身を潜めていたものだった。何をするでもなく、ただ狭い空間を楽しんでいただけのことだった。両親はよくよく狭い所の好きな、おかしな子だと不審に思ったが、特に危ないことでもないので、気にもかけなかった。

だが、祖父のあの死に様を知ってからは、善平にとって狭い空間はただ楽しいだけの場所ではなく、恐ろしさもつけ加わった所となった。押入の布団や段ボール箱の隙間に入っていて居眠りをすれば、自分は祖父に成り代わり戦車に踏み潰されそうになってはっと目覚めるのだった。けれど、恐ろしさが楽しさを倍加させるのか、相変わらず狭い所へ入るのを止めなかった。後々、道端で水道工事の穴を見たり、城跡に残る古井戸を覗き込んだりするたびに、善平は祖父のことを思い出し、異様に興奮するのだった。

善平の部屋のなかに部屋の四分の一ほどの体積を占めるものが置かれている。カプセルである。大都市のターミナル駅の近くによくみられるカプセル・インのあれである。それが善平のベッドである。いや、ベッドであるとともに余暇の大半を過ごす書斎であり、オーディオ室でもある。

つまり、部屋の中のもう一つの部屋であった。
ビールと唐揚げを持ってカプセルに入ると胡坐をかいてテレビをつけた。サティのピアノ曲を長い髪の女が弾いている。カプセルの中で、ようやくタクシードライブの疲れが溶け始めた。
ひとはあんな狭いカプセルなんかへよく入るもんだという。そもそも家庭の中へ持ち込むべきものではないともいう。だが、善平にとってはあの空間が自分にとって最適の、何とも堪えられないものなのだ。両手を伸ばせば室内にあるすべてのものが思い通りに動かせる。善平は学生時代にも会社員の頃の出張にも、好んでカプセル・インを利用していた。それが高じて、製造元を探して納めさせたのがつい三か月ほど前だった。
カプセルは通常足元のほうから這うようにして入り込み、すだれ様のシェードを下ろして閉める。善平はそれを内側から施錠できるようにした。狭い内部の空調も洋室のエアコンと連結して、年中新鮮で一定温度の空気を得られるようにした。この三立方メートルに満たない室内には、テレビ、CDラジカセ、電灯、手元灯、時計の他、小さな物入れとノートぐらいは開くことができるテーブルまで備えられてある。床はもちろん全面ベッドである。
そうだ。これは善平の宇宙船なのだ。現実と幻想とを往復するスペースシャトル。彼は指先ひとつでうっとりと夢見心地で操縦している。指はときどきテーブルの上のビールと唐揚げへ伸びて口へ運ぶ。至福の時である。
いったいに幼い子は狭いところへ隠れるスリルが好きなのか、かくれんぼは今も昔も人気のある遊びである。善平が小学校の低学年のころだった。
「もういいかい」
「まあだだよ」と言って身を隠す。
要領の悪い彼が隠れようとする所は、たいてい誰かが隠れていて、追っ払われるのだった。建築中の家があった。もう粗壁が塗ってあって、なかは薄暗かった。木の香りと生乾きの土壁の湿った匂いの中を善平は奥へ入っていった。風呂場が眼に留まり、入ると木の風呂桶があった。蓋が少しずれている。その中へ隠れようと蓋をずらすと、やはり先客がいて桂子ちゃんだった。鬼にみつかったかと思ったのか、桂子ちゃんは大きな眼をいっそう大きく見開いて善平を見たが、やがてにっこり微笑むと、いっしょに隠れようと誘った。いそいで入りこんで中から蓋をほんの少しの隙間を残して閉めた。ふたりはしゃがんで向かい合った。僅かな隙間から入る弱い光の中で顔を見合わせ、くくくっと笑い合った。
静まり返った家の中を足音が近づいてくる。鬼のミッちゃんにちがいない。ふたりは息を殺した。風呂場の前で足を止めたようだ。だが、足音はそのまま遠ざかっていっ

た。まだ危ない。ふたりはじっとしゃがんだままだった。そのうち足が痛くなってきた。蓋をずらして、桂子ちゃんが立ち上がってのびをした。短いスカートのすそから出た白いズロースが目の前にあった。善平はぷっくりとしたお尻を指でつついた。桂子ちゃんは振り返ってくくくっとくぐもった声で笑った。そのいたずらをいやがっているふうはなく、目がきらきらとしていた。桂子ちゃんはまたしゃがむと、何を思ったか蓋を閉めた。真っ暗な桶の中でふたりは身を寄せ合ってふふふと笑った。桶の狭さがいっそう心地よかった。それは秘密を紡ぎだすのに好適だった。秘密の共有のほのかな楽しさと小さな罪悪感とがいっしょにやってきて、かくれんぼのことはいつのまにか忘れてしまった。
専務から、といっても母だが、インターホーンがあって目が覚めた。カプセルの中での快適な目覚めだ。目の前のほどよい空間が眠っている間自分を保護してくれていた。手を伸ばせば届くすべての機器、ずり落ちたりしないふかふかの羽毛布団までが快適である。
父母と善平の三人が朝食を摂りながら、今日のドライブ日程の打ち合せをする。
「お父ちゃん、八時三十分Y駅表口、T家具店のお客さん。その後、M化学へ。善ちゃん、JR駅前の客待ち。あと、無線しっかり聞いてや。頼むわな」
ノートを見ながらの母の口調はすでに専務のものになっている。ふたりは黙々と箸を動かしている。
個人タクシー「オオヤタクシー」の社長は父善太郎、母しづは専務、善平は肩書きだけの副社長ということになっている。
伊勢湾に面したY市で長年タクシー運転手を実直に務めてきた善太郎は、息子にはサラリーマンになってほしかった。市内の大手タクシー会社に勤めて、石油コンビナート関連の大企業のビジネスマンを駅から会社へ、会社から社用の接待のための料亭へと送り迎えして三十年にもなろうか。息子には後ろの席へ乗ってもらいたいという、単純だが執念のような感情がいつしか善太郎の固執として心のなかにこびりついていた。十年ほど前、個人タクシーの許可を取り、有限会社を設立して独立した。
善平は東京のR大を出て、父のたっての願い通りサラリーマンになった。コンビナート関連の大企業とはいかなかったが、一応は株式上場の電子部品メーカーに入れたことを父は大いに喜び、溜飲を下げた思いのようであった。
しかし、それは長く続かなかった。そもそも善平は人に対する関心が希薄なせいか、人が覚えられない。いろいろ努力もしたのだが、営業マンとしては失格で、他の部署をいくつか回されるうち、どこでも人間関係に悩んで辞めることになった。

地元のY市に戻り、父の奔走でコンビナート関連の孫請けにあたる小企業のプラスチック製品販売会社に再就職した。パソコンのディスプレイに向かっての事務処理能力については優れたものがあるが、ここでも対人的にまずいところがあって、「人と目を合わせない」「冗談が通じにくい」「ひとりでにやにやして気持ち悪い」などとここでもやはり人間関係に問題があるということで、退職を余儀なくされた。

善平は二種免許を取り、父が以前勤めていた大手のKタクシーに入社し、M県の北・中部地方を担当した。ここでも運転手仲間の評判は芳しくなかったが、顔突き合わせての仕事ではないことに救われて何とか二年ばかりを持たせることができた。そして、許認可等の手続きに困難もあったが、「オオヤタクシー」へ無事引き取ったのだった。

やり始めてみると、善平はこの仕事が気に入った。客と顔を向き合わせなくても済むし、会話も最小限の受け答えで間に合う。話しかける客には適当に相づちをうっていればそのうちに目的地についてしまう。だいたいタクシーの乗客というものは、運転手に対しては下手に出るひとが多い。善平は自分からは話しかけないが、話しかけられれば気持ちよく応じるようにはしていた。

両親も後継ぎができた上、善平が楽しそうに仕事する姿を見ると、落ち着くところに落ち着いたかと納得した。あとは姉の麦子である。早く結婚して落ち着いてほしいと願っているが、この子にも難しいところがあった。

運転席は善平にとって仕事のほとんどの時間を過ごす大切なコクピットだ。そういえば、乗用車の内部というものはまさにカプセルなのである。善平は自分好みに車内にいろいろと取り付けた。コーヒー沸かし器までついているのだ。それは学習机のあのパネルであり、シートの狭さは幼い頃のかくれんぼの風呂桶のように心を安定させる。

朝から善太郎はT家具店の客をY駅で予約待ちのため出かけた。善平はJR駅前の客待ちでタクシープールで他社の車の後につけた。まだ春の行楽シーズンには早く、Y市から十キロほど山のほうへ入ったところの温泉場も閑散としている。三月末の年度の変わり目と桜の開花に合わせるかのように人の動きが活発になる。

JRから降りた客が駅から吐き出され、客待ちのタクシーの列が動きだした。

「T倉庫」

「はい」

乗り込んできた二人の若いビジネスマンがY港の埠頭にあるT倉庫へ行くように告げた。Y港は羊毛・鉱石・原油・穀物の輸入港であり、自動車・化学製品・陶磁器の輸出港でもある。埠頭には多くの倉庫が並んでいる。後席の客は打ち合せに余念がない。無線が入った。専務からである。

「現在位置は?」

「Y港近く」

「S病院へ回送。モリグチ様二名ご乗車」

「了解」

母は事務室に張りついて配車の電話を受けてそれを父と善平に無線で現在位置を確かめて割り当てる。あとは月極め契約の客の輸送、駅・病院での客待ち、それに客を拾いやすいデパート・ホテルの立ち並ぶ中心街での流しである。夜はいうまでもなく、飲み屋・スナック・カラオケ店のひしめく歓楽街の通りでの客待ちだ。酔客相手のドライブは善平には苦手な仕事である。軽妙な受け答えで客をあしらわなければならない。

「すみません。D村までお願いします」

病院のタクシー・ストップで待っていた二人連れは九十にもなろうかという腰の少し曲がったばあさんとその娘らしい六十代ほどの女である。時々ぼそぼそとつぶやく低い声の会話は病気の話か。

客を降ろして農村の曲がりくねった道をY市へ戻る。三月下旬、一面の枯草のなかにも、淡い黄緑色の芽吹きがちらほらとみられる。途中で時々寄る食堂で昼食にする。トラックや商用車の多く停まる店へ善平は入る。食後は新聞を読んでゆっくり休憩する。時間にも上司にも縛られない職のありがたさである。しかし、無線があればすぐ客を迎えにいく。不定期の細切れの時間を車内で休憩する。車内でコーヒーを沸かして、喫みながら空想を吟味して、思いついたことをメモする。それに検討を加えて実現できるかどうかを考える。

いま、あるひとつのアイデアに思案を重ねている。

親子三人で経営している個人タクシー会社に背を向けて、姉の麦子は家を出て郊外の母の実家で祖母と二人で暮らしている。

母の実家は僅かばかりの田畑を母の兄夫婦が継いでいた。農業だけで生活ができないので、夫婦は近くの焼き物工場で働いて、祖母が細々と耕作をしていた。兄が十年ほど前に交通事故で死ぬと、まもなく兄嫁はこどもを連れて出ていった。もともと姑との折り合いが悪かったのである。しばらく一人暮らしをしていた祖母が、母とうまくいかない孫の麦子を半ば引き取るように呼び寄せた。麦子もわがままを通せる祖母を好んで、祖母の家から高校の図書館司書として勤めに出ている。

気を揉む両親の意見に耳を貸さず、結婚には関心がなくて勤め先の高校の天体観測クラブに所属して星を見ることに熱中している。理科の教師の丹羽が顧問として十五人ばかりの生徒を指導し、教育職でもない麦子は指導の資格も実力もないが、丹羽に好意を抱いているからか、顧問の助

手格としてクラブ活動を手伝っている。
　高校には校舎の三階の屋上に天体観測のドームが設置されている。高校生に夜の観測をさせるわけにいかないので、クラブの時間は天体望遠鏡の操作や星座表を見ての模擬観測をして、夏休みと各学期に一回夜の観測を行うことにしている。生徒が帰ったあと、麦子はよく丹羽に無理を言って望遠鏡の扱い方など天体観測の基礎を教えてもらった。西の空に三日月がかかる頃、丹羽とクレーターの観測をしたり写真に撮ったりするのが楽しみだった。それは丹羽とのマンツーマンの息がかかるほどの狭い空間がもたらす楽しみでもあった。降るような満天の星を望遠鏡でなぞり回してこの紺碧の半球の内側と対面し対話して時を過ごすことに言い知れぬ喜びを味わっているのだった。その光年の単位の神秘に向き合っていると、麦子は消し去ってしまいたい過去のことどもをしばらく忘れることができるのだった。
　麦子は司書の仕事の都合や天体の運行の予測から、クラブ活動のない日でも丹羽からキーを借りてひとりでドームにこもるようになった。しかし、その時間にも限度があった。せいぜい八時までであり、それ以上になると宿直代行員がいい顔をしない。もっとも観測したい明け方などは夏休みの生徒の合宿の時にしか観られなかった。ついに麦子は家にドームを作ろうと思い始めた。

「ねえ、ばあちゃん。麦、たってのお願いなんだけど」
「何やの、急に改まって」
「離れにちょっとしたもん作ってもええか」
　母屋の西側に二間ほどの離れがある。それに手を加えて天体観測のドームを作りたい。麦子は何もぜいたくをしたいのではない。学校では思うようにできない観測を家でやりたい時間にできるようにしたいのだ。この辺は女の夜のひとり歩きは危険だし。費用は自分で出すから、家に手を加えることを許してもらいたい。
「麦ちゃん、男の子みたいなこと考えとらんと、ぽつぽつ結婚のこと考えなあかんよ。そんなん作ったら近所の手前もあるしなあ」
　そう言って反対してみるものの、ふだんは高価な買物もしない孫娘の熱心な願い事に祖母としてはそれ以上反対もできず、しかたなく認めるしかなかった。
　Y市の郊外は低い丘陵地帯に田畑が広がり、所々に農家の集落が点在している。丘陵地には新しい団地がいくつも開発されていて、さらに目下造成中の団地もあって、ブルドーザーやダンプカーが剥出しの赤土の上を動き回っている。西の山麓にある温泉に至る国道は交通量が多くなってきた。けれど、集落の中はまだ閉鎖的で、嫁に逐電された姑である祖母にしてみれば、なるべくひっそりと目立たぬように暮らしたい。そして、できることなら麦子に婿をと

って、家を継がせたいという願いもあった。
「ばあちゃんとこ、屋根の上に変なもん作ったなあ。あれ何やな」
「あれな、孫が学校の研究とかで、お星さん観るんやて。格好悪いけど、しゃあないなあ」
　祖母が精一杯の弁解を繰り返して、離れの屋根の一部を破って銀色に輝くドームが出現した。学校のドームをふたまわりほど小さくしたドームの中は天井裏を六畳ほどの板の間に改造してあり、その真ん中に直径三十センチもありそうな白い筒を持った反射望遠鏡が据え付けられた。
　スイッチひとつでドームの真ん中が開いて望遠鏡の筒が出せるし、ドーム自体が円形のレールの上に乗っているので、三六〇度回転してどの方角でも観測できるようになった。麦子の部屋はドームの真下にある八畳の和室である。そこから新しく取り付けた急な階段を上がるとドームというわけである。
　麦子は暇さえあればドームにこもりっきりになった。もう学校のドームに行く必要はなくなり、司書の仕事が終われば帰ってくるようになって、祖母を喜ばせた。休日の前夜は終夜古びた農家の屋根に出現した銀色のドームが二つに割れ、ぐるぐると回って、近所の人を驚かせた。麦子は丹羽に近付く機会が少なくなって寂しく感じたが、それはまた口実を設けて解決しようと思った。

　彗星を発見するためでもないし、科学雑誌に論文を発表したいわけでもない。自分のいる世界の上半分を占める濃紺の半球に散らばる数々の星の群れ、宇宙の果ての無限の広がり、何万光年という彼方の距離からの微かな光の瞬き、つつーっと闇を引っ掻いては消える流星の光芒、そういったもろもろを麦子は飽かずに見続けるのだった。
　やがて彼女は一日の時間配分を出勤から帰宅までの避けられない九時間、睡眠のための止むをえない六時間、食事その他の雑事のための二時間を除いて、ドームでの止むに止まれぬ七時間とするようになった。車好きの若者が自家用車の中を飾りたてて居室化するように、彼女はドームの中をいろいろな小物を置いて長時間過ごせるように居室化し始めた。ラジカセ、コーヒーメーカー、カウチ、エアコン、……。身の回りを整えてドームを開ける。そして望遠鏡を空に向けるこの一瞬を、麦子はどれほど待ち焦がれているか。CDのホルストの組曲「惑星」が流れる。視野に数々の星どもが入ってくる。ナイトブルー色の天空に煌めき、瞬き、蠢く金色の宝石を凝視する。まさに至福の時であった。
　夢中の時間が瞬く間に過ぎ去って、東の空がインディゴ色に変わり、やがてうっすらと明るみ始める。満天の星たちのあれほどの輝きも徐々に色褪せて天空の饗宴は終わろうとしている。

「どうだい？　アルビレオは囁きあっているかい？　トパーズとサファイアの二重星だよ。『銀河鉄道の夜』にも出てくる星さ」
　丹羽の声に驚いてあたりを見回しても、だれもいない。丹羽がいるはずがない。
「麦ちゃん、むぎちゃーん、もうええ加減にして寝なよう。夜が明けるがな」
　祖母のあきれたような声だ。これは下の部屋からである。
「うん、もう下りていくよ」
　たいていの夜は、祖母の呼ぶ声が幕を降ろすのだった。

　狭隘なところに憑かれたような善平でも、たったひとつの例外がある。蓋のある大型のポリバケツである。それを見ると今でも恐怖心に囚われる。中学時代の強烈な体験からくるものだ。
　善平は友達の少ない少年だった。近所では外で遊ばずほとんどを家の中で過ごした。学校では運動場で遊ばずほとんどを図書館で過ごした。人の顔を見るよりも本の文字面を見ているほうが好きなこどもだった。読書好きというよりも、本を愛玩するのが好きだったのだ。
　中学一年の冬の日の放課後、善平は図書館で書架のあちこちを歩き回っていた。声変わりも済んで、二次性徴で変わりかけたからだのあちこちがむずむずとしていた。分類番号四九「医学」の前に立つ。『ひとのからだ』『中学生のための性のはなし』などという本を片っ端から手にしては目当ての箇所を探した。「女性器の構造」などといった箇所だった。目次や索引も丁寧に見た。「陰毛」「初潮」「膣」などという文字を見ただけで強い刺激を受けた。性器が充血してくるのがわかり、ズボンの前をだれかに見られはしないかと深呼吸をして治まるのを待たなければならなかった。寒い冬の日の午後は館内は閑散としていた。いつもはカウンターの中にいるはずの図書委員の生徒も寒い図書室を嫌って当番をさぼったのか、だれもいなかった。
　そこへどやどやと数人の生徒がなだれこんできた。三年生のワルたちだった。卒業式を一か月後に控え、不安定な日々を送っていた。高校受験の補習授業についていけない連中が校内をほっつき歩いてはいたずらを繰り返していた。図書館には馴染みのないような彼らはめったに来たことのない館内をもの珍しそうに歩き回っていたが、善平をみつけるとそばへ寄ってきた。
「よっ、ベンキョウか。真面目やのう。どんなホン読んどるんや」
　と言って善平の手にしていた本を取り上げた。
「うわあ、こいつ、エッチなやつや。エロ本見とるぞ。まじめぶって図書館なんかに来やがって」

「そんなに女のあそこが見たいんか」
「マスもうかいとるんか。マスのかきかた教えたろか」
　口々に言いながら、面白いものをみつけたとばかりに囃したてた。「おい、こら。何とか言わんか。上級生が聞いとるんやないか」
「……」
「無視するんか。みんなでパンツ脱がすぞ」
　四人の三年生たちは一斉に色めき立った。面白い遊びがみつかって興奮しだした。
　善平は恐怖と羞恥で足が竦んだ。喉が乾いて声が出ない。いきなり後ろから羽交い締めにされた。するともうひとりが善平の両足首をまたに挟んで動けなくした。あとの二人がにたにた笑いながら善平のベルトを緩め始めた。
「や、止めてくれえ」
　喘ぎながら上ずった声を振り絞った。
「よっしゃ、返事したでやめたれ」
「おまえなあ、こんな本隠れて読んどること、おまえの組の女の子らにばらすぞ。ええか」
「いやです」
「ほんなら、これへ入るか」
　突然羽交い締めにされたままの善平の前へポコンという音がして青いポリバケツが置かれた。「図書館」とマジックインキで書かれた直径五十センチほどのごみ箱である。
善平は震え上がった。こんなものに入れられて蓋をされたら窒息死してしまう。
「いやです。止めてください」
　善平は泣き声になって叫ぶように言った。
「そんなら、ここでマスかけえ」
「……」
　善平はまだそれを知らなかった。だから三年生の言っていることの意味がわからなかったのだ。
「ほんとに知らんのやったら教えたるぞ。パンツ下ろせ」
「いやです。もう止めてくれえ」
「どっちにする？　ここへ入るか、パンツ脱ぐか」
「入るで蓋はせんといてください」
「よっしゃ、男の約束や」
　善平は肩で大きくため息をつきながら、仕方なくポリバケツの中へ入った。すると、突然後ろにいた三年生がふたりがかりで善平の肩を押さえて座らせた。出ている頭を押さえ付けられた。
　突然真っ暗になった。蓋をしたのだ。善平は頭で押し上げようとした。だが、開かない。蓋は少し回すとロックがかかるようになっているのだ。
「開けてくれえ。出してくれえ」
　善平は泣きながら叫んだ。声は空しく狭いバケツの中で反響するだけだった。

ポコンと音がして内部の空気が震え、からだに振動が伝わった。だれかが蹴ったのだ。

「くるしーいっ。早う出してえーっ」

あたりが静かになった。しーんとしている。その時、タコツボが、祖父が戦死した、あの蛸壺が頭の中へ鮮明に浮かび上がってきた。激しい戦慄が走った。このまま放っとかれたら死んでしまう。そう気付いたとたん、急に息苦しくなってきた。善平は絶叫した。言葉にならない言葉を叫んだ。叫びながら後頭部と肩で思いっきり蓋を押し上げた。だが、蓋はびくともしない。それでも力を振り絞って二度三度と繰り返した。

蓋が開いた。

ぱっと明るくなったポリバケツのまわりをワルたちが取り巻き、見下ろしてにやにや笑っている。それを見たら無性に腹が立ってきた。屈辱の姿勢から立ち上がろうとするが、からだのあちこちが痛くてすぐには立てない。痛みをこらえてバケツのへりに掴まってようやく立ち上がった。

「わあー、しょんべんちびっとる」

ひとりが言うと、みんなが囃したてた。見るとズボンの前が大きく濡れている。失禁したのだ。

しかし、善平は不思議に恥ずかしくも何ともなかった。あの大きな恐怖のあとの大きな怒りの前では些細なことだったのだろう。ワルたちがまだ何か言いかかるのを無視して、善平はすたすたと図書館をあとにした。涙もズボンの前もそのままで平気で学校を出て家へ向かった。怒りの前には恐いものは何もなかった。帰る道々のいつもの風景も眼に入らなかった。「チクショウ、チクショウ」と呟いて、あたりのものすべてを歩きながら、ねめまわしていた。

その夜、善平はなかなか寝付かれなかった。あの興奮がまだ治まらなかったのだ。彼らへの怒り、ポリバケツの恐怖、性についてのはずかしめ、それらが渦を巻くように頭の中を駈け巡る。恥辱、苦痛、憎悪、怒り……。それらがぐるぐると堂堂巡りを繰り返す。そのうちに、彼は不思議なことに気が付いた。ここは布団の中である。もう恐れなくてもよい安全な今、今度は自分からポリバケツの中へ入ったらどうだろうか、という不遜な考えが浮かんだのだ。

「足をすぼめて入る。苦しいよなあ。つらいわなあ」

ぶつぶつ言いながら想像の中でまどろむうち、いつしか眠りの中へ落ちていった。

朝方、夢うつつの中でからだに快感が走った。善平に精通があった。

青いポリバケツでの閉塞感と性的成長の経験は一体となって彼の記憶の中に刻まれた。それは彼の狭小な場所へのこだわりとも強くリンクしているのだった。

この頃の善平を捉えて放さないひとつのアイデアとは彼のからだを拘束する狭い容器、カプセルのことだった。彼は今のカプセルに満足していなかった。さらに理想型の究極の卵殻、最も心を許せる密室を追い求めた。

高校の国語の時間に「啐啄同時」という熟語を習った。善平はそれがいまだに妙に心に引っ掛かっている。「卵がかえる時、啐は雛が内側からつつくこと、啄は母鳥が外側からつつくこと」と。ヘッセの小説にも何かそんなのがあったな。雛がかえるためには殻を破らねばならない、とか。つまり、現状を打破することによって、次の展望が開けると。確か中学校の教師が卒業を間近に控えた生徒に自分の言葉に酔ったように熱弁を振るった。その時、善平は教師の励ましの意味はわかるけれど、出入り自由な殻のほうがいいな、外敵から身を守っていつでも入り込める容器がほしいな、と心のうちで見当はずれの批判をしたものだった。

いま、部屋に置いてあるカプセル・インのあれは、個室の縮小版なんだ。ここへ来て善平の考え始めたのは、外部との交通をも遮断するものである。空気だけは補給する鳥の卵の殻なのである。卵から雛へではなく、鳥から卵へなのだ。

久しぶりに麦子が家に立ち寄った。ふらっとやってきてはいつのまにか姿を消す。家族経営の個人タクシー会社だから庭はタクシーの駐車場にしてあり、住宅の二部屋を事務所にして電話・無線・パソコン・書類綴りそれに応接セットでいっぱいになっている。

机に向かって電話と無線と事務処理でほとんどの時間を過ごす母は、麦子が来ても無表情のままで言葉もめったに交わさない。身勝手で結婚も考えない娘に、母は愛想をつかしているのだった。麦子は自分でコーヒーをいれて喫みながら雑誌をめくっている。

ちょっとした暇ができる時間帯があるものだ。そんな時は母からの無線で父も善平も帰ってくる。麦子は日頃の無沙汰を埋め合わせるようにコーヒーを淹れたり、買ってきたケーキを出したりしてサービスをする。

「善ちゃん、カプセルの寝心地はどう?」

「うん、ええよ。快適や」

「相変わらずの狭いとこ好きやなあ」

「身にぴったりフィットする広さがええのや」

「あんなのに寝ておったら息が詰まりそうやなあ」

「おまえかて、狭いとこへ閉じこもって星ばっかり見とるというやないか」

父が横から口を出した。

「あれはドームというてな、天体望遠鏡を操作しやすいようにできてるんや。狭いとこが好きなわけやない。そこから観る広い宇宙が好きなんや。四角い本やら四角四面の教育にどっぷり漬かっていると、広いひろーい大宇宙を泳ぎまわりたくなるんさ」

麦子はこの際にと思ったのか、みんなに弁解がましく理由付けをした。
「うまいこと言うて。ええかげんにして、結婚を真剣に考えなあかんよ。時期というものがあるんやから」
麦子はふくれた顔をしてブラックコーヒーを喫んでいる。
「善平も麦子も変わったことに凝る子らやが、まあ、ひとに迷惑をかけるわけでもないし、仕事さえきっちりやったら、趣味は持ってもええやないか」
無用な摩擦を避けさせようと、父がとりなした。
「生きたいように生きる。たった一度の自分の人生だから。だれにも気兼ねせんと。お互いお節介なしや。なあ、お父ちゃん」
麦子の不干渉宣言はこういった会話のもつれにいつもとどめを刺すように出てくる。
「善ちゃん、星を観においで」
「ああ」
善平は気のない返事をする。
「望遠鏡で何を観とるんや」
父が尋ねる。
「さっき言うたように宇宙やな。月やら星やら。お父ちゃんに説明するのは難しいけど。流れ星だって観れるよ。火星も水星も木星も金星も土星も。すばるはすごくきれいな星の集まりで、清少納言が『枕草子』でそう書いているの、千年も前にな」
麦子は得たりと続ける。
「ま、要するに、近い世間見たくないんで、遠い宇宙の果てを観とるのさ」
父母は、二人のこどもの気質が現れる方向は異なっても同根のものであるとつくづく感じた。
いまみんなで雑談にふけっている事務室の半分の六畳は、姉弟がこども部屋として使っていた。勉強机を並べ、二段ベッドを置いていた。すぐ隣の八畳は父母の部屋だった。
麦子は中学へ入る頃から両親に自分だけの部屋がほしいと言い出したが、そんな部屋もなく、着替えの時などに善平とよく揉めたものだった。麦子が見るなというと、善平は面白がってベッドのカーテンの中を覗こうとする。麦子が怒りだす。小学生の善平は着替えに興味もないのだが、姉が騒ぐのが面白くて覗くふりをしては冷やかした。
両親にとっても思春期に入ったこどもたちの部屋とふすま一枚で仕切られた夫婦の寝室というものが気になっていた。善平が中学に入ると、善太郎は大工を呼んで六畳のこども部屋を二つの小部屋に分け、二段ベッドもそれぞれの部屋から上下へ入れるようにベニヤ板で区切ってもらった。ついでに両親の部屋とのふすまは遮音性の高いパネルで仕切り、独立の部屋とした。
「ふたりとももう大きくなったんやから、自分の部屋を自分で整理せなあかんよ」
母から言われて善平は机とベッドと小さい本棚のある部屋が自分の部屋になったことを大いに喜んだ。麦子はそれだけではない両親の都合に気付いていた。深夜、隣の部屋から聞こえてくる小声の会話や衣擦れの音、息遣いなどが何を意味するのか、十五歳の娘には理解はするが同時に反発の原因でもあったのだった。
性は隠すものとして、家庭ではそれを忌避して親と子としてしか相対しない。だが、子はやがて成長し成熟する。性を目の前に突き付けられても、回避して親子ごっこに終始する。麦子はその欺瞞性ががまんできなかった。それでも、麦子はそれを指摘できず、いらいらとして別の形で母と対立を繰り返した。母は麦子の心のうちを理解できず、いい親を演じ続けては麦子に拒否されるのだった。
「どちらまで?」
「ええっと、まあ、港へ行ってくれ」
「港のどこへ?」
「まあ、港のほうでいいや」
Y港といっても広い。行き先を特定しない客を不審に思ったが、善平はとりあえず発車させた。バックミラーに映る痩せた中年の男は垢染みたジャンパーを着て大きな袋を下げている。とても出張のビジネスマンには見えない。船員にも見えない。大丈夫かなと思いながら走らせる。
信号で停まった時、後ろからにゅーっと手を差し出してきた。
「これ見てくれ」
見ると、小指が第二関節からない。困ったな、やくざか。たまにやくざを乗せることはあるが、こんなふうに詰めた小指を自慢するような者は初めてだ。
「誤解すんなよ。これなあ、指詰めたんとちがうぞ。クミの者とはちがうでな」
善平は返事に窮した。もう早く降りてくれと願わずにいられない。善平の困惑した表情がわかったのか、客は声を和らげて続けた。
「これ、熊に食い千切られたんや。ほんまやで」
「ほう、そうですか。痛かったでしょう」
善平はやくざの凄みでもなさそうなのにほっとして返答を返した。客は運転手から応答があったのに気をよくしたのか、話を続けた。車は何度も信号で待たされながら、港に近付いていく。客の話は概略次のようであった。
男は名古屋で日雇いをしていた。四十過ぎての独り者である。雨が降ると仕事がない。友達もおらず、何することもない。死ぬほど退屈だという。日雇い仲間ではよく図書館へ行く者もいるが、ホームレス風の風体のため、図書館員に明らかに疎まれている。男は本は読まないし、ビデオ

も見たくない。それに露骨に侮蔑の表情で応対されるのはプライドが許さぬという。そこで雨の日に行くのは動物園なのだった。

「動物はええよ。馬鹿にもせんし、お世辞も言わん。あいつらはいちばん気持ちがええ」

雨の中を傘を差して男は歩く。客はほとんどいない。晴れていても中年男がひとりで来るのはあまりいないだろう。熊の檻へきた。すると、熊は檻の一辺を行ったり来たりを繰り返している。男は飽かず見ている。首を熊の動きに合わせて左右に振っているのも気付いてない。やがて、男は熊の労に報いてやりたいと思いはじめた。

「お前、だーれもおれへんのにそんなに動いて、腹減らへんのか。何か喰うか」

男は手提げ袋からおやつのあんパンを取り出した。熊は相変わらず左右へ動いている。檻は鉄格子の上にさらに細かい金網が張ってあるので、あんパンは丸ごとでは中へ入れられない。男はだれもいないのを幸いに柵を跨いで檻の手前まで入った。パンを細かい金網から小さく千切ってねじ込んだ。熊は動きを止めた。じっと男をみている。男の差し出すパンの一片が下へ落ちた。熊はそれを口へ入れた。男はさらに次の一片を金網の間から押し込んだ。押し込んだパン切れが中へ入らないので指でさらに押し込んだ。その時、突然熊がパンに喰いついた。パンを押していた人差し指は瞬間的に引っ込めたが、網に掴まっていた小指がまだ中だった。それを噛み千切られたのだ。たちまち手の平は真っ赤になった。男はそれを持っていたハンカチで押さえたが、ハンカチはすぐ血を絞るほどに染まった。

救急車で病院へ運ばれて手当てを受けた。実は帰る家も職もないということで、市役所の世話でホームレスを一時収容する施設へしばらく置いてもらったのだと。

「そうですかあ。たいへんな目に遭いましたなあ。それで、もう傷はよろしいのですか」

「うん。でもなあ、ものは思いようで小指でよかった。人差し指だったら仕事できへんでなあ」

二人は港近くの空き地にタクシーを停めて話し続けた。善平もこんな話ならもっと聞きたいと思った。それにしても寂しい話だった。動物園で心を癒すホームレスの話とは、善平にも何か身につまされる話である。話相手がほしいのか、客は噛まれた時の話を繰り返した。

「で、お客さん、どこへ行くんですか。もうすぐ港ですよ」

「うん、どこでもええんじゃ。海が見たいだけ。見えるとこまで頼むわ」

善平は波止場まで乗せていった。賃走のメーターは千八百円を指している。支払おうとする客に善平は話がよかったからもう代金は要らないと言うと、客は怒ったように二千円を受け取れと言う。結局半額ということにして降

ろした。客はひとのよさそうな笑顔を見せて海へ向かった。善平はその後ろ姿を見送った。痩せて小さな背であった。

川島化工KKはK市の国道バイパス沿いにある。ここは名古屋に近く、需要も多い。また、原料の供給はすぐ隣のY市のコンビナートから受けられるという地の利があった。

「うーん、これねえ、作れることは作れるけど高いものにつきますよ」

設計図を持って製作を依頼しに行った初対面の善平に営業の村井が言った。

「材質がプラスチックでもですか」

「いや、材料費は安いものです。型を作るのに費用がかかるんです。その型で大量生産すれば単価は下がりますがたった一つでしょ。だから、高くつくんです」

「つまり、型が高いと」

「そうです。で、これ何に使うんです?」

村井の質問に善平は言葉を濁した。

「え。んまあ、趣味です」

「ほう、……芸術的なオブジェでもないんですか」

「いや、そうでもないんです。ま、ぶっちゃけて言うと、室内に置いていろいろ楽しむんです」

妙な注文に村井は不審な表情を浮かべた。川島化工は、プラスチックや塩化ビニールなどコンビナートで石油から副次的に生産される二次・三次製品を利用して、注文に応じて成形した物を生産している。身の回りに多くみられる、例えば衣装箱、玩具、風呂桶、バイクの車体などである。

善平は以前から温めていたアイデアをこの際実現しようとここを訪れてきた。それは究極のカプセルであり、人が孵化する前の卵殻に例えるような、自分が入って最も居心地のよい母胎である。母胎回帰願望といえば退嬰的だが、善平にとっては、そのようなモラトリアムな、ひ弱なものではなくて、またリフレッシュして出るための一時避難のシェルターという気持ちが強かった。

それは卵形をしていた。これには今彼が寝ているカプセル・ホテルのものと異なり、外部と連絡する何物もない。ただ横になっているだけの最小限のスペースしかない。

「どれぐらいになりますか」

「うーん、見積書を出しましょうか」

「いや、きょうのところは大体の見当で」

村井は首をひねりながら電卓をたたいていたが、

「まあ、三百五十万といったところですか。なにしろ型を作ってそれで打ち出すので、型に金と時間がかかるんですよ」

善平は自分が考えていた予算をはるかにオーバーした金額なので、もっと安く上がる方法はないものかと相談をかけた。村井はしばらく考えていたが、成型でなければも

っと安くなる。だが、それは角張った物になると、技術的な説明は抜きにして言った。善平は卵型に拘った。村井は希望のサイズぴったりと言うのは無理だが、よく似たものなら出る可能性はあると言った。善平はそういう出物があったら報せてほしいと言って、川島化工を辞した。

二週間も経ったころ、村井から電話が入った。よく似た出物があるので、見てほしいと言う。川島化工からY市寄りの国道沿いにM化成の配下にあって倉庫・運輸を委託されている運輸会社があるので、そこへ行ってくれとのことだった。善平はさっそくそこへ向かった。倉庫管理課の若い男が倉庫へ案内してくれた。庫内は親会社の製品がびっしり詰まってよく整理されていた。

「川島化工の村井さんから連絡がありましてね、ちょうど格好のものが入ったとこですので、ごらんになってください」

倉庫の中を歩きながら、そう説明した。

「ありがとうございます。それにしてもよくありましたね」

「いやあ、実はね、美容関係から試作品を頼まれましてね、納入しようとして運んだところが、もう倒産したんで受け取れないというのですわ。宙に浮いてしまって、いまだに倉庫の奥に眠っているんですよ」

話しているうちに現場へ着いた。梱包された大きな物品が整然と並んでいる。そのうちの一つがそれらしい。若い男はリフトを操って棚から降ろした。梱包を解くと、半透明の包装シートに包まれたものが出てきた。外観はクリーム色のちょうど薬品のカプセルを巨大化させたような、プラスチック製品である。古代エジプトのミイラの棺のようでもあり、車の屋根に載せるキャリアのようでもあった。説明によると、なんでも全身美容のためのエステ用品らしいということだった。蓋も開くし、内部の大きさも善平の設計とは少し異なるが、それ位の違いは許容範囲と考えて妥協した。

トラックで運んでもらって、あらかじめ片付けておいた自分の部屋へ運び入れた。母が呆気に取られて、一部始終を見ていた。

新しいカプセルの蓋を開けたり閉めたりしている善平に母は何かぶつぶつと愚痴を言い始めた。善平は聞こえぬふりをしてカプセルをためつすがめつして、撫でさすっている。

「まだ早いから駅待ちへ行っておいで」

「今日はもう休みや」

「勝手に休んだらあかんがな。これでも会社になっとるんやでな、善ちゃん」

カプセルは思ったよりずっと肉厚にできていた。なかに発泡スチロールが挟んであるのが断面でわかった。ミニバ

ン型の車の屋根によくつけてあるキャリアを二回りほど太くしたような、クリーム色につやつやと輝く、昆虫の卵状の物体だった。

蓋を閉めれば中は密閉される。真っ暗で空気の入れ替えもできない。これらの課題を解決するために、善平はそれからの三日間ほどを費やした。電気コードを引き込んだり、エアコンで暖気や冷気をプラスチックの管で誘導したりした。就中、錠前の取り付けには苦労した。外からの施錠はなしにして、内側からのロイヤル錠の取り付けが難しかった。

朝遅く起きてテーブルに用意してある朝食を食べて事務所に行くと、父はもう出ていったあとだった。母が不機嫌な顔をして善平を見た。

「駅待ちに行って。もっと早う行かんとあかんわ。この頃いつも目標を下回ってるで」

駅に向かって走らせる。タクシードライバーの勤務は比較的きついと言われている。しかし、客待ちの時間も含めての労働時間なので、その時間をどのように過ごすかでその後の人生も変わってくる。キャリアアップを図って独学をするか、仲間との雑談で時間を潰すかで差が出るだろう。

Y駅に着いた。朝の稼ぎ時はもう済んで、多くのタクシーがずらりと並んで客を待っている。善平も最後尾につけて待つうち、次々と後ろに並んでくる。後ろのドライバーは三三五五集まって世間話を始めた。善平はそういうなかへは入らないことにしている。入りたくても入れない雰囲気もある。ドライバーにはいろいろな経歴の人がいて、話題は豊富だが気の荒い人も少なくない。いつも疲労が溜まっているせいか顔がむくんだり、目付きがきつくなっている人もいるが、話をすれば純朴な人が多い。

客待ちの間、善平は卵カプセルのことを考えていた。今度のは眠るためのものではない。心行くまで浸る、子宮回帰なのだ。容易に出られないし、安易に出たくない。そのためにあと何を付け加えればよいか。

客が乗った。一五歳ぐらいの少年とその母親らしい二人連れで国立病院へ向かう。しばらくして善平は乗客の様子がおかしいのに気付いた。少年は窓から外を見ているが、絶えずぼそぼそと独り言を言い続けている。内容は聞き取れないが、繰り返しが多いようだ。

突然、少年が奇声を発した。びくっとしたが、そ知らぬ顔で運転を続けた。母親らしい人は申し訳なさそうに小声で詫びを言い、自閉症だという。「そうですか」とだけ答えた。医学的な定義は別として自閉という文字面からいえば、おれなんか立派な自閉症じゃあないかと苦笑した。狭小世界に憧れ、そこへ自分を閉じこめる。ひとはみんな本当の自分をどこかへ閉じこめているのではないか。心の内

実を包み隠して自分に仮面をかぶせて世間を歩く。それで社会の平安は保たれる。おれだって独り言は言うし、時には大声で叫びたくもなるんだ。そうだ、自閉は健全だ。

「奥さん、大丈夫ですよ。心配いりませんよ。誰だって、そういうことありますよ。程度の問題ですよ。お子さんは本当は健全なんですよ」

善平は自分でも驚くくらいはっきりと声高に言っていた。それで客の親子が少しでも心和むのならと思ったからだ。

「そうでしょうか。そうだとうれしいのですがねえ」

女性は明るい笑顔を見せて、息子をせきたてて降りていった。

午後、客を港へ乗せていったついでに、埠頭へ車を停めて少し仮眠をとった。倒した座席に横たわると窓越しに青い空が見えた。ガラスを全部開け放つと、磯の香りと波音が眠りをいっそう快いものにした。

海は母や女に例えられる。海水のうねりと温度、波のリズム、潮風の湿気と香り、降り注ぐオゾン、それらがいったいとなって母なるイメージや女の匂いを醸し出すのだろうか。もともと水中の生きものだった人類には、母なる海への憧れがからだの中に刷り込まれているのだろうか。心安らぐのはそのせいなのだろうか。ぼんやりと思いに耽りながら、とろとろと浅い眠りに身を任せていた。

善平は東京のR大学の学生だった。同じ系統の名古屋のN大学とは交流もあり、合同コンパをしたものだった。その時に知り合った平井節子は、一方的だが善平には忘れられぬひとであった。三十歳を超える彼のたった一度の恋愛感情の経験であった。好きであるから対面を恐れて避ける。避けているから節子は気づかない。

マグダレーナの像……アンドレア・デ・ル・サルトの。漱石の作品に出てくるこの画家の画集を善平は何の必要からか忘れたが、大学の図書館で見ていて偶然にみつけた。この絵をみつけて、それがあまりに節子に似ているのに茫然となった。

それをコピーしてN大学気付で節子に郵送した。節子からは「たしかに似ている。ありがとう」という簡単なはがきが返ってきた。それだけだった。

専務からの無線で夢から醒めた。すぐMデパートの西口へという指令で車を回す。潮風にあたっての浅い居眠りのせいか、からだがだるい。浅い眠りの中で久しぶりに節子の夢を見た。善平は淡い哀しみに心ふさぐ思いで車を走らせた。

一日の仕事を終えて自分の部屋に入った。卵型のカプセルの細部の調節をしようと、蓋を開ける。中に入って横になり、蓋を閉める。中ははじめは真っ暗になるが、しばらくすると眼が暗闇に慣れて蓋の内側の曲面がかすかにぼー

っと白く見えだした。寝心地を確かめる。背中にあたる部分も曲面だから背筋の部分に隙間ができるし、両肩も底に当たって具合が悪い。空調の空気の取入口はどうか。内側からのロックはどうするか。眼を閉じると、目蓋は黒暗色になる。眼を開けると、そこにはぼんやりとした乳白色の視野が広がる。外の音は全く聞こえない。

（これが卵カプセルだ。この中でおれはサナギになるんだ）

善平はひとりごちた。

卵カプセルから出て手直しを考える。本当は、これは子宮回帰なのだから、羊水にからだが浮かぶように細工をしたい。しかし、大人のからだは胎児とは異なり、全身を適温の羊水に長時間浸かったままではいられない。それは諦めざるをえない。それに代わるものとして、電気毛布を敷き詰めて内部の空気を温めよう。カプセルの底は発泡スチロールを敷いて平らにしよう。その上に電気毛布を敷き詰めるのだ。内部からのロックはどの形式にするか。内部の自由を守るためには錠は必要だと善平は考えた。ホームセンターへ行って必要なものを買い入れて、少しの暇をみつけては手を加えた。

三月末と四月始めの忙しい時期になって、オオヤタクシーはフル回転であった。社長と善平は早番と遅番を交替制にして対処した。人事異動や卒業入学、市内外の桜の名所への花見などが一度に重なった。街中や郊外の風景がぱっと明るくなり、人々の装いが華やかになって、春本番になった。

四月も下旬になると、仕事はほぼ平常に戻った。善平は今日は夜十時に仕事を切り上げて入庫した。早速卵カプセルの内部の改造に取りかかる。改造も終わりに近付いていた。卵カプセルは善平の発想では母の胎内に擬して作られたものである。それは最も安全なシェルターである。

ほぼ完成したところで善平は寝た姿勢で調子を見ることにした。本格的に入るためのシミュレーションをするのだ。蓋を閉めて取り付けたダイヤル錠をかける。ただ、今はまだナンバーを覚えてないので、ロックはしない。低反発の枕の具合はよい。背中も発泡スチロールやウレタンを敷いてその上に電気毛布を敷き詰めてあるから、その中へからだが沈み込んで快適だ。

香りがする。磯の香りだ。湯に漬けておいた海藻の香りである。それが狭い空間に漂い出ているのだ。眼を開けると暗闇に馴れた眼にほんのりと白んだ曲面が見える。内部は無音だし、外部の音は全く入ってこない。調子はいいようだ。

半眼にしてじっとしている。微かに見える視野は灰白色の一色である。鼻は薄い潮の香を嗅いでいる。唇はゆるく開いて呼吸を助けている。肩の力を抜く。胸と腹はゆるやかな呼吸のたびに静かに拡張と収縮を繰り返して上下に波

打っている。手は腰の両側でだらりと横たえてある。ゆっくりと深く息を吸ってしばらく止め、ゆっくりと吐き出す。頭の中は空白である、空白であろうとする。

あとは空気である。空気調節のエアコンのホースは足元につけてある。調節のスイッチは手元につけてあるのでそのテストも行う。

静かだ。うっとりと眠気を催してくる。だが、眠ってはいけない。この卵カプセルは眠るためのものではない。眠るためなら簡易ホテルの宿泊用のカプセルがすでにあるのだ。これは外部と遮断された母の子宮なのだ。自分の内部と対面し対話するためのものである。自分と向かい合う自分。うちの宗派は曹洞宗だから座禅の話は身近なのだ。かつて内観法にも関心を持ったことがある。だが、いま、おれの考えているのは、そういうことではないと善平は思う。

ちょっと息苦しくなってきた。それにからだも楽というよりは、少しだるくなってきたようだ。息苦しいというのは、酸素の問題か、それとも他に原因があるのだろうか。試行はこれぐらいにしておこうと善平はいつものベッドへもぐりこんで眠り込んだ。

朝、目覚めると倦怠感がある。卵の中に長くいすぎたかと気になった。なぜ中に長くいすぎると倦怠感が生じるのか。空気の沈滞のほか、やっと寝返りができるほどの狭さからくる圧迫感があろうかと、善平は考えた。

幾度かの試行錯誤の末、善平は卵カプセルを完成させた。足元から入るエアコンからの調整された新鮮な空気は、カプセルの中を通り過ぎて頭の上から抜けて出るように小さな排気口を取り付けた。試行を繰り返すうちにからだのほうもだんだん馴染んできているようだ。

卵カプセルという子宮の中で揺籃される善平は、まるで繭の中のサナギのような状態で、わずかに新鮮な空気だけは保証されるという極限の中へ自分を閉じこめる。それ以外一切の外部との接触はない。己れの生体としての飢え・渇き・排泄は考慮しない。もともと快適を望むところではない。外部の雑多なものを排して、己れの世界に沈潜するものなのだ。最低限の生理としての呼吸以外は除外したのだった。

勤務を終えて部屋に戻った。一日中タクシーに乗っていると、いくら人と対面しなくてもよいといっても、ちょっとした感情の行き違いがあって、不快な思いをする場面はある。職業である以上避けられないことだ。ほっとすると同時に疲れがどっと出てくる。

今日から卵カプセルへ本格的に入る。通気性のよい木綿の肌着を別に用意した。単なる半袖のシャツとトランクスである。ごそごそとやっていると、母が口実を設けて戸口から覗いた。

「何やっとるん」

「いや、もう寝るんや」

「そんな小さなとこへ入って。寝苦しいやろ」

善平は無視して電灯を豆電球に切り替えた。言い訳を重ねるほど母は介入してくるのが目に見えている。入って横たわり、蓋をする。ダイヤル錠のナンバーは七五二四。これはもう口癖になるほど繰り返して暗記した。ナンバーを揃える位置に突起があり、数字のほうも一が突起になっていて、慣れれば暗闇の中でも手探りで扱うことができて、それがこの錠の特徴なのだ。鍵はない。だから、盗まれない。鍵は頭の中にある。記憶が鍵なのだ。

からだの力を抜くと眼は自然と半眼になる。背中の接触具合はよく、背面全体で支えているのでまるで宙に浮かんでいるようだ。静かに深く息を吸ってゆっくりと吐く。かすかに潮の香りがする。それを繰り返すうち、からだが何かの呪縛から解放されてほどけていくような感じである。同時に頭の中も弛んでくるのか、ひたすらからだの感触だけを楽しんで受け止めているようだ。心臓の鼓動も緩やかなリズムを刻んでいる。呼吸はやがて波打ち際の波の音に合ってくる。その中を鼓動はゆっくりとリズムを刻む。

胎内の羊水に漂う胎児のようにカプセルの庇護の中で善平はもう一人のゼンペイと対話しようと脳裏にそれを浮かべようとした。脳裏に浮かぶのはスナップ写真に写っているようなゼンペイなのだが、彼は無表情で突っ立っているだけで取りつく島もない。

善平はそれを諦め、やがて半眼を閉じていった。何も考えないで、……安らかな気持ちに……海だ……波がくる……打ち寄せて……砕け…引いていく…水平線のほうへ……空だ…真っ青な……白い雲…流れる…ゆっくりと…かもめ…舞う……波の音……聞こえない…いつのまにか……

自分は…殻のなか……そうだ……まだかえってない……ぬくもり…温かい殻…まだ……

自分は…そうだ…まだ生まれてない…胎内…温かい…ゆったりと…水のなか……う・ご・く…

こうして……じーっと…じーっと…し・て・い・る……からだに…ぴったりと…でも…ゆったりと……この殻…容器…胎……子宮…

いま…なにも……から…うつろ……ない……

どれほどの時間が経ったのだろう。ぼんやりしていた頭が次第に正気づいてきた。肌着がびっしょりと濡れて肌に貼りついている。からだがほかほかと火照る。空気が生暖かくて湿っている。薄目を開けると目の前がうっすらと白んで見える。そうだったんだ。卵カプセルの中だったんだ。まるで目を卵の殻で覆ったようだ。

おれは何を考えていたのだろうか。たしか海の風景を想

像しているうちに……。
　それにしても、この卵カプセルの中はなんと居心地がいいのだろう。どうしてこんなに心が安らぐのだろう。あの宿泊用のカプセルは休息睡眠には快適だが、これと比べていえばただ便利というに過ぎないようだ。自己との対話もなければ善平とゼンペイとの対決もない。疲れて酒を飲んで眠りこけてしまう。翌朝機嫌よく目覚めてまた働きに出る。それはよくできた小型の寝室。この卵カプセルは本質が異なる。今回はたまたま寝込んでしまったが、これは、母の胎内であり、サナギを守る繭である。だから、中のおれは変化し成長し充実する使命を負っているんだ。
　でも、これはまた何だか危険な因子をも含んでいそうな気がする。行き着くところまで行ってしまったみたいなんだ。十全感とでも言うのかな。終着、終末。あ、そうか。これは場合によっては棺のなか……そうとも言えるな。まだ誰も見たことのない柩(ひつぎ)のなか。
　善平は錠を開けようと鍵を探しかけて、はっとして思わず苦笑いをした。真っ暗な中で鍵を探さなくてよいようにと、ロイヤル錠にしたのだった。えーつと、七五二四っと。ロックを解いて蓋を開けた。新鮮な空気がおいしかった。自分の部屋のささやかな広がりがくつろいだ気分にさせた。蛍光灯の青白い光がとても明るく感じられた。

　麦子がオーストラリアへ星を見に行くという。身に過ぎた観測設備で気ままに天体を眺める暮らしに飽き足らず、日本の空では満足できないのか南半球の天体を観るのだと言い出した。善平は客をY温泉へ送った帰りの通りすがりにふらりと祖母の家に寄った。姉はドームで観測機器を整備していた。
「オーストラリアへ行くんやて」
「そうや」
「ここで観るのとどう違うんや」
「空気が違う。空気が違えば天体の見え方は全然違うんや。砂漠へ行って観るんやけどな」
「日本でも山頂とか離島へ行けばええのじゃあないか」
「うん、ここよりはな。でも、あっちのアマチュアとの交流もあるんや」
　祖母が果物を持って入ってきた。
「麦ちゃんがな、外国へしばらく行ってくるって言うんで寂しなるわ。善ちゃんもちょいちょい寄ってえな」
「うん、また寄るようにするわな、おばあちゃん」
　麦子は祖母に露骨にいやな表情を向けたので、祖母は早々に引っ込んだ。
「それはそうと、善ちゃん、また妙なもんに凝っとるんやてな」
「ああ、卵カプセルか。あれはええよ。すごいよ」

「入ったらなかなか出てこやへん、棺桶みたいで気持ち悪いって、お母ちゃんぼやいとったよ。もうベッド付きのカプセルがあるやないの」
「いや、全然違うんや。今までのは安心して寝るだけ。今度のは寝るのとは違う。もうひとりの自分と対話するんや」
「難しいこと言うなあ。それやったら座禅とか内観とかいろいろあるやろう」
「いやいや、そんなのではないって。巧く言葉で説明できんけどな。……心身回生というか、新生、新しく生まれ変わるっていうのかなあ。まだまだ奥があるなあ、あれは」
　麦子は言いよどむ弟をじっと見つめながら、この子も社会との対応で苦しんでいると思った。所詮、逃避だろうとも推測した。
「心理療法みたいなもんか。それとも、宗教の代わりみたいなもんかなあ。善ちゃんも内心はたいへんなんやなあ」
　善平は姉に核心を突かれたように感じた。やはり、そのように受け取られるのかなあと、苛立たしく思えた。
「あのな、姉ちゃん、おれはな、他人には頼らないんや。自分の心は自分で奥深く見つめるんや。自分がいちばんようわかるんや」
「まあ、ええわさ。お互い好きなようにしか生きられへん」

　公務員として、国外への旅行の許可や手続きに手間取って麦子は夏休みに出発した。なんでも天体観測に絶好の地があるそうで、それを天文学雑誌か科学雑誌あたりから知ったのだろう。あとから、わかったことだが、高校天体観測クラブの顧問をしている丹羽もいっしょに行ったのだった。妻子のある人なのに麦子は心を寄せているのだろうか。何が主目的かわかったものではないと、善平は思った。
　家に帰り母に姉のところへ寄っていたと言うと、母は麦子のオーストラリア旅行を非難した。ふたりの子がそれぞれに趣味の範囲を逸脱していることを嘆くのだった。母としてはふたりが順当に結婚したり、こどもを授かったりして家庭を築いてほしいのだ。善平とて母の願いがもっともであることはよく理解している。
　善平が卵カプセルの蓋を開けて中へ入り、エアコンのスイッチを入れたり、錠の調子を見たりしていると、そばへ来て母は批判めいた顔つきでじろじろと見ている。
「ぜん、あんた、これは外からはどないして開けるんや。つるんとしていて把手があらへんやないか」
「中から開けるでこれでええのや。外からは蓋と実の境にある凹みへ指をかけて開けるんや。ただし、中から錠をしたときは外からは開けられへんよ」
「ええっ。中から錠かけるんか。なんでやな、また」
「入ってる時に勝手に開けられたら困るでさ」

「善ちゃん、ばかなこと言わんときな。中もええけど、外からも鍵で開けられるようにしておきな」
「鍵はないの。数字で合わせるんや」
「ぜん。それは危険やぞ。かあちゃんの言う通りやぞ」
いつ帰ったのか、父が言葉を挟んだ。
「これでいいんだ、これで。自分のことは自分で責任持ってやるでな。こどもじゃあないんや」
何も言わせないように善平は語気強く言い放つと、電灯を豆電球にして卵カプセルの中へ入り込んで蓋を閉めた。
ぶつぶつ言いながら両親は居間へ引き揚げていったような気配だが、蓋を閉めればほとんど外の様子はわからない。

八月下旬、何年振りかで両親は旅行にでかけた。比較的に仕事のひまな時期を選んで、バス会社のパック旅行に参加したのだ。仕事が車の運転なので、せめて慰安旅行の時ぐらいは客の立場に回りたいとバスに乗り込んでいった。
留守を預かった善平は、かねてからの計画を実行するよい機会を得た。だれもいない今こそ心置きなく卵カプセル本来の使い方を試すことができる。善平は家の門を閉め、家全体を念入りに戸締まりをした。外からどう見ても留守に見えるようにした。わずかに善平の部屋のエアコンの室外機だけが静かな音を立てている。

「ようし、きょうはいよいよやるぞ」
善平は声に出して気合いをかけた。彼は裸になって卵カプセルの中へ入った。今は電気毛布の代わりに夏布団に絹のシーツを掛けてあるので、素肌にひんやりと心地よい。蓋を閉めてロイヤル錠をかけた。漆黒の闇が善平を包んだ。彼はふーっと大きく息を吐いた。
（親父とおふくろはいまごろ日頃は飲まないビールでも飲んで、旅館の一室でのんびりしているだろう。貧乏性のふたりはひまな時間を持て余してテレビを見るしかないのではないか。姉ちゃんはいまごろ観測かな。時差はあまりないのだから多分そうだろう。ホテルは丹羽さんと同室だろうな。そうでないと旅行の意味がないもんな）
（待て。こんなこと考えるためにここへ入ったんじゃあないぞ。今日は心のうちなるゼンペイとの対決なんだ）
眼前がうっすらと明るんできた。眼が闇に慣れてきたのだ。部屋の電灯は豆電球にしてある。それでもどこかから入る光があるのだろう。さらさらとした感触のシルクのシーツの上に善平は仰臥して全身から力を抜いた。からだのどこにも負荷はかかっていない。半眼いっぱいに広がる視野は一面の灰色である。眼を閉じればその灰色はいっそう暗さを帯びてしまう。
原初、幼い善平は狭い場所に隠れるのが好きだった。タンスと壁の間、押入の下の布団と衣装ケースとの隙間。そ

こには秘密の匂いが漂っていた。かび臭い、誰も嗅ごうとしない湿った匂い。そこでじっとして隠れていた、誰に探されるという当てもなく。成長するにつれて、狭小志向はいっそう強まっていった。小学生のころ、トイレはまだ便所と言った。汲取式で和式便器だった。下には大便がうずたかく盛り上がり、強烈な匂いを発していた。だけど、善平には一平米の個室の楽しさの前にはその匂いは気にならなかった。便器に跨がって茫然と突っ立っていた。便臭が真下からやってきて鼻を刺した。チャイムが鳴って止むを得ず教室へ戻る途中、服をはたくと便の匂いが微かに漂った。中学高校のころにもその癖は続いた。
そうして今に至ると、善平は狭小志向の来歴を辿ってきたが、どうしてそこまでして狭小にこだわるのかを今夜はここで追求したいと思った。
自分の孤独癖がそうさせるのだ。しかし、それでは答えたことにならない。それがどこから来ているかを問うているのだから。本当は人と仲良くしたい。だが、その自信はない。なぜ。人が信じられないからだ。人が鬱陶しい。自分と同じような人が。人は自分だけでたくさんだ。では、それはなぜだ。おれは人と向き合う自信はないが、自分には自信を持っているのだろうか。また、こうも言えようか。当事者になりたい。本当は大勢の人が群れて何かやっているのに加わりたいのだ。でも、加われなくて少し離れて見てしまうのが自分ではないのか。身を避難場所に置いて。
こうして狭小願望が高じてカプセル・ホテルのカプセルを買って自分の部屋へ設置してベッドとし、さらにそれに飽き足らず、美容用のカプセルを改造して繭状態にして、いま入っている。これはいったい何だろう。厭人癖からくるものか。考えて出てくるのは対人関係のことばかりだ。対人のことならば、何もここにこもってひとり思い悩むことはない。人はだれでも人間関係で悩んでいる。社会生活はすべて人と人とが絡み合ってできている。人が嫌いだといって狭小の場へ引っ込まなくても、もっと他の逃げ場はあるではないか。オタクといわれる人たちは普段は普通の社会生活を送りながらそれぞれの分野で幅狭く奥深いオタッキーなコレクションなどへ沈潜している。この間もN市の盛り場の広場で行き交う人々の前で中年の男がマジックを見せていた。だれひとり見ていない前で黙々と演じていた。その眼は全く人を気にしていなくて、ひとり陶然と自分の世界にはまり込んでいた。おれはこれなら何も盛り場でやらなくてもいいのではないか、だれもいない寺の境内でやればよいと思った。
狭小でなければならない理由、カプセルでなければならない理由があるはずだろうに。そこにひとり閉じこもってどんな結果が得たいのか。善平とゼンペイの対話が始まった。

狭い所は人を落ち着かせる。卵カプセルはある種の圧迫感がある。これが考えを進めさせるのさ。いや、結果をすぐ求めるな。入る前からわかるものか。もうひとりのゼンペイが言い返す。

環境は精神に影響する。卵カプセルは自分の精神を変える。それを期待してここへ入ったんだろう。どう変わると期待しているんだ。さきほど言ったように落ち着きたい、楽になりたいんだろう。

不安な気持ちが安定したものに変わると思ったと答えてほしいのだな。環境は精神には影響しない、おれの場合は。おれの精神がおれの環境を変えるんだ。おれが発想してこの繭を作ったんだぞ。ゼンペイは負けていない。

じゃあ、その精神を説明してくれ。この繭のような卵カプセルという環境を作らせるに至った精神を説明しろよ。

精神といっても高邁な思想があるわけじゃあないよ。思いというか心とでもいったほうがいいんだけど。八畳の部屋にベッドを置いて寝るよりカプセル・ホテル用のカプセルを置いて寝るほうが快適なんだ。だったら、さらに狭小化して車の屋根に載せるキャリーみたいなカプセルを作ったら、もっといいんじゃあないかと考えたのさ。要するに狭小志向が極端になったってわけさ。

卵カプセルの中でふたりの善平とゼンペイの対話は続いた。そこで自己を突き詰めて考えるのもいいよ。安らぎを求めるのもいいさ。だけど、こんな所へ入ったからといって何か特別なものが出てくるものでもないと思うよ。

堂堂巡りの思案を繰り返すうち、善平の半眼は次第に閉じていった。もうろうとした意識にいろいろなものが浮かんでは消えていった。そのうち、それもなくなって意識は深い闇の中へ落ちていった。

深い眠りから善平は尿意で覚めそうになった。うーんと腕を伸ばそうとすると、手先が何かに当たった。はっとして眼を開けて、初めて卵カプセルの中にいることに気付いた。

そうだった。いつのまにか寝込んでしまった。空気が生暖かい。肌がねっとりと汗ばんでいる。からだの節々が痛い。起き上がろうとして、薄暗い灰色の蓋がすぐ目の前に迫っていて座ることができないことに気がついた。尿意がますます膨らんでくる。とにかく出よう、と思って手探りで頭部の周りのシーツを撫で回した。だが、ない。鍵がない。あ、そうだった。ロイヤル錠だったのだ。あわてて錠前を探りあて、凹凸を指先で感知して、さて、ナンバーを合わせようとしたが、ナンバーが出てこない。番号が思い出せないのだ。

ええっ。はっきりと目覚めた。愕然とした。四つの数字を指先で感知する突起を頼りにして合わせるのである。その数字が思い出せないのだ。四数字の順列が鍵なのである。

「たしか……五七……えーっと、五七三、いや……」

声に出しながら、額にじわっと脂汗が滲みだした。ひくっひくっと喉が鳴る。からだを横にして左の肘で体重を支えながら錠前に両手でしがみつく。五・七・三・四か。指先で突起を回して、引っ張っても開かない。

「おかしいなあ。たしか……五・七・三……」

深いため息が続いて出て、肩で大きく呼吸した。たしか五七は間違いないなあ。その次が……出てこないなあ。でも、とにかく四数字を入れてみないことには開くわけがない。五・七・四・六か。だめだ。五・七・六・四か。だめだ。七・四・六・三か。やっぱりだめか。七・三・六・五。五・七・四・三。開かない。七五三六。……七四五六。……

声も出なくなった。喉がからからに乾いてきた。ハアーっと息をつく。空気がむんむんする。吸う空気がまるでガーゼを口の中へ押し込まれたようにもったりしている。

「落ち着け、おちつけ」

声にならない声で自分に言い聞かせた。どうして忘れてしまったのか。あんなに何十回も繰り返して覚えたはずなのに。それにしても、とにかく今は水、水がほしい。小さなペットボトルぐらいは持ち込むのだった。

しかたがない。こうなったら母に開けてもらうしかない。大声で呼ぼうとして、息を飲んだ。両親の不在に今になって気が付いた。姉のことも。

パニックが起きた。善平はもう何が何だかわからなくなった。意味のない声がほとばしり出た。手と足で思いっきり蓋を突き上げた。しかし、蓋はびくともしない。両足を揃えて力のかぎり蹴り上げた。プラスチックの蓋は鈍い音を立てるが、隙間も開かなかった。

深い絶望がぐったりとした彼を襲った。

「もうあかん。ああ。もうだめや」

泣き声でそうつぶやいた。全身ぐっしょりと汗にまみれている。尻のあたりに温かい水が溜まっている。いつのまにか失禁したのだ。全身を脱力感が覆い、善平は気を失った。

どれほど経ったのか、意識が甦った。耐えがたい息苦しさと蒸し暑さがカプセル内に充満していた。善平は口を大きく開けて、はっ、はっ、はっ、と短く喘いでいた。もう動く気力もなかった。

（出たい。広いところへでたい）

新しい空気がエアコンとのパイプを通して入ってくるが、吸気と排気の量が不均衡なのか、カプセル内は古い空気が滞りがちのようである。善平は頭部の先にある排気口に口を近付けて深呼吸をしてみた。心持ち酸素の多い空気が吸えたように思えた。

息が少し楽になると、今度は喉の渇きが耐えがたい苦し

みとなって押し寄せた。喉が呼吸のたびにひゅうひゅうと悲鳴を上げだした。とにかく喉を湿らせたい。善平はふと気がついて尻のあたりに手をやった。溜まっていた尿はもうシーツに吸い取られていたが、まだ濡れている。善平は手のひらを窪ませ、シーツに押しつけて尿を掬いとろうとした。だが、手のひらが少し濡れた程度だった。その手を口へ持っていって舐めてみたが、塩辛さを感じただけで水分は得られなかった。今度は力を振り絞ってうつぶせになってシーツに含まれた汗を口をつけて吸ってみた。やはり塩辛い湿り気を舌に感じただけであった。

息苦しさに耐えかねて、また上向きに姿勢を変えた。その時、顔にぽとりと滴が落ちた。うっすらと灰色がかった蓋の裏側から滴った水滴だった。

「ああっ、水や」

善平は夢中で両肘でからだを支えて蓋の裏側に口をつけた。数滴の水が舌を潤した。真水だった。内部の湿気が蓋裏にあたって水滴となったのだろう。彼は夢中になってつるつるのプラスチック板を吸い続けた。わずかな水滴は舌を伝って喉を潤した。喉が少し濡れて焼け付くような渇きが一瞬癒された、と思ったら、前にも増した激しい渇きが襲ってきた。善平は狂ったようにからだをくねらせて、口の届く限りの水分を吸い回した。口の届かぬ下半身のほうの天井は手のひらで撫で回して、濡れた手のひらを唇で吸い取った。

しかし、それは知れたものだった。ほんの数ＣＣの水が却って彼を余計に苦しめる結果になった。彼は半狂乱となって狭い卵カプセルの中でのたうち回った。

そうした時に、ふと苦痛の和らぐ瞬間があった。一息ついて善平は自分がこうしてカプセルと称する小さなプラスチックの容器に自らを閉じこめて、自身の内奥と向き合うことに安息と存在の確認を求めようとしたことの意味を考えようとした。しかし、その思考は現在自分が置かれている状況のためはかどらず、己れの軽薄さと至らなさを慙愧の念で苛み、自嘲するばかりだった。

「あほはどこまで行ってもあほやなあ」

眼に涙を浮かべてぼんやり東の間の安らぎをむさぼった。

「おれって、本当は人並みに支配欲や権力欲に憧れていたんじゃあないのかなあ」

狭小な世界ならおれでもなんとかなるって思ったのかもしれない。幼いころから狭い空間が好きだった。仕事も転々とした結果、狭い運転席というところに居場所をみつけた。狭小にこだわり続けた末に辿り着いたこのカプセルの中で、さて、何か崇高ななにものかを自分の中から取り出そうとしてなにもないことに索漠とした。善平とゼンペイの二項を立ててみても、ないものはないだけだった。

渇きがまた襲ってきた。間歇的に苦しみがやってくる。好んで狭さを求めた自分が、いまそれに苦しんでいる。狭小の魅力はいつでも出られる自由があっての話だった。善平は芋虫のように全身を伸縮させながら、微かに湿る天井の水分を舐め取ろうとする。

絶望と疲労が善平の気力と体力を著しく減退させた。彼に二度目の意識の阻喪が始まったようだ。口を排気口の近くに寄せたまま、眼は虚ろに半眼にしてうつらうつらとし始めた。小さな繭の中でもがく幼虫のような善平を外からもうひとりのゼンペイが見下ろしているのを、彼は脳裏のどこかで漠然と意識しているようだった、……茫漠と。

だれもいないひっそりとした小さなタクシー会社の一室でひとつの大きなカプセル様の卵が青白い光を放っていた。中で何かうごめくような気配がする。何かが孵（かえ）るのか、それとも孵る苦しみに耐えきれなくてそのまま孵れずに終わるのか。白い光沢のある卵は青白い光をかすかに明滅させている。

大西　亮

おおにし　あきら

1932 名古屋市生まれ
56 三重大学学芸学部（現教育学部）卒業
56 ～ 93　三重県公立学校勤務
93 ～現在まで　公立高校・三重大学・松阪大学短大部・東海学園大学（名古屋）各非常勤講師（図書館学）
所属同人誌 「北斗」（名古屋市）

同人雑誌優秀作

渤海 57号

風景——月壷——

山口 馨

「あ、ここでいいよ」

その日、耕平は大通りでタクシーを停めさせた。「二丁目はもう少し先ですけどね」と、多少の親切心もあってか運転手が渋ったのを構わずメーターを読んで「釣りはいらない」と四千円を料金皿に置いた。

路肩に寄せた車から出ると、草の匂いが鼻を衝いた。空き地の草でも刈ったのだろうか。ここしばらくは出張に合わせる形で年に一回ぐらいしか実家には顔を出さないが、三十年近い年数の間に、田んぼが広がっていた地域に随分家が建て込んで、様子がすっかり変わってしまった。それでも近辺に草に覆われる地面がまだ残っているのか。逆に人の手を離れた土地が現れたということなのか。馴染みが既に薄くなっている耕平には判断がつかなかった。

家までの十分弱の距離を歩くことにした。タクシーで乗り付けてしまうほど、きっぱりとした思いがあるわけでもなく、どうでも急がなければという用でもなかったのだから躊躇いが先に出た。気持ちの決まりがつかないまま、他愛ない時間稼ぎのように歩いている自分が馬鹿馬鹿しくもあって、小さく舌打ちをした。馬鹿ついでにと軽口をたたいてみる。

「駅からほぼ四千円。近くもないし安くもない」

会議などの出張で顔を出すこの市の支店は、人通りの多い場所ということで昭和五十年代に駅前に開設されていた。だから、どうしても駅を起点として考えてしまう。

「バスはあるにしても、この頃では本数は限られたもんだろう。行きはいいが、遅い退社には不便だよ。毎回タクシーという訳にはいかないじゃないか」

軒を並べた今時の造りの家々の前庭には駐車スペースが確保されている。この辺りの勤め人は自家用車を使うのだろう。そう、車があれば問題はないわけだが……。それでも不都合を敢えて数え上げようとしている。

そうなんだよ、と、重ねて思う。自分がここに住む必要がそもそもあるのか？

道沿いに廃業した鉄工所があった。いつだったか、夕方になっても日脚が遅い季節に前を通って無残だなあと感じたことがあった。その時と変わらず破れたシャッターがブランと下がり、窓ガラスが割れたままだ。放置され、朽ちるのを待たれているのか。壊すにも金がかかるからだろうと、実情を知らない者にも察しがつく。既に人手に渡っているのだろうけれど、新しい所有者にとっても厄介な代物ということだ。

耕平たち宮本の家族が代々の住処を離れて町に引っ越した直後から、職を探す傍ら暫く父がここで手伝い仕事をさせてもらっていたことがある。県境に近い山間の集落で木材の切り出しを生業にしていた父に鉄は扱いかねたか左手の指先を一本潰している。木材の伐採の方が危険は多かったはずだろうに、小さな作業所の中で加工機械の扱いを誤ったのだ。当時の父の荒んだ心持が招いた不注意のせいだ。

赤ん坊を抱えた知らない若い女を父が伴ってきた。七才になったばかりの耕平と父との四人の暮らしが始まって間もなくの出来事だった。赤ん坊は亮太という名で、耕平の弟だと父が言った。

耕平の母は元の家から出かけたままずっと帰っていなかった。新しい母になった多恵子が先妻の息子に教えるのも奇妙な話だが、父の再々の「お遊び」に耕平の母が逆上したのだという。子供心にこの多恵子という女の心根に何かしら卑しさとでも言い得るものを感じたものだ。多恵子絡みの不祥事で父は村にいづらくなったようだ。長く引き摺ったゴタゴタを清算して出直しを、と思ったのかもしれない。だが、親の勝手に振り回された子供はどうなる？

いきさつがどうあれ子供を置いて出た母は到底許せるものではなかったけれど、耕平は恋しくて隠れて泣いた。恋しさが募るほどに、憎さが膨らんだ。そうさせた父に反発し、疎ましさが胸に居続けた。多恵子には遂に親しむことはなかった。何も知らない胎違いの弟、亮太に対しては消しようのない気持ちの引き攣れを悩ましく思うことがあった。

実家ほど古くはないまでも、そこそこ年期を経た家は、その庭の佇まいで家庭の情況が想像できる。草が繁るに任せているか、これはもう除草剤をタップリ撒いたとしか思えない枯れ色の庭は、世話をする人間が老いたか亡くなったかだろう。庭土が剥き出しのまま均されていず、木屑やプラスチック片が散乱しているのは男手しかない家だ。もし女が居てもそうなのだとしたら、病気をしているか感覚が雑な、タチの悪いタイプに違いない。

父の家はどうだったか。咄嗟には思い浮かばなかった。この数年、夜に訪ねてその日の内の電車で帰京する繰り返しだった。仕事の都合と理由をつけて長居はしない。「一晩泊るくらいのことができないのか」と父が苛立った声を上げるのも無理はない、とは思うものの、改める気にはならなかった。

「明日の午後寄るよ」と電話をした今回、「昼間に？　珍しいな、泊まれるのか。泊まるなら鮨でもとっておくぞ」と弾み気味だった声の調子が、「いや、帰る」の返事を聞くや急にくぐもった。「お前は一体……」と続く毎度の繰り言は聞き流した。

耕平の足取りは鈍くなった。全体、俺はどうしたいと思っているのか。郷里に戻る気があるのか、ないのか。打診された郷里にある支店への転勤を受ける気があるのか、ないのか。

数日前、定例の営業会議を終え、席を立とうとした耕平を部長の吉田が呼び止めた。

「宮本君、出身は北陸だったね」

「はい」

「いいところだ」

「はあ……」

「食べ物が旨い」

会議のメンバーは引き上げて部屋には部長と二人だけだった。この手の話の寄せ方は、お定まりのアレと、経験のある者にはわかる。が、何気ない風を耕平は装った。

「十八から外に出ていますので」

「子供で、旨いものを食い損ねたか。そりゃあ、残念なことだったね」

横に座るようにと、部長が隣の椅子を示した。

「実は……」

来たぞ、と思った。

「北陸の次長が早期退職を願い出てきたそうだ。体が思わしくない。癌の転移だ。何回目かになる。休職が度々で、職務の点では会社としては不満があるが、こればかりはしようがない。病を得てしまった人間も抱えることができる程度の会社ではあると、まあ胸は張れるんだが」

「その話は聞いています。支店長の頑張りも」

「そうなんだよ、よくやっている。次長の定年扱いが適用される年齢にな

るまではと、温情溢れる、というか義侠心に富んだというか、交替や補充を訴えてはこなかったからね。しかしこれは特殊な例だ」

それから部長は首を捻って耕平の顔を覗き込んだ。

「仕事ができる人間が欲しいと、ようやく言ってきた。何人か候補は上がっている。昨今の景気だ。その顔触れの中には役職不足で声がかかるのを長く待っている社員もいる。適格者には違いないんだが、巡り合わせというか順番が廻って来ず、ま、不運を託つ者もいる。一人一人の事情を勘案しているとキリがなくてね。言うまでもないが、選任の第一の条件は会社にとって役に立つかどうかだ。将来性も考慮に入れて」

そこで、部長は一寸居ずまいを正すような仕草をした。

「僕は君を推したいと内々思っているんだ」

この推挙が別格の配慮だと匂わせたが、それに応じる可能性があるような仄めかしを即座に示すわけにはいかない。耕平は深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。お気に留めて頂いて本当に嬉しいです。ですが私にはまだ荷が重いと申し上げるしかありません。若過ぎます。経験も不足です。それに本社で取り掛かったばかりの仕事もあります。ご厚意には感謝しますが……」

「君は来年五十才になるのだよね。若いと言っていられる年でもないだろう。抜擢人事は珍しいことではない。仕事が出来るかどうかだよ、会社は。見る人は見ているものなんだ。それに、君の言う懸案というのは『支店経営の効率化』でしょ。北陸をモデルケースにして実践できるじゃないの」

折角の美味しい話が歓迎されていないことは、耕平の様子から直ぐにそれとわかったろうし、意想外のことと受け取ったには違いないが、部長には翻す気配がなかった。つまり、周辺の固めはある程度進めてある、と読めた。人事異動は多くの場合、本人が知るのは一番後なのだ。

だが、この時点では未だ命令ではない。決定までは多少の緩みを持たせているはずだ。横槍を入れる役員や部門もあろうし、稀なことだが、本人が強く辞退する場合も有り得るからだ。

「時間はあるから考えてみてよ。君を送り出すのは僕としては本当は困るのだが、部下の出世を阻むようなことは控えなくちゃね。それに君は工場は別として全国の支店のほとんどを経験しているのに、ただ一つ、北陸だけがまだだ。ほら、ふるさと孝行のチャンスでもあるじゃないか。それを邪魔立てすることはできないでしょ、僕には」

冗談じゃない。「孝行」だって?‥ 耕平は胸の内で呟いた。俺はふるさとなるものは棄てられるものなら切り離したいとまで思っているのだ。こんなにも時間をかけ、距離を隔てていても、あの場所と人との関わりはずるりと粘って平静でいることを妨げる。自分の中の暗渠だ。俺は、心の強さが足りなくて完全に断つことができないでいる軟弱者なのだ。口惜しいがそうなのだ。それは認めざるを得ない。

だがしかし、来年度のこととは言え、ここまで明らかに示されている昇格人事を断れるのか。当面は支店長代理ということだが、支店長睨みの配置だとも部長は言った。それは、出身地に会社の拠点がある社員にとっての最良の着地点だとされていた。が、一方では、余程の功績をそこで挙げない限り次がないに等しいということでもあった。

耕平が惑うのは、名目がどうあれ郷里に放たれきりになるには自分がまだ若過ぎ、だが、断って上層部の不興を買えば今後の会社生活に好ましからぬ影響を及ぼしかねない、との慮りの故だ。

そして何よりも耕平の気持ちの枷(かせ)になっているのは、郷里への、父への、父の家族への、抑えの難しい不穏な感情だった。

今、通りに面した住宅のどれかで表を眺めている住民がいたら、不審な中年男と警戒心を起こされるかもしれないなと思いつつも気持ちはあらぬところに向いていく。足を速める気にはならなかった。

それというのも、つい三十分程前のアクシデントが気持ちを翳らせていたからだ。

電車を降りようとした足がステップで動かなくなったのだ。後ろの客に「すみません」とかけられた言葉の、優しさとは裏腹のなじるような声音に促されて何とかホームに降り立ったが前に進めなかった。訝しげに振り返り振り返りして改札口に向かう何人かの乗客の視線に曝されて立ち尽くしていた。

異常を察したらしい駅員が駆け寄って来るのを見た時になって、ようやく呪縛が解かれたかのように体がフッと軽くなったのだ。

今のは何だったのか、探るような思いになっていた。

日頃、仕事で移動する車中では、懸案の仕事を持ち込んでパソコンを操作するのが常だが、何故だか今回は乗り込んですぐ眠気に襲われて作業が捗らず、諦めて座席を倒した。そのまま二時間以上、眠り込んだようだ。だから、目的の駅名を告げる放送に気付いて焦ったのは確かだ。

夢を見ていた。数表を作ろうとして定規に沿ってペンを運ぶのだが色が出ない。次々とペンの色を変えるのだが、一本の線すら引くことができない。そうだ、パソコンがあった、と勢い込んで開いたが「罫線」が選べない。あたふたしている耳に「間もなく……」の声が届いたのだった。

いい年をして寝惚けた、はないだろう。納得できなかった。恐らく、こしばらくの気持ちの乱れのせいだ。まとまらない考えを転がした挙句、迷路に迷い込んだものか。その不安な気分が、体か頭に小さな悪戯を仕掛けたのだ。

嫌なのか。ここへ帰るのが本当は嫌なのか。初めに自分に問いかけたのが、それだった。そう思わせる原因がもう一つあった。

先週の土曜日の午後、水島靖子と、いつものホテルで落ち合った。靖子が部屋に入るや否や、気持ちの騒ぎが体を煽ったか、靖子が「待って、一寸待って」と遮るのに構わずベッドに倒れこんだ。耕平の昂ぶりに染められたか、靖子も恥じらいを忘れたかのように応じた。

こんなにも、と驚くばかりの汗を滴らせ、ぬらぬらした体をようやく離した時には精根尽き果ててベッドに沈むしかできなかった。

どれくらい時間が過ぎたのか、フッと気付くと靖子がタオルで耕平の全身を拭いていた。

「何かあった?」

流石に声には気だるさが残っていたが、日頃になく問いかける声が優しかった。切羽詰まり、甘えて訴えかけたい男の気持ちを感じ取ってくれたのだろうか。

部長の、例の話をした。行きたくはないが、どうしても動かざるを得ないのであれば……。耕平の中には靖子への微かな望みが生まれかけていた。それが適うのであれば、他のことがどう転がるにしろ局面が開けるように思えた。

いつものように、とは言え、二人は将来に約束を交わしているというわけではなかった。暗に決めていることは、会いたくなった方から連絡し、ホテルを手配する。せいぜい月に一回程度のことだから靖子が嫌う、その関係のためだけの施設を利用することはない。当然、耕平からの誘いが多かったが、靖子から突然メールが入ることもある。会って、睦み、また会うという大人の関係だ。

耕平はともかく、靖子はそれ以上を望まなかった。それぞれの住居を訪ね合うことはしない。互いの事情は当人が話す以上には踏み込まない。そうして三年を経ていた。

二人はビジネスマン対象の英会話教室で知り合った。四十六才と三十七才という年齢は、若いか年配かに二極化しているその教室の中では妙に浮いた存在で、相手を意識し合うようになるのは自然な成り行きだった。覚えの良さも、忘れることの速さにおいても似通ったところがあり、恰好の仲間を得たことになる。

仕事帰りに寄る教室は駅前のビルにある。勤務先に近い場所よりも、乗り換えなしで自宅に帰ることの出来る駅と考えて神保町を選んでいた。耕平は大手町から。靖子は市ヶ谷からの中継点なのだ。

目礼が声に出しての挨拶になり、ホームまで一緒に、が恒例となった。靖子は板橋に帰り、耕平は菊川に向かう。連れ立っていられる時間は短いが、それなりの会話はできる。

教室では英語で自己紹介をすることになっているからどちらも名前は既に知っていた。生命保険会社に勤めているという靖子のことを当初から三十代半ばかと見当はつけていた。だとすれば家庭持ちではない可能性が高い。仕事上どうしても必要で勉強しているという風でもなかった。「英語がお好きですか?」と聞いた耕平に、靖子は頭を振った。

「教室通いは気晴らしです。会社と家との往復だけではつまりませんから」

はぐらかすような言い方に聞こえたが、それは靖子にとって素直な思いだったのだ。家では両親が待っている。長患いの、ほとんど寝たきりの母を、間もなく七十になる父が介護しているという。十年も前からその状態

だ。兄が二人いるが外に出ているから、実質自分が暮らしをみているようなものだと、さらりと話した。

週一回の気晴らしは本当のところだろう。派手さこそないものの、働く女の凛々しさとでもいうようなものが滲み出ていて好印象を人に与える。そんな靖子だったけれど、話の端々から痛ましさを感じることが耕平には何度かあった。なまじの賢さが、この女に息苦しい生き方を多分採らせている。

靖子が問いかけた。

「宮本さんはお仕事で？」

「本社に転勤になりましてから外国人と接触することもありましてね。何しろ錆び付いてますでしょう英語力が。水島さんのお蔭で教室通いが続けていられるようなものです」

それは本当だった。勤務先は水廻り機器の大半を製造、販売している会社だ。その業界では大手であり、国内だけではなく海外にも進出している。殊に最近、海外からの照会が増えており、訪問される場合もあるから、自社品の先進的な部分を正確に伝えたかった。

この対応の成否は、輸出増以上に海外拠点の設置を促すことにもなろう。それなりの人材を抱える社内で選任されることはまずないとは思いつつも、耕平に海外駐在という、ささやかな期待を抱かせるものでもあった。勿論、仕事を抜きにしても外国人との会話がもたらす高揚感は快かったから、とにかく生の英語に触れる機会を多くすることだと思って通っている。

靖子は、実技としてディベートも取り入れるクラスで、小生意気な青年にも訳知り顔で偉そうな年配者にも論戦で引けを取らなかった。達者な英語であり、話の運びだった。それには一目置くとして、耕平には靖子がどこか無理をしているのでは、と思えることが度々あった。そして、その頑張り方の内側に自分と似た匂いを嗅ぎ取っていた。

堪えている何かを持つ女は心に華奢な部分を隠しているものだ。丁寧に優しくと耕平は接し、それができる自分にハッとするところがあった。

土曜日は家事で忙しい、と固辞する靖子を、「月に一度くらいは遊ばないと」と、ドライブに誘った。「不甲斐ないがまだ独り者だ」ということは既に告げてあり、「後腐れのない安全牌ですよ」と悪ぶって見せもした。

耕平の車は、入社した最初の勤務地大阪で手にしてから五台目になる四輪駆動車だ。休日には関西近郊の山道を六甲も伊吹も高野山も、気が向けば走った。地元の人間より、殊によると道を知っているかもしれない。九州も東北もその他でも、新しい任地の楽しみはそれだった。

東京に来てからもかなり廻っているから、東京で生まれ育ったという靖子を案内することに怯みはなかった。地元の人間が、自分の住んでいる土地についてほとんど無知に近いことを耕平は転勤の都度、実感していた。夜、家を空けることは避けたいという靖子に日帰りのできる景勝地や公園や美術館を知っているだけ列挙し、根負けした靖子を笑わせることができたのだ。

土曜日、神保町まで出てきた靖子を拾って、何回かかけて近郊を廻った。次第に長駆して那須、潮来、勝沼などへと動いたりもしたものだ。

道中、一人で出かけた山道の話をよくした。高野山から足を延ばした熊野の山の果てしもない深さ。前後を走る車が全くいない未舗装の道を、ブナ林に一人抱きこまれるようにひたすら登り下った白神山地。月山の麓、肘折温泉からカーナビすら行き迷う山道に流石に緊張して必死に運転した、などと。

聞き終えると、「面白い旅をなさるのね」と靖子は深く息を吐いて、それを言う。耕平には切り出しかねている言葉があったのだが、その折を決められないでいた。

二年前、真鶴の三ツ石海岸で眺望を楽しんでの帰り、風邪気味だった靖子が相模湾の海風に当たって熱が出たか、ひどく具合が悪くなったことがあった。

少し体を休めようと湯河原の古びた宿に逃げ込んだ。心配してくれた宿の計らいで客室を使わせて貰った上に薬も準備してくれたのだ。

仮眠から醒めた靖子が、傍らで付き添っていた耕平の膝に置いた手に、手を重ねた。湿った柔らかい手だった。それが二人の最初だった。

「私、結婚していたことがあります。出戻ったものですから、両親と暮らすことになって……」

耕平は労わるように優しく抱いた。結果として靖子に将来を見切ってしまわなければならなくさせた結婚生活とは、どんなものだったのだろうと思いながら。

全国の支店を三年、五年と転々とする間には結婚を前提に付き合いをした女が何人かいた。どの場合も女の側がそれを求めたからだ。その癖、どの場合も女の心変わりで終わっていた。理由は様々に言われたが、要は耕平の冷たさだという。それに付いていけないのだという。

耕平にすれば、多少の見てくれの良さだけを武器に、学歴や家柄などの条件で人生を計算する女は、醜いは言い過ぎとしてもみっともないのだ。そんな女は願い下げだという気持ちがどうしても態度に出る。

だが、独身を続けてきてわかることはある。家庭や家族という鎧なしに世の中を渡ることは、なかなかに難しいのだ。一般的でない人間は弾かれることが多い。奇異な目で見られさえする。つまるところ、他人を安心させない在り様なのだ。

体の騒ぎだけなら鎮めてくれるシステムが、昔ほど容易ではなくても世の中には一杯ある。金で済む。ドライな関係だが、夾雑物がない分、純でもある。だが、どこかに自分の空隙を埋めてくれる存在があるはずだ。耕平はずっとそれを探しているということになるのだろうか。

「どうなさりたいの、耕平さんは」

一緒にパスタブに浸かり、体を洗い合いながら靖子が聞いた。

「考えている。と言うか、悩んでいる」

「いいお話じゃありませんか。上司の方は不思議がっていらっしゃるわ。何故直ぐにお受けしますと言わないのか、と」

「部長は俺のことを知らない」

「その点では私も同じ」

「それはないだろ、君とはこんなこともしている」

耕平は背後から抱きすくめた。靖子は俺が初めての男ではなかったが、俺との関係で安らかさを得ているはずなのだ。だが、耕平の為すに任せたまま靖子が呟いた。

「お会いできなくなりますね」

「簡単にそれを言う？」

「いつかこういう時が来ると思ってましたから」

その言葉に、謂れのない怒りが湧いて、険しい声を耕平は上げた。もしかしたら、それは悲しみだったのかもしれないのだが。

「一体、何人の男にそれを言ってきた？　飽きたか、え、俺に飽きたか」

靖子は浴槽から立ち上がり、抑揚のない言い方で耕平を見下ろした。

「ご一緒できないのですから、しようがありません」

父の家の前に立った。剪定が十分にはされていないのであろう樹木の繁茂で庭の内が窺えず、見上げると黒い屋根瓦が西に傾き始めた日の光を反射していた。いるのか、いないのか。ここまで来ていながら、耕平は留守であればいいのにと、踏ん切り悪く佇んでいた。

「屋根を葺き替えることにした。台風で何枚か落ちたので上がってみたら、割れてしまっているのが多くて」と、父が電話してきたのは大分前だ。確か、父の退職後だ。聞かされてしまえば援助しないわけにはいかない。

間をおいて、「深夜温水器を交換することにした」と、電話の終わりについでのように父が言ったこともあった。その時も金を送った。

ある出来事のせいで仕事ができなくなり、数年間、家に籠っていた亮太に仕事口が見つかった。ようやく動く気になってくれたと嬉しそうに報告してきた話の中にも、「通勤のための車を準備してやろうと思う」が、挟み込まれていた。「ともかく今度は安全な車をと、探しているところだ」と。多少の衝撃にはこたえない車となれば……。自分なりに見積もって、半額相当を準備した。

父には、無心をしたつもりは多分ないのだろう。そう得心しながらも嫌な気持ちになっていた。一方で、嫌な気持ちを正当化しようとしている自分にも拘るものを感じていた。何の疑念も持たぬげに、離れて久しい息子に引き綱を曳くように親子の繋がりを求めて声をかけてくる。それはその都度、耕平の屈託を炙り出す。目を背け、体をかわしても、いつまでも纏わりつかれたままで抗しきれないでいる。耕平はそれを自分の弱さだと思っていた。

「おい、耕平、何してるんだ、道に突っ立って」

父の声が呼びかけていた。敷地の南側に道路が走る住宅地では、庭が建屋と道との間に位置していることが多い。父は南に面した縁側から庭木の隙間越しに息子の姿を認めたのだろう。

玄関へ続く敷石を歩きながら庭を窺うと、盛んに伸びる季節にもかかわらず草がスッキリと刈り取られ、ここは確かに老人のいる家だった。

座敷というほどの代物ではないが、恐らくこの辺りの新築の家にはない広縁が開け放たれていた。グラスと乾き物の袋が小卓に載っていた。耕平は待たれていた。卓を挟んで向かい合って置かれた座布団の一つから父が首を巡らして耕平を見上げた。色の褪せた冬座布団が腰の下に覗いていた。七十三才の背中が丸かった。力仕事で酷使してきた体だ。耕平は視線を庭に外した。

「こっちの用はもう済んだのか」

「大阪で会議だったんだ。思いついてこっちへ回った」

「思いついて？」

不審げな父に構わず、話を変えた。

「亮太は仕事？」

「ああ。お蔭さんで続いているよ、なんとか。あのまま閉じ籠りきりになったらと、胆が冷えたが」

二台分の駐車場を取るため庭は手狭になっていたが、少しは手間が省けて、世話が行き届かなくなる恐れは先延ばしになったというものだ。

耕平が「多恵子さんが逝ってから」と言い掛けた時、父が眉根をチラッと寄せたのを見た。直ぐに平静な顔に戻ったが、未だに二度目の母を名前で呼ぶことを気にしたのだと耕平にはわかった。

多恵子は亮太の母だ。他人が同席するような折には「お母さん」と言える才覚は耕平にもあったが、家族四人になると「多恵子さん」と呼んだ。父が怒ると不貞腐れて、呼びかけそのものも口にしなかった。

父に言わせれば、「愛想のない不機嫌な子供」だったわけで、現在に至っても人を容れない狭量な男と思われているようだ。

腕の中に手のかかる赤ん坊がいては、突然息子になった七才にもなる少年を多恵子は扱いかねただろうが、しばらくは煩いくらいに世話を焼こうとした。耕平は事毎に逆らい続け、報われない思いを重ねた多恵子の慰めが亮太に向かったのは至極当然であった。そうやって育てられた亮太は、十分な大人になってからでも母親の愛情に浸りきり、何事につけても母親に依存し続けていた。

「何年引き籠ったんでしたっけ」

「三年、半、になるか。自分を責めて、身動きがとれなくなったんだな」

亮太が車の運転を誤って側壁に激突した。助手席に母親を乗せていた。多恵子はフロントガラスを突き破って放り出され、即死。頭骨が割れた酷い状態の母親の姿を、気を失う直前、ほんの一瞬だが亮太は目にしたという。亮太の方は、胸をハンドルに強打したが、むしろハンドルに助けられたようなもので、肋骨の何本かに罅が入っただけで済んだ。だが、本当の傷は心に深く突き刺さっていた。

入院中から兆しがあった。眠っていても事故の場面が過ぎるらしく、悲鳴を上げることがしばしばで、その内、人と会うことを恐れ嫌うようになった。言葉が極端に少なくなり、話し掛けない限り、黙ったきりで時間を経てるのだと、父から何度も聞かされた。

今はもう昔の話になるが、父が運送会社に職を得、町での生活がギクシャクしながらも先ずは平穏に始まった頃、小学生になったばかりの耕平は子供ながらに思うところがあった。「いつかここを出て行く」と。

最初の内は、急き立てられる思いの理由が自分でもよく掴めず、一つ覚えに胸の中でおまじないのように唱えていただけだった。少し大きくなって、どうやら理屈がついた。棄てられた子供の意地でもあろうと思い始め、消えてしまった母親を見返してやるのだし、横暴な父親に吠え面をかかせてやるためだと。

子供にあるまじき激しい決め事に、我から冒険心を擦られてはいたが、日々は穏やかに過ぎていて、その大きな部分は「兄ちゃん、兄ちゃん」と慕い寄ってくる亮太とじゃれ合う楽しさがあることだった。胸に栗立つものがあっても、やはり小さな弟は可愛かった。同時に、この感情が耕平を戸惑わせてもいた。結果的に母を追いやった女の子供、嫌っても当たり前の子供なのだから。

耕平が進学で郷里を離れた時、亮太は十才だった。後を追われ心が残ったが、かねての念願の通り家を出た。亮太が更に母親ベッタリになったのはその後のことだ。人は不足の埋合せをするものなのだ。

にもかかわらず、その母をも失い、孤立して俯くしかなくなった亮太が憐れだった。

ビールを旨そうに呷り、枝豆に手を伸ばした父が何を思い出したかクスリと笑った。

冷蔵庫に耕平の好きな銘柄のビールが何本も冷えていて、枝豆や、これも耕平好みのチーズに、ラップがかかっていた。座布団は夏物に変えることを怠っても、こういうことはちゃんとしている。それらを何を言うでもなく耕平が取り出し、二人で飲み始めたところだった。

「この家は、年寄りと中年の男二人の所帯だろ？　町内の新しく越してきた住民には、どうも奇怪に映るらしいんだ。スーパーでさ、二人で物を買っていると視線が飛んで来るのがわかる。今じゃ、男が葱を買っていても別段不思議がられない世の中だが、男二人というのは気になるらしい」

「妙な関係かと？」

「馬鹿。それならまだいいんだ。行き遅れが連れ立って、の図なんだろうね。憐れまれているのかな」

「行き遅れとはまた……」

「お前がここにいなくて良かったよ。女に縁のない男が三人、雁首並べてってことになっては敵わないよ」

見透かされていたかと、むせそうになった。七十三と四十二、そこに四十九ときては、人の口の端に上がらないはずがない。一人なら人混みに紛れ込むことができても、三人ではそうはいかない。滅入る想像だった。

「女に縁がないって、父さんは二度も結婚しているんだから同列、はないでしょ」

「独り者ということでは一緒さ。ま、幸いというか、辛うじてなのか亮太と二人で済んでいるんでね、ここでは。お前の方は一人でしっかり考えて行けよ。お前にまでは手が回らん」

父はふと部屋の奥に掛かった時計を気にした。耕平の残り時間なのか、亮太の帰る時間を、なのか。父は何も言わなかった。父には会社で起きていることは話してはいない。耕平も手探りのままここに来ていた。

父が、卓に前屈みになり声を潜めた。

「事故から十年になるが、あれは少し緩くなったような気がする。昔通りじゃない。意識してかどうかわからんが、ここに蓋をしとるようだ」

父は自分の左胸を突いてみせた。

「当分、俺が付いてなきゃならんだろ。家仕事を少しずつ教えているから、俺が弱ったら面倒は見てくれるだろう。優しい男だから、それを良しとしてくれる女性が現れればいいんだが、何しろ再就職させてくれた倉庫会社と家の往復だけだから出会うチャンスがない。まあ、こればかりは天に任せるしかないと思ってはいるがね。母親に代わるとなるとね」

「母親の代わり？」意地の悪い思いに捉われて耕平は問いかけた。

「僕には何をしてくれました？　まさか多恵子さん、とは言わないでしょうね」

父が意外そうに目を瞠った。

「お前、幾つになったって？　四十九才？　四十年以上考えるもんかね、それを。いや、そう、俺も同じだよ。お前の、何て言うんだ、これは。ん……、プライドか、お前の。それを守って」

「え？」

父は言いよどみ、掌の中でグラスをしばらく弄んで、口籠もりながら話し始めた。

「お前はいつも忙しくしている。忙しい振りもする。だから時間がなかった、ずっとだ。俺の方も話せるかどうかわからず、話すのがいいのか悪いのか判断ができず、そうこうするうちに時間切れ。それの繰り返しだった」

父のグラスにビールを注ぎ、自分にも足した。

「俺が蕗子をどれだけ大事にしてきたか、お前にはわからなかっただろう。蕗子がいなくなって、いなくなる前には激しい諍いもしたから、お前は俺が蕗子を追い出したと思った。子供は母親に与するものだからな。だが……」

蕗子は耕平の母の名だ。父はまたビールを呷った。

「実際は、俺が棄てられた」

「エッ」

「棄てられたのは俺だ。お前を押し付けて出て行った。山仕事の出稼ぎ男

にのぼせ上がったのだ。俺もお前も置き去りにされたってわけだ」

二人して同時に溜息が出た。聞いてよかったのかと耕平は思い、一層前屈みになった父に目を遣った。

「女房に出て行かれるなんてみっともないったらありゃあせん。愛想尽かしならまだしも、男と逃げられたんだ。小さな山の村では笑い者だ。村の者に気付かれない内に、後付けの女遊びにうつつを抜かした。十九だった多恵子を孕ませたのは、その結果だ。言っておくが、多恵子には無理強いじゃないぞ。好かれたんだよ。でもまあ、村中の顰蹙を買って、悪い奴だと後ろ指をさされて町に出た」

つくづくと父を見た。初めてこんな風に父を見た。父をこんなに可愛いと思ったことはなかった。いじましく無神経に生きてきたとしか捉えていなかった父の悪戦苦闘が、耕平を揺るがしていた。

「俺にもせこい計算がなくはなかったが、このことでお前の母親を守るつもりもあった。お前が傷つくことは避けなければならなかったからな。何より大事だったのはお前だ。母に見捨てられたのではなく、父親によって母から引き離されたのだと、お前に受け取って貰うことだ。お前の誇りのためだ」

「父さん……」

言うべき言葉がなかなか見つからなかった。真っ先に浮かんだのは多恵子への仕打ちを悔いる思いだった。父がいて、亮太がいたことで辛さを訴えて逃げ込む先があったにしても、耕平の反目に気持ちを乱したことが多恵子にはどれだけあったことか。

父はやっぱりわがままで人の人生に手を差し入れ、掻き回し、混乱させたのだ。

「父さんは酷いよ。修正が利かないよ、この時間の長さは」

「そうだな」

父は素直に頷いて、無言で庭に目を泳がしていた。

「だがな、耕平、人には和解出来る時が必ずあると思う。わだかまりが解けていく時が。時期はわからないが必ず。俺は亮太を看ている間中挫けそうになると、きっと、と思った。亮太と、とではなくて亮太の病と、きっと折り合いのつく日が来る、と」

月の明るい夜だったという。息子の部屋に夕食の膳を運んだ後、いつものように一人で食事をし、片付けも終えて父は縁側で空を眺めていたそうだ。気配を感じて振り向くと亮太がいて、月を見上げて言った。

「綺麗だね」

「う、うん……」

「まん丸だね」

「満月だ」

それから何となく二人で笑い合った、と父が思い出し笑いをした。

「最初はドキッとしたよ、流石に。とうとう、とも思った。ところが亮太は、ただ月の光に誘われて出てきたんだ。夢から醒めたように」

月が絆を結び直した。時間の重さに耐えた二人に、さり気ない安穏が訪れた。

父は、このことを語りたかったのだ、と耕平は思った。偶に寄っても、玄関先での通り一遍のご機嫌伺いだけで待たせた車に乗り込んだことさえある。素っ気ない電話の切り方をしたこともある。近寄ってはならない、と、それこそ呪文のように唱えていた。家から離れる。一人で生きる。それを突っ支い棒にしてきたような気がする。押し付けて来るものが重たければ重たいだけ、押し返す力も大きくなる。そうやって自分を作り上げてきた。そのことは間違いではない。誤ってはいないのだと父は言いたいのか。

「月ね……」

耕平は思い出していた。つい先月のことだ。靖子と虎ノ門のホテルで食事をした帰りの、緩い坂道を下る途中、長い塀の切れる辺りで、白く丸い壷を大写しにしたポスターが目に入った。

一旦、行過ぎたが、ポスターを気にした靖子の素振りが気になって、Uターンして塀の内に乗り入れた。「ありがとう」と靖子が呟くように言い、耕平は自分の勘が外れていなかったことに胸を撫で下ろした。

陶磁器を専門に展示するらしい美術館に二人は入った。

一抱えもある大きな白磁壷は韓国の陶芸家の作品で、満月を思わせるところから月の壷、ゲッコと呼ばれると、添えられた解説にあった。もともと月壷とは朝鮮王朝時代、というから十七世紀末から十八世紀に作られた壷に与えられた優雅な名前だが、今回展示されたものは、その美しさに魅せられた現代の作家が長い試行の末に再現できたものだという。

明かりを抑えた室内。並ぶ壷たちが浮かび上がるように当てられた照明と配置が巧みで、焼き物に疎い耕平にも、存在感の際立ちが見て取れた。

小声で説明の補いをしてくれる靖子の声を聞き取ろうと耕平は耳を寄せた。

「朝鮮の古い白磁は、もっと柔らかなのよ。慎ましやかで暖かい……。ずっと傍に置いて、それだけを眺めて暮らしてもいいとまで思わせる。どうでも手に入れて、秘蔵しておきたいと望んでしまう。それ位、魅力的なものなの。この壷とは少し違うけれど」

靖子が気をひかれたのは、この大壷の美しさは無論だが、その成型の仕方だった。高さと胴がほぼ同寸の壷は、上下それぞれに作られ、胴の辺りでつなぎ合わせる。どちらも精密に作られるが、窯で焼成される段階で、ずれたり崩れたりと、なかなか「月」にはならない。

後に、この作品展を評した雑誌か新聞を読んで靖子は更に月壷への思いを深くしたようだ。

それには、「一つの完全な形になる『月の壷』は、他人同士だった二人が出会い、互いを理解して受け入れる人間の生き方と驚くほど似ている」と、作家が語ったとあった。

靖子は何を耕平に見せようと思ったのか。何に気付いてもらいたかったのか。

「ああ……」

耕平は、そこに月がかかっているかのように中空に目を据えて嘆息した。

亮太がまだ帰らなかったが、今日は引き揚げなければならなかった。急いで東京に戻らなければならない。今回までは耕平のスタイルを全うする。それがけじめだと思った。

次の訪問まで、そう日を置くことはない。もう、それはない。耕平の中で脈打ち、うねるものがあった。理解する、しない。許す、許さない。仕事のこと。そして何よりも、靖子のこと。いずれにしろ、露わになったことを踏まえ、向き合ってみるつもりだった。

山口　馨

やまぐち　かおる

1942年生まれ
文芸同人誌「渤海」にて小説執筆
「とやま文学」ほか地方誌紙にて
小説、エッセイ、コラム発表
作品集に『山口　馨01－03』『山口　馨04－08』
富山市在住

渤海

富山県の同人誌環境

二年連続で本誌から掲載同人誌紹介の依頼を受けた。しかしながら、二〇〇八年夏の二十四号に文芸同人誌「渤海」について、「書く」「寄る」「出す」の見出しで基本的なことは書かせて貰った。そこで、折角の機会なので今回は富山県の文芸同人誌を囲む環境について、編集部の了承を得て書かせて貰うことにした。

●地元での反応

当「文芸思潮」は全国で刊行されている文芸同人誌を暖かく見守り、支援して下さっているが、富山県内、北陸においても文芸同人誌に対する同じ暖かな視線を感じる。

我々が同人誌を刊行する度に、まず中央の文芸雑誌、読んで貰いたい作家、富山県内の文化関係者にお送りする。その際、地元の新聞社、三大新聞の富山支局などにも送る。そうすると、一週間から十日ぐらいの間の地元二紙、北日本新聞と富山新聞の文化欄に「渤海」の新しい号が出たことが紹介される。文化部記者の好みにもよるが、掲載作品の一作は読んで書いてくれる。その他の作品については、作者と題名が紹介され、問合せ先の編集部の電話番号も掲載してくれる。こうして新聞に載ると、必ず二、三通の電話があって最新号をお送りしている。

「渤海」ではこの刊行から一ヶ月後ぐらいの休日の午後に合評会を行う。内輪の同人が大半だが、新たに要望があって「渤海」をお送りした方も参加されることがある。

このあと同人は、またせっせと次回作に励むことになる。その後、北日本新聞は上半期と下半期に分けて、同人雑誌評を載せてくれる。地元の大学の先生が書いて下さる。富山新聞の方は年末にその年に出た同人雑誌の評を載せてくれる。こちらは県内の同人誌のベテランの主宰者が書いている。いずれも丁寧に読んで頂いている。なかなかの辛口だが、励みになっていることは間違いない。

富山新聞系列の金沢の北國新聞社が刊行している季刊雑誌「北國文華」にも北陸の同人雑誌評が載る。金沢の大学の先生が丁寧に評しておられる。

地元での反応はこういうところだと思う。

●県内の発表・応募の場

2008年（平成20年）8月／「渤海」夏期研修
長野県松本市の「窪田空穂記念館」向かいの「空穂生家」にて

次に参加している同人雑誌以外での発表の場、応募の機会もいくつか提供されている。

まず、北日本新聞が掌編小説を毎月募集している。資格は県内在住か県出身者だ。枚数は原稿用紙十枚、夕刊で入賞、選奨作品が発表される。同紙では年一回北日本文学賞も全国展開で募集している。こちらは三十枚で正月の新聞に入賞、選奨作品が発表される。この賞はかなりレベルが高い。

また、富山県芸術文化協会が「とやま文学」という雑誌を年一回刊行している。こちらには県内の同人誌作家に新作の発表の場を提供してくれている。県内の同人誌で研鑽を積んだ人が順番に発表している。この「とやま文学」では同時にとやま文学賞も設定している。

また、「北國文華」から、県内の同人誌作家に作品の依頼がくることがある。こちらに発表すると、目次で既成作家と名前が並ぶ。

発表の場、応募の機会と言うことでは大方こんなところではないかと思う。

●「とやま同人誌会」と「越中文学館構想」

このように富山県の同人雑誌は大変恵まれているが、一挙にこういう状況が生まれたわけではない。

それを語る時、「とやま同人誌会」の存在を忘れてはならない。この会は、富山県芸術文化協会の発足と相前後して結成された。創作することは、本来個人の営為だが、お互い書く苦労を語り合おうと発足した。年一回、十一月ごろに総会、講師を招いての文学シンポジウムを開催している。同日に各同人誌からの推薦作の合評を行い定着しているようだ。現在は県内の七、八誌が参加している。

この「とやま同人誌会」が発足当時から北日本新聞社、或いは富山県芸術文化協会に粘り強く働きかけて、こういう暖かい環境が生まれたように思う。

そんな中で今新たな動きも見られる。それは、富山県の越中文学館構想である。この構想の推進には北日本新聞社も尽力しており、昨年秋に「越中文学展」を開催した。県出身、或いは縁の作家の直筆原稿などの資料を県民会館で展示し、予想を超えた賑わいだった。その文学展の盛況を追い風にして、目下県内の文学関係者の意見を聞きながら、構想の具体化に向けて研究が始まったところである。

●「隠し文学館 花ざかりの森」

そこで、この「越中文学展」の開催にも協力した小さな文学館を紹介させて貰いたい。私が個人で開設した文学館である。極めて我田引水になるが、「文芸思潮」編集部の要請ということでご了承頂きたい。

館名は「隠し文学館 花ざかりの森」と言う。文学館の冠の読みは「かくし」だが、「ポケット」の意味を含む。ポケットに入るような「隠れた小さな文学館」ということになる。館名の「花ざかりの森」は作家三島由紀夫の第一著作集の題名である。館名の由来のとおり、当館は三島関係の文学資料を収集・保存・展示する文学館である。

2008年（平成20年）3月に開館した「隠し文学館 花ざかりの森」全景

こういう内容の文学館を個人で開設すること、また、三島の著作名「花ざかりの森」を館名とさせて頂くことについて、故三島由紀夫氏のご遺族にご案内とお願いをしたのは平成十九年九月だった。まったく唐突なお願いだったにも拘わらず、ご理解を頂き、ご了承を頂いた。まさに天にも昇る気持ちだった。

その許諾を携えて、東京・駒場の日本近代文学館の中に事務局がある全国文学館協議会に正式に入会させて頂いた。同協議会には機会ある毎にご指導を頂いている。

「三島由紀夫の文学に惹かれたきっかけは何か」と、文学館の開館を取材に来た新聞記者によく訊かれた。「金閣寺」だと答えると、「それだけで何故文学館の開設にまで至ったか」と訊かれた。

「渤海」の夏季研修等で県外の文学館を訪ねるうち、自分の三島関係資料も、こうして展示して多くの人に見て貰えるのではないかと、何年か前から思うようになった。その思いは定年を目前に、より強いものになった。

そして、退職を一年後に控えた平成十八年一月から具体的な文学館の設計に入り、同十九年三月の定年退職を機に建築工事に入った。

建物は同十月に完成し、そのあと、「よみがえる三島由紀夫展」という開館記念展のテーマに基づいて、三島の生涯の仕事が一望できるように資料の展示を始めた。そして、平成二十年二月二十九日に「隠し文学館 花ざかりの森」の開館式を迎えた。式典には、山梨県立文学館館長、石川近代文学館理事長、金沢の泉鏡花記念館副館長など、文学館関係の皆様にもご列席頂いた。

約一ヶ月間の記念展には県内外から沢山の皆様が来館された。開館展を終えて、一旦休館したが、要望があれば団体、個人を問わず日程を調整して頂いて貸切バスも何回か迎えた。

今年、平成二十一年三月の開館一周年記念「新資料でよみがえる三島由紀夫展」の定期開館後も同じように予約が絶えない。四月には、インターネットのホームページや旅行雑誌で知ったと東京、千葉、金沢から、個人のお客様を迎えた。

余りにも衝撃的だった最期のため、また多くの作品が文学的な毒を含んでいるため、三島はこれからも色々な見方がされていくだろう。しかし、当館は三島文学を真摯に見詰め直す場として運営して行きたいと思っている。

富山県の文学状況を語るうち、当館の紹介に多くのスペースを割いてしまった。文学に対する熱意故とお許し頂きたい。

（杉田欣次●文芸同人誌「渤海」編集委員・隠し文学館 花ざかりの森館長／富山市）

渤海
〒930・0916
富山市向新庄町二－四－五　杉田欣次方
☎076・451・7770

季刊午前 39号

ここにおる。

野見山潔子

（運転手さん、校門の前の道を右に曲がってくださらんですか。電柱が見えますでしょうが。その電柱を左に折れて、まっすぐ行くとです。よかですか、まっすぐ行って、突き当たりにある家ですたい。そん家の前で降ろしてくれんですか。大きな柿の木がありますき、すぐわかりますたい）

母の声を聞いたような気がした。

ほんの一瞬だが、私はシートにもたれて眠っていたらしい。体を起こすと、フロントガラス越しに三階建ての校舎が正面にあった。

「お客さん、校門の前で、よかですか」

スピードを落とした運転手に声をかけられ、私は慌ててバッグから財布を取り出す。

つい先ほど、駅の改札口で、切符が見つからずもたもたしていたら、後ろに立っていた若い男に肩を押され、よろめいた。ちょっとぉ、危ないじゃない、と声を張りあげたが、男は振り返りもしないでゲートを抜けていった。

ほんの少し立ち止まっただけなのに、オバサンだとばかにして、とむしゃくしゃした気分を引きずったまま、駅前でタクシーに乗った私は、小学校まで、とぶっきらぼうに行き先を告げ、黙り込んだのだった。それを、今更、校門の前を右だ、そこから左だ、と説明するのはさすがに億劫だった。

「最近は事件が多かでしょうが。それで、昼間でも正門が閉められるようになりましてね。昔のごと、中まで車が入っていかれんようになったとです。えっとですね、正門の左手に通用門がありますけん、そこから入られたらよかですよ」

小学校に用があると思ったのか、運転手は釣り銭を渡しながらそう言い、

「左ですばい」

と、もう一度念を押した。

タクシーを降りて、右に向かった私を、運転手がフロントガラス越しに見ているのを背中で感じ、私はわざとゆっくり歩いた。

電柱を左に折れ、ふと気になってバッグの内ポケットを探る。微かに樟脳の臭いが漂い、やっぱり、これだったのか、と手に触れた証書を取り出した。

先月、実家の引き出しの奥にしまい込まれていた幾枚かの証書を見つけた。帰り際のことで、電車の時間が気になり、バッグに押し込むと実家を後にした。淡い期待は頭をもたげ始めるといくらでも膨らむもので、電車のシートに腰かけるなり、私は証書を取り出した。だが、それがすでに払い戻しのすんでいる預金証書や、期限の切れた火災保険の証書だとわかると高揚した気分はいっぺんに凋み、樟脳の臭いの染みついた証書を、バッグの内ポケットにねじ込んだのだった。

忘れかけていた先月の顛末が私の脳裏に甦り、タクシーの中で、母の声を聞いた気がして目を開けたとき、微かに纏いついた樟脳の臭いは、この証書に染みついたものだと納得した。

背後からクラクションを鳴らされ、私は慌てて道の端に寄る。チャイルドシートに赤ん坊を括り付け、ケータイを耳に当てた若い女の運転する軽自動車が私の横をすり抜け、右手の住宅地に入っていった。

小さな球場なら丸ごとすっぽり入る広さの住宅地は、元は織物工場だった。一時期、ずいぶんと景気がよかったが、ゴルフ場やホテル経営にまで手を出したのが災いしたのか、工場は倒産し閉鎖された。その後、何年もそのまま放置され、広い敷地にはセイタカアワダチソウやススキが生い茂り、幽霊工場と囁かれるほど荒れ果てていた。

それが二年半前、不動産会社に買い取られると、工場は壊されブルドーザーが土地をならし始めた。一ヶ月もたたないうちに、整地された土地は分譲地、百合ヶ丘、に変身し、ロープで線引きされた地面に番号を書いた杭が打たれた。休日には、アドバルーンが更地の上空に浮かび、テントの中では住宅会社の社員が見学に訪れる客の応対に追われ、風に乗って流れてくるマイク放送の音楽が私と母を苛立たせた。

小学校と中学校がすぐ傍で、バス停にも近いためか、若い世代の入居者が多く、玩具みたいなカラフルな二階建てが次々に建っていった。庭もテラスも洋画に出てくるようなしゃれた造りが目立ち、蒲鉾型の織物工場と倉庫が二棟あるだけの殺風景な昔の姿を知っている私には、何度見ても馴染めない風景だった。

その百合ヶ丘を通り過ぎ、突き当たりにある雑木に囲まれた百姓家が私の生まれ育ったところだ。家の裏はずっと向こうの土手まで田んぼが広がり、ぽつんぽつんと似たようなアパートが稲田の中に建っている。

タクシーの中で夢うつつに聞いた母の声は、百合ヶ丘を目印としてあげていなかったような気がする。百合ヶ丘は、母にとってもやはり胡散臭かったのだろう。

派手な色の家ばかり建ちよるたい。だいたい、名前からして、尻のこそばゆか名前やねぇ。ノアザミやらノギクなら、昔からここら辺りにはいくらでも咲いちょったけど、百合はあんまり見たことはなかったばい。どっから百合ヶ丘なんて名前を持ってきたとやろうか。長年の農作業のためか、七十五歳にしては、背中の曲がった母が腰に手をあて、百合ヶ丘の方を見ながらそう言うのを、私は何度か聞いたことがあった。

実を付けなくなってもう何年にもなる柿の木の下で私は立ち止まる。

目の前の、じわじわと朽ちていく古い家を見ていると、高校生の頃、寝たきりの祖父を見舞いに行ったときのことを思い出す。薄っぺらで小さくなってしまった祖父の姿に、「じいちゃん」と恐る恐る声をかけ、細い腕に触れると、ぼろぼろと皮膚が粉になって剥げた。

去年の大型台風で外れかけた壁板。枯葉が詰まって撓んだ雨樋。いつか、この家もあのときの祖父の皮膚のように、ばらばらと地面に崩れ落ちるのだろう。人も家も朽ちるときは同じなのかもしれない。

門を入ると、茶の木の生垣を覆い尽くした昼顔の蔓が道にまで這い出していた。足元を枯れ草色をしたトカゲが横切る。

「蛇が居場所を追われて、みんなここに逃げてきよる。そりゃあ、ショベルカーで土を掘り返されたら、おるところはなかもんねぇ。もう、何十匹という蛇がこっちに向かって逃げてきたばい」

「母さんの話は、大袈裟ね。蛇が何十匹もいっぺんに逃げてくるもんね」

工事が始まり、赤土が剥き出しになっていく荒れ地を眺め興奮して喋る母を、あの頃、私は笑っていた。

「いっぺんに逃げてきたと、誰が言うたね。人の話は黙って最後まで聞かんね。冬眠から覚めるにはまだちょっと早いけん、動きが鈍うてね。どげん言うたらよかやろうかねぇ、寝ぼけたまま這ってきた、そげん感じやった。茶の木のところで動ききらんようになった蛇を何匹捕まえたやろうか。

そりゃぁ、えらい数やった」

人の揚げ足を取るような言い方をされたんじゃ、話がでけんたい、と黙り込んだ母は、その蛇をどう始末したのだろう。それ以上は訊かなかったが、子供の頃、祖母が捕まえた蛇の頭を太い指で押さえ、生きたまま菜切り包丁で輪切りにし、放し飼いの鶏に与えていたのを思い出し、私も口を閉ざした。

そして、ショベルカーが忙しげに首を振って赤土を振りまいていたあの時期、私も蛇を見た。生け垣に沿った細い道の真ん中で、茶色の肌に赤黒い斑点のある蛇がとぐろを巻いていた。伸びきった古チューブを渦巻きにしたような格好で、尻尾はだらりと伸びていた。動く気配は全くなかったが、薄気味悪く、引き返して裏の畑の畦を飛び越え、屋敷内に入ろうとした。だが、そこでもまた白い腹を見せて死んでいる蛇を見たのだった。それは、追われゆくものの末路の姿のようで、私は思わず目を逸らせた。

レールの外れかけた玄関の戸を開けたとたん、熱気に包まれ、後ずさると、踵が何かに触れた。薄く埃を被った母の杖が足元に転がっていた。

（あら、秋子。帰ってきたとぉ）

奥の部屋で母の声がしたような気がして、脱ぎかけた靴に手をかけたまま、私は体を硬くする。

母さん？

縁側の雨戸を繰ると、七月の眩しい光が束になって一気に流れ込む。薄暗かった部屋は、明るさを取り戻したが、主のいなくなった家の中は沈黙が重く澱んでいた。居間も茶の間も台所も風呂場も便所も、どこもかしこも——。

母が寄りかかって死んでいた茶の間のガラス戸に背中を押し当て、私は目を閉じる。

母が亡くなったのは、一年半前の一月、その冬で一番寒い日だった。

その日は、朝から気温は上がらず、私はアパートの氷結したガラス窓を袢纏（はんてん）の袖で拭き、外を眺めた。手の届きそうなほど低い灰色の空から今にも雪が舞い落ちてきそうだった。何もかもが億劫だった。炬燵に潜り込み、固くなったパンにジャムを塗って囓った。昼になってようやく湯を沸かし、カップラーメンを食べると、侘びしい食事が一週間前の出来事を思い出させた。

一週間前のその日、私は急に足が動かなくなったのだ。左足だけがふにゃっとなって、力が入らなかった。

どうしたの。これは何なの。

歩き出そうとして何度もその場に膝をつく私は自分の身に起こったことが理解できずに動揺した。数分で元に戻ったが、左足は冷たく血の気がなかった。すぐにタクシーを呼んで、近くの内科に行くと、脳外科を紹介され、精密検査を受けた。

「更年期障害でしょう。検査の結果はどこもこれといって異常はみられません。漢方薬を出しておきましょう」

四十五歳ですね、とちらりと私の顔を見て、医者はカルテに視線をもどしたのだった。

更年期のせいだとあっさり切り捨てる医者の言葉を聞きながら、賢治のせいだ、こうなったのは賢治のせいだと、私はそのとき夫に憎しみを募らせていった。

カップラーメンの汁を啜り、洟をかんだティッシュをその中に丸め込む。パンの屑や蓋の開いたままのジャムの壜が散乱した卓の上を眺め、このままでは、だらしなく夜へとなだれ込んでしまいそうで、炬燵から這い出すと、敷きっぱなしの布団を畳み、掃除機をかけ、洗濯機を回した。テラスに洗濯物を干すと片端から凍り付いていった。感覚のなくなった指先に息を吹きかけ、家の中に戻るとテレビをつけた。この冬の最低気温です、とコートの襟を立てた気象予報士の若い女性がスタジオの外から中継し、山沿いの町に降る霙（みぞれ）の映像が画面を流れた。それが母の住む町だと気づいたとき、この数日、同じ夢を見ていることを思い出した。

父と母が歩いている夢だった。父が先で、その後ろを母が歩いていた。道は平坦で、回りに家はなかった。場所はわからないが、どこかで見たような懐かしさを感じた。父は一張羅のグレーの背広姿なのに、母は淡いブルーの簡単服を着ていた。二人は語らいながら歩いていた。なにを話しているのかわからなかったが、楽しそうだった。ふと、置いて行かれそうな不安を覚えて、「かあさーん」と呼んで追いかけるのだが、母は振り返らなかった。目覚めたとき、じっとり汗をかいていた。

テレビの画面はいつのまにかコマーシャルに変わっていた。

電話をかけてみようか。受話器を前にして、私は躊躇（ためら）った。

「夜だけは、かけてこんでちょうだいよ。夜に電話のベルの音を聞いたら、神経が昂ぶって、いくら強か誘眠剤を飲んでも効かんもんね」

「だからこの前、昼間に電話をしたじゃない。そしたら昼寝をしとったのに、起こされてしもうた、と不機嫌やったやないね」

「そんなことは言うとらんよ。いつの話ね」

「だから、この前」

数日前に、電話のことから小さな諍いになったばかりだった。底冷えのするこんな日に、ちょっとした言葉の行き違いから、受話器の向こう側とこっちで感情を昂ぶらせ合うのはごめんだ。私は洗濯篭を乱暴に置くと、炬燵に潜り込んだ。

だが、その日のその時刻、母は、二度と語りかけることのできない人になっていたのだ。

その夜、私はワインを一壜空にした。アパートの前の飼い犬が激しく吠える声に、炬燵でうたた寝をしていた私は、体を起こした。午前二時をまわっていた。コップが倒れ、広げたままの新聞にワインの赤い染みができていた。

賢治が帰って来たのよ。あの犬は、賢治が遅く帰ると、いつも吠えるんだから。

ふらふらと立ち上がり、賢治の部屋のドアを開けた。

「賢治？」

そっと声をかけて部屋の電気をつけたが、誰もいなかった。凍てつくような空気が首筋を這い、私ははっきりと目が覚めた。覚めた目に、部屋の隅にぽつんとある洋服ダンスが入った。中には賢治のスーツが一着だけ入っている。

「これがいいよ。一番似合うちょる」

デパートの紳士服売り場で、鏡の前に立った長身の賢治の胸に何着かのスーツをあて、これにしよう、と私が選んだ紺の細い縞のスーツが——。

「そうかぁ。じゃあ、これに決めるか」

私の言葉に照れくさそうに店員を見やる賢治の切れ長の涼しい目。

ワイシャツも靴下も、着る物は全て私に任せて無関心だった賢治が、セーターやズボンの色にこだわり、服装を気にしだしたとき、なぜ気がつかなかったのだろう。

賢治が家を出たあと、残された洋服ダンスの中のスーツやズボンを、一着ずつ捨てていった。そして最後に残ったこの一着をどうしても捨てきれない自分が腹立たしかった。

私は台所に戻ると、サイドボードからウイスキーの壜を持ち出して呷った。

酔いはかなりまわっていた。

このまま死んでもいい。死ぬときは死ぬのだから。でも、なんだか死なない気がしてきた。そうだ、明日はきっといいことがある。うん、いいことが——。

敷きっ放しの布団に倒れ込むと、眠りの底に引きずり込まれていった。

翌朝はひどい二日酔いだった。居間で電話が鳴っていた。起きあがろうとするが、頭が割れるように痛い。電話は長いあいだ繰り返し鳴っていた。どれくらいたったのだろうか、うつらうつらしていると、枕元のケータイから着信音が流れた。

メールは賢治からだった。

女と別れた。戻ることにした。そんな日が来て欲しいという願いが、このメールを開けば現実のことになっているのかもしれない。そう思うと開くのが恐かった。どう答えればいいのか。すぐに帰ってきて、待っている、と返信しようか、いや、しばらくはそのままにしよう。懲らしめるのもいい薬だ。でもそのあいだに女とよりが戻ったらどうするのだ。

『おふくろさんが死んだ。警察から連絡。すぐ実家に帰れ』

まさか！　私はもう一度送信者を見た。間違いなく賢治だった。警察？何があったのだ。長く連絡を取っていない賢治のケータイに電話をしかけて切った。賢治が電話に出ないことはわかっていた。

電車に飛び乗り、喪服の準備をしてこなかったことに気がついた。財布の入ったバッグだけをしっかり握っていた。死んだなんて自分の目で確かめなければわからないじゃないか。そう何度も胸の内で繰り返し、いつの

まにかぶつぶつと声に出して呟いていた。向かいに座った小さな男の子が、母親のコートの袖を握って怯えたように私の顔を見ていた。

柿の木の横に車が一台止まっていた。胸の鼓動が激しく打ち出した。家の中に駆け込むと、居間に見慣れた母の布団が敷いてあった。薄く盛り上がった掛け布団の襟元に見える小さな布巾。台所の布巾掛けにかけてあるはずの布巾が枕の上でこんもり形をなしている。漂白剤やら使わんでも、こうすればよかとたい、とアルミの小さな鍋で母が煮沸消毒していた布巾。立ち竦んだまま布巾を見ていると、「あの」と声がした。部屋の隅に初老の女性が正座していた。

「検視がすんで、たった今、警察の人が帰ったとですよ。このたびは思いがけないことで。どうか気をしっかりもってくださいね」

民生委員の佐伯だと名乗る女性はそう言ったあと、躊躇い勝ちに、

「ハンカチを探したとですが、見つからなかったものですから、とりあえず台所にあった布巾をおかけしました」

と言葉を続け、手を合わせた。

間に合わなかったのだ、死に目に会えなかったのだ、と佐伯さんの合わせた手を見て、初めて焼けるような熱いものが腹の底から湧き上がってきた。ひいっと込み上げてくる声を必死で堪え、母の頬に触れた。ぞっとするほどの冷たさが掌に伝わり、嘘だ、嘘だ、と私は母の頬を擦った。掛け布団がずれ、剥き出しの肩が露わになった。はっとして布団を捲ると母は全裸だった。思わず縋るように佐伯さんの顔を見た。

「検視に時間がかかりましてね。私は検視がすむまで外で待っていました」

と佐伯さんは伏し目がちに言い、母を発見した経緯を話し始めた。

たまたま、昼前に母を訪ねて来た佐伯さんは、いつもは鍵がかかっている玄関の戸が開くので、不審に思い、勝手口に回り声をかけたが返事はなかった。

「上がってみたら、おばあちゃんがガラス戸に寄りかかってあったとですよ。居眠りしとりなさるとやろうと思って、そんなところで眠ったら寒かですよ、風邪引きますよ、と声をかけて肩に手を置いたら、もう冷たくなってありました」

佐伯さんは血管の浮いた手をぎゅっと握りしめた。

私が酒を飲んでいるとき、母はすでに呼吸が止まっていたのだ。そして、霙の降る寒い夜に、ガラス戸に寄りかかったまま、誰にも気づかれずに硬直していったのだ。酔いの回った頭で、明日はいいことがある、と私が酒壜を抱え込んでいた頃に。

「娘さんが着いたら、署に電話をするように伝えて欲しい、と刑事さんから頼まれていました」

と言うと佐伯さんは帰っていった。冷え切った部屋で、私が来るまでじっと遺体と向き合っていた佐伯さんに、すみませんでした、と頭を下げるだけで、私は言葉が出なかった。

警察は、一応、物取りの線も考えたようだが、検視結果と家の中の状況から、泥棒の入った様子はなかったと刑事から告げられた。そして、虚血性心疾患と書かれた死亡診断書と引き替えに母は焼き場で骨になった。母の身内は死に絶えて、親戚付き合いもなく、葬儀は私一人ですませた。

賢治からは葬式のすんだ夜、電話があった。

「葬式には行けなくて申し訳なかった。出張から今戻ったところだ。こんなことを今更言ってもしかたないだろうが、おふくろさんが死んだ日、君に電話が繋がらないと警察から僕の職場に連絡があってね。いったい何をしていたんだ」

と賢治は押し殺した声で言った。

来る気など端からなかったくせに。私は黙って受話器を耳に押し当てていた。

「おふくろさんも亡くなったことだし、これで、一応、君と僕も……そう思ってくれないか」

賢治は受話器の向こう側で私の様子を窺っているようだったが、口を閉ざした私に困惑したのか、それじゃあ、と電話は切れた。

線香の煙に噎せながら私は初めて声を上げて泣いた。

母さん。

首筋を汗が伝う。ガラス戸に背中を押し当て、床に座り込んだ私は、右足を投げ出し、左足を折り曲げて、母の呼吸が止まったときと同じ姿勢をとる。

母さん。母さん。

何度も呟く。

鳩のくぐもった鳴き声が外でする。私はゆっくり立ち上がると、勝手口を出て納屋に向かう。鴨居の太い釘にかかったもんぺと作業用の長袖シャツを着て、ゴム長靴を履く。井戸端で鎌の刃を研ぐ。錆びた刃が砥石の上で濡れて光ってくる。

（表が先ばい。表を先にきれいにせんと、人が来たとき、空き家のごとあって見苦しかろうが）

鎌を手に裏へと歩き出そうとする私を、母の声が引き留める。振り返ってみたが、母の姿は井戸端にはなく、ゆらゆらと立ちのぼる陽炎の中をモンシロチョウが横切っていく。

ここは、もう誰も住んどらん。訪ねて来る人もおらん。モンシロチョウを目で追いながら呟き、わかった、表から刈るよ、と私は踵を返した。

刈り倒した草を振り返って眺める余裕があったのは最初の五分だけだった。あとは目の前のセイタカアワダチソウの固い茎と鎌の刃先しか見ていなかった。刈っても刈っても目の前にあるのは雑草だ。気がつくと、鎌の刃先が曲がっている。

（鎌はもっとだいじに使わんね。刃先が駄目になっとろうが。茎にあてて手前にさっと引かんと、刃は、ねぶれてしまうとたい）

はっと顔を上げる。あたりは太陽が容赦なく照りつけ、陽炎が揺らめいているだけ。誰もいない。額に流れる汗を拭い、また鎌を動かす。

「帰って来とんなさったとお？」

もう少しで刈り終わるとほっとしたとき、隣の家の熊谷さんが塀から顔を出した。

「さっき」

私は麦わら帽子を少し持ち上げ挨拶をする。

バスで来たのか、車なのか、いつまでいるのか。熊谷さんはブロック塀に手をかけ、身を乗り出して喋りかけてくる。曖昧に言葉を濁す私に、熊谷さんは焦れる。

「暑かろう。なんもこげん真っ昼間に草刈りやらせんで、夕方涼しくなってからすればよかろうも。あんたのお母さんも、暑い最中に、草ば取りよんしゃったもんねぇ。こげん言い方したら悪いけど、やっぱ親子でよう似とんしゃるばい」

あっ、なにもね、悪気があって言いよるとやなかとよ、よう働きんしゃるち感心して言いよるとやきね、と熊谷さんは急いで言葉を重ねた。厚化粧をしているが、六十はとうに過ぎているはずだ。

「喉が渇いたやろう。冷たいお茶でも持ってきてやろうか」

「いえ、冷蔵庫に入っていますから」

「あら、電気はまだ止めとらんと？　そうたいね、あんたが帰ってきたときに使うもんね。ガスもまだそのままやろ？　この前、ガス屋がボンベを取り替えに来とったよ」

私は熊谷さんに気づかれないように少しずつ体を回し、背中を向けていく。

「草取りも大変やろうが。売ったらよかとに。なして売らんとね」

熊谷さんは喋り続ける。

「そうそう、一週間前やったか、白っぽい車が家の前に止まっとったばい。旦那さんの車やなかったと？」

いつも一人で実家に帰ってくる私の家庭の事情と、土地と家をいつ手放すか、それだけが熊谷さんの知りたいことだ。

「母が守ってきた土地ですから。売ったりはしませんから」

「そうね。はい、はい。よう、わかりました。それにしても、この暑いのによう働きんしゃるばい。そげん狂うたごと草ば刈らんでもよかろうに。日射病で倒れんごとしなさらんとね。ほんにまあ、見よる方が倒れろうごとあるばい」

私の強い口調に、熊谷さんは表情を強ばらせ、塀を離れた。

余計なお世話だ。

私は刈った草を寄せ集め、裏に回った。

父が腹膜炎で死んだのは、私が中学二年のときだ。残された田畑を母はずっと守ってきた。守るというより、手に職のない母は、田畑にしがみついて生きていくより他になかった。高校を卒業すると、車の免許を取った私は、軽トラックの助手席に母を乗せ、野菜の出荷を手伝った。

「よかなぁ、秋ちゃんみたいな孝行娘を持って。もう、苦労してリヤカー

を引いて来んでもよかたい」

市場の男たちはそう母に声をかけたが、男たちが陰で、あのままでは娘は一生嫁にいかれんばい、と噂しているのを私は知っていた。だが、気にとめなかった。苦労して高校まで出してくれた母を少しでも楽にしてやりたかった。市場から戻って、慌ただしく朝食をすませると、自転車で勤め先の本屋に通った。店では事務服だったし、Tシャツとジーパンがあれば着る物には無頓着だった。旅行はもちろん、映画にも行ったことはなく、休日は朝から母といっしょに畑に出た。

気持ちに変化が生じ始めたのは、そろそろ三十歳になる頃だった。疲れているのに眠れないことが多くなった。神経が尖り、市場の男たちが集まって笑いさざめく声を耳にすると、自分のことを笑われているような気がして、体が強ばる。本屋での仕事を終え、家に帰ると何でもないことに苛立ち、母に突っかかった。

「あんた、この頃、おかしかよ。どげんしたとねぇ」

「どげんもしとらん」

老いた母の顔がすぐ傍にある。それだけでもう嫌だった。息が詰まりそうだった。その頃、友だちの紹介で食品メーカーに勤める賢治と知り合った。家を出たいと焦る私は、賢治に結婚を迫ったが、母は反対だった。

「あんた、ひょっとして貯金があるち、言うたとじゃなかね。賢治さんはあんたより四歳も年下やろうが。あんたみたいにもう若くもない女と結婚するちいうとは、なんか魂胆があるとたい。見かけばかりよか男は用心したほうがいい」

「母さんにそんな偉そうなことが言えると？　この歳まで好きで一人でいたとじゃなかよ」

りんごを剥いていた私は立ち上がった。りんごが足元に転がり、ナイフだけがしっかり私の右手に握られていた。

「秋子！」

母の手が私の右手に伸びてきた。私はその手を振り払った。

「秋子、何するとね！」

椿油と汗の臭いが私に取りすがった。

「放してよ」

ぬるっとしたものが指に触れた。ぎょっとして手を引っ込めると、母の腕から血が流れていた。

「よかと。こんくらい、なんでもなか。早う行かんね。仕事に遅れるばい」

母は傍にあったタオルで腕を縛ると、柱時計に目をやり、私の背中を押した。バッグを掴んだ手が震え、靴を履く爪先も震えていた。

「気を付けて行かなよ」

自転車を納屋から出してくると、母が勝手口に立っていた。サドルに跨った背中に母の視線を感じ、ペダルを何度も踏み外した。

結局、母とのあいだにわだかまりを残したまま、私は家を出て賢治と暮らし始めたが、わだかまりは膿みを排出できないまま熱を持ち続け、私の中で燻っていた。母もまた同じであったと思う。

カヤツリグサの太い株に鎌の刃をあてる。

くそっ！

力任せに鎌の刃を引く。

くそっ！

ざくっと腕に夏草の感触が伝わる。

「秋ちゃん。帰って来とったとぉ」

突然の声に、ぎょっとして鎌を持つ手が止まる。

振り返ると城島が立っていた。家の横の三角田の耕作を頼んでいる私より二歳年上の男だ。城島はゆっくり私の前に回り込んだ。私はうろたえ、

「くそっ！」と何度繰り返しただろうと、鎌を握りしめ、体を固くする。何度目に、城島は声をかけてきたのだろう。ひょっとしたら、もっとひどい言葉を私が口走るのではないかと、聞いてはならない後ろめたさと同情心から声をかけてきたのではないだろうか。かっと体が熱くなった。

「ああ、いやね、妹がね、三角田のばあちゃんとこの秋子さんが帰って来とるごとある、と電話をくれたもんだから。ちょっと、田んぼまできたついでに寄ってみただけたい」

城島は田螺の駆除に来たのだと慌てて付け足した。

「田んぼの水が白く濁っとろうが、あれは、田螺が増えすぎたせいたい」

ぶら下げた青いポリバケツを足元に置きながら、三角田の方を見て城島

は言った。

城島の妹が嫁に行った先は小さな不動産屋だが、所有するマンションやアパートが町のあちこちにあり、三角田の近くのマンションも城島の妹の嫁ぎ先の持ち物で、その一室に妹一家は住んでいると聞いていた。

「城島の妹の嫁ぎ先ちいうとは、貸家だけじゃないとたい、モーテルも持っちょるらしかばい。儲かるもんならなんでん手を付けるとやろう」

と城島に耕作を頼むことになったとき、城島の妹の嫁ぎ先のことを母が口にした。

「母さん、そげん言い方をせんでもよかろうもん」

「モーテルやら、そげなもん」

「だから、そげん汚いものでも吐き捨てるような言い方をせんでもよかち言いよるとよ」

いつもいつも、私はどうすることもできない苛立ちを母に向けていた。あのときも、城島の妹のことから端を発し、口論になってしまうと、天井の低い煤けた茶の間に気まずい空気が漂った。

それにしても、城島の妹はどこで私を見たのだろう。タクシーを降りて家に着くまで、道の端に寄って避けた軽自動車以外は、誰にも出くわさなかったはずだ。学校も土曜日で子供たちの姿はなく、校庭の乾いた砂が白く光っていた。

（悪い奴がこっちを見ちょるち言うたやろうが）

母の声が肩先から耳元に這い上がってくる。

工場の倒産後、経営者は夜逃げして行方不明だとか、関西のホテルで首を吊ったとか、しばらくは噂が飛びかったが、そんな話も次第に聞かれなくなってきた頃、廃墟になった工場の敷地内を暴走族が夜中に爆音をたてて走りまわるようになった。

「鉄砲の撃ち合いをしよるばい。夜中に、鉄砲を撃って遊びよるとたい」

と母が怯えた声で電話をしてくるようになったのもその頃だった。母の言う鉄砲の音とは、たぶん爆竹だったのだろうが、近所の者が警察に通報したのか、パトカーが夜間巡回をするようになって暴走族は姿を消した。

暴走族がいなくなると、今度は、鍵の壊れた守衛室にカップルが忍び込むようになった。コンビニへの近道に守衛室の横を通ると、窓の下にコンドームが剥き出しのまま投げ棄ててあった。母がカップルに気がついていたのかどうかはわからないが、悪い奴が守衛室のところからこっちを見よる、と夕方になると早々と雨戸を閉めた。

他人の目はいつどこにあるのかわからない。二、三度、見かけたことのある、色黒で大きな目をした城島の妹の顔を私は思い出した。

「秋ちゃん、最近は帰ってきよると？」

長靴の先で薬品の入った青いポリバケツを軽く押しやって城島は言った。

「毎月、帰ってきとるよ。なんで？」

むっとして言い返す。

「ああ、いや。畑が、ちょっと、荒れとるき、帰って来とらんとやないか、と思うたとよ」

「ここはもうずっと前から畑やないよ。見ての通りただの荒れ地。家も畑もなんもかんも荒れ放題。もう、どうにもならんとよ」

なんもかんも、もう、どうにもならん。

胸の内でそう繰り返すと、わっと叫んで走り出したい衝動に駆られた。

気まずい雰囲気が私と城島を包み、拭いても拭いても額から汗が吹き出した。化粧は剥げ、描いた眉も流れ落ちてしまった醜い顔を城島に見られている気まずさも、もうどうでもよかった。

「秋ちゃん、これだけの草を手で刈るのはおおごとたい。田んぼの薬撒きがすんだら、俺が草刈機ば持ってきて刈っちゃるけん」

城島はそう言うと私の肩を軽く叩いて、バケツを手に歩き出した。じんわり熱くなっていく肩を意識しながら、来るもんか、どうせ、口ばかりなんだ、と私は城島の汗で濡れたがっちりした背中を見送った。

初めて城島に会ったのは四年前になる。休耕田にしていた家の横の三角田を城島に耕作してもらうことにしたのだ。

「ここら辺りの、歳を取って百姓がでけんようになった者は、城島に頼んじょるげな。悪い人間じゃなかちゃから、うちも頼むことにした。あんたと歳はそげんかわらんとやなかろうか。ほら、役場の裏にビニールハウスがあろうが、あそこの横の家たい」

そうね、と私は母の言葉に軽く相槌を打った。私が結婚して家を出た後、母はまたわずかな野菜をリヤカーに積んで市場に行きだした。しかし、長くは続かなかった。農業はもう体が持たん、と田畑を売った金と年金で生活をしていたから、売り尽くしたと思っていた田んぼが、まだ残っていたことを私は知らなかった。

城島が耕作契約書を持って来たとき、たまたま実家に帰っていた私は城島と顔を合わせることになった。

「俺んこと、覚えとらん？」

城島は懐かしそうに笑いかけた。

「卒業してから、友だちと会うこともないし、同窓会なんて行ったことないから」

「そうかぁ、覚えとらんね。俺が中学三年の時、秋ちゃんは一年やった。図書委員会で毎月顔ば合わせとったけん、俺、覚えとうとよ」

素っ気なく答えた私に、城島は少しがっかりした表情で頭を掻いた。色落ちした青いシャツと膝の抜けている同色のズボンを身に着けた城島の日焼けした顔を見ても、中学時代の先輩で、図書委員会で顔を合わせていたという当時の姿を思い出すことはできなかった。私は自分が図書委員をしていたことさえ忘れていたのだから。

「そうねぇ、うちの秋子のことを覚えとんなさったね、それはよかった。いずれ秋子がここを継ぐことになりますたい。そんときは、よろしゅうお願いします」

母は大袈裟に畳に頭をこすりつけた。

「ばあちゃん、そげん堅苦しか挨拶はよか」

城島は、しきりに掌をズボンの膝で擦った。

「あらまあ、今、気がついたとやけど、城島さんな、うちのお父さんに横顔が似とらせんね。そうや、耳の形がそっくりたい。なぁ、秋子？」

母は城島の顔を無遠慮に覗き込んだ。私は聞こえない振りをして、薬罐の湯を急須に注ぐ。ここを継ぐなんていつそんなことを言った。勝手に決めんで。それに、似てるもんか。父さんは面長で痩せ形だった。どんぐり眼で、丸い鼻をした城島とどこが似ているんだ。私は上目遣いに城島の耳を見た。湿っぽい茸のような大きな耳が赤くなっていた。

あのとき、母は、賢治と私の破局を予感していたのかも知れない。

軽トラックの止まる音がした。城島は本当にやってきた。

「秋ちゃん、もうよかよ。後は俺がする。秋ちゃんは家の中で休んどきや」

近づいて来る城島に気づかないふりをして、草を刈り続ける私の背中に、柔らかい低音が降りかかってきた。休んどき――そんな言葉をかけられたことも、かけたことも久しくなかった。

なんで、なんでよぉ。

戸惑いが渦を巻き、私は頑なに顔を上げることができなかった。

「秋ちゃん、いいから」

もう一度声をかけられ、私はようやく立ち上がった。

草刈機を肩にかけた城島は、器用に草を刈っていく。シャーン、シャーン、と草刈機の乾いた音が畑に広がる。私は額に張りついた髪を掻き上げると、勝手口から家の中に入った。

春に帰ったとき、押入を開けたらネズミが飛び出してきた。黴くさい布団を持ち上げると、綿が食いちぎられ、生まれたばかりの子ネズミが蠢いていた。肌色のその塊を目にしたとたん、掃除機のホースの先を子ネズミに向けた。軽い手応えがホースを握る手に伝わった。

妊娠したのよ、だから、結婚しましょう。そう迫ったとき、え？　と言ったきり言葉を失った賢治は鼻の頭にびっしり汗をかいていた。婚姻届を出しに行ったその夜、私は流産した。病院よ、病院に連絡して、と下腹を押さえて電話機を指差す私を、口をぽかんと開けて、突っ立っていた賢治の顔は今でもはっきり覚えている。その後、何度か流産を繰り返し、子供はとうとうできなかった。

なぜ、私が――。私のどこがいけないというの。

薄く埃を被った部屋を見渡し、私は掃除機のコードをコンセントに差し込んだ。

草刈機の音はいつのまにか裏から表に回っている。私は急いで掃除機を片付け、納屋から自転車を出し、コンビニへ走った。ペットボトルのお茶を二本、ビールを半ダース、それに唐揚げ弁当を買った。家に戻ると、城島の車の助手席にビールを袋ごと置いた。

草刈機の音が止まった。ペットボトルのお茶を持って行くと、城島は畦に座り込んで煙草を吸っていた。刈ったばかりの青臭い草のにおいが風に乗って流れてくる。

「やっぱり、草刈機やと早かね。鎌で刈っとったら、まだ半分も終わっとらんよ」

城島にペットボトルを渡しながら刈り払われた草を眺める。表は私が刈ったのだが、草の茎が固く、でこぼこだらけだったのを、城島はもう一度きれいに刈り揃えてくれている。

「秋ちゃんがせっかく刈ったんだけど、もう一度刈ったよ」

私の気持ちを察してか、城島はそう言った。

「田んぼに来る度に、刈ってやろうと思うんだけど、余計なことをするといかんやろうと遠慮ばしてね。これからはいつでん刈っちゃるよ」

城島はペットボトルを口にもっていった。日に焼けた喉仏がそこだけ別の生き物のように動く。

「なあ、秋ちゃん。三角田のことやけど、五年契約があと一年で切れるとたい。ばあちゃんもおらんようになったことだし、田んぼをどうするのか、これからは秋ちゃんが決断をせんといかんよ。そのうち役場から書類が送られてくると思うから、そのときはしっかり書類に目を通しなよ」

五年か、と秋子は胸の内で呟く。

「今のまま続けて作ってもらえるんやったら助かるけど。田んぼのことは私にはわからんもん」

「わからんじゃ、いかんやろうも。俺、相談に乗るけん、なんでも訊けばよか。田んぼは、そげないい加減な気持ちで向き合うたらいかん。田んぼは、先祖の汗と苦労が染み込んじょるとばい。秋ちゃんが今、どういう生活をしちょるのか、俺にはわからんけど、ばあちゃんも死んだことだし、秋ちゃんがもっとしっかりせんといかんやろうが。俺、最初に秋ちゃんに会ったときに言わんかったけど、結婚前の秋ちゃんのことも、よう知っとおよ。ばあちゃんを軽トラの助手席に乗せて、市場に野菜を持って来よったやろうが。俺、あの頃、親父の百姓仕事を手伝いながら市場でアルバイトもしとったから、野菜を並べる秋ちゃんをいつも見とったとよ。よう働く娘やなあと感心してね。ほら、仕事が終わったら、自動販売機のジュースを一本買って、ばあちゃんとかわりばんこに回して飲みよったろうが。ばあちゃんも秋ちゃんも、むすっとしとったけど、どこか温かくて、いい雰囲気だった。仲がいいなぁ、と俺、羨ましくてさ」

「偉そうに言わんで。草を刈ったぐらいで、そげん馴れ馴れしくされたら、たまらんよ」

あの頃の話をしないで。それに、田んぼがどんなものか、それくらい私にだってわかっている。背中を丸め、地面を這うようにして働いてきた両親の姿を子供の頃から嫌というほど見てきたのだ。父の顎から、母の額から、雫となって滴り落ちる汗を吸い込んできた土。うちは、百姓をするために、あんたといっしょになったとじゃなか、と父に食ってかかっていた母が踏ん張っていた土。

「あ、悪かったよ。すまん」

私の剣幕にたじろいだ城島は俯いてペットボトルを握りつぶした。

城島の暮らしを、私はほとんど知らない。高校卒業後、大阪で就職したが、二十代の終わりに親元に戻ってきて、農業を継いだらしい。自分の田を作るついでに、年老いた耕作者や私のように後継者にはなったが耕作の出来ない所有者の田を頼まれて作っている。農地の他にも少しは土地があるようで、アパートを建ててその経営もしているらしい。妹の嫁ぎ先も不動産屋だが、ここら辺りの土地所有者は、百姓をやめて不動産屋を始めた者が多い。

あんた、儲かっとるとやろう？　と母は城島に訊いたことがあるらしい。いやあ、配水管が詰まったとか、風呂のシャワーが故障したとか、そん度に呼び出されて、修理代に金がかかるばかりで儲けにはならんですよ、と城島は人のよい笑みを浮かべて答えたそうだ。

地下足袋に、色褪せたシャツとズボン姿の城島からは、妻帯者の匂いはしなかった。所帯を持っていると母から聞いた覚えはないが、五十に近い歳では、独身だとも考えられない。バツイチだろうか。

私が城島の生活にほんの少し興味を持ったように、いつも一人で実家に帰ってくる私を、城島が不審に思ったとしてもおかしくはない。

秋ちゃんは、なんしよると？　働きよると？　と訊かれたらどう答えればいい。夫から金をせびり、その金でふらふら暮らしていると言えばいい

のか。

「その、どう説明したらいいのか。秋子のことを嫌いになった訳じゃない。その、つまり、好きなひとがいる」

三年前、それは突然のことだった。

「なに、それ。どういうこと？」

「だから、つまり――」

口ごもり、黙りこくってしまった賢治に、私は頭の中が真っ白になった。早鐘のように胸が高鳴り、立っているのがやっとだった。

「冗談でしょ？　なに言ってるのよ」

「いや」

押し殺した声で言い、賢治はまた黙り込んだ。ひーっと喉を鳴らして、重い沈黙を破ると私は叫んだ。

「言いなさいよ、意気地なし。はっきり言えばいいじゃない。別れて欲しいんでしょ。でも、私は嫌よ。私、十年先までは、絶対に別れんから」

「十年！」

「そう、十年。十年のあいだ、あんたがどれだけの誠意を見せてくれるかで、判子をついてやってもいい」

賢治の顔が歪み、握りしめた拳がぶるぶる震えていた。十年どころか、一生別れてやるものか。私は胸の内でそう繰り返していた。

一週間後、アパートの住所と電話番号を書いた紙切れをテーブルの上に置いて賢治は県外の営業所に単身赴任した。別れ話を切り出したときには、すでに異動は決まっていたのだろう。賢治が出て行ったあと、部屋を片付けていると机と壁の隙間に一枚の写真が挟まっているのに気がついた。賢治と見知らぬ女が車に寄りかかって写っていた。賢治の手が女の肩にしっかり回されている。地味で貧相な体つき。年齢は三十過ぎか。いや、もう四十代だろう。私とそんなに歳が変わらないじゃない。なんだ、こんな女。私は写真を屑籠に放り込み、賢治に電話をかけた。

「ねえ、あんた、部屋が寒いのよ。エアコンの調子が悪いみたい。買い替えようと思うんだけど」

甘えた声を出すと、ぐっと詰まった賢治は、声を押し殺し、

「今、何時だと思ってるんだ。それに、あんた、と呼ぶのはもうよしてくれないか」

と言った。

「あら、まだ、夜の十一時よ。それに、判子はついとらんけん、籍の上ではまだあんたの妻なのよ。あんたと言って、なにが悪い」

「すまないが、明日、ケータイに電話をしてくれ。今夜はこれで切る」

「ちょっと待たんね。ねえ、誠意はどうしたのよ、誠意は。私ね、車の免許を取ろうかと思ってるんだけど、入学金いくらかかるとやろうか？　歳の数だけ、お金がかかると、きいたけど」

賢治の息遣いが受話器を通して伝わってきた。賢治は私が車の免許を持っていることすら覚えていない。私のことなど、もう何も覚えていないのだ。

壁に張りついていた蜘蛛がするすると天井へ這っていった。

賢治の留守に女に電話をしたこともある。女が出ると何も言わずに嘘泣きをした。女が切っても、すぐにまたかけた。

「ねえ、切らんで。私、どうしたらいい？　ドロボー猫に夫を取られたのよ。もうどうしたらいいか自分でもわからん。夜もね、眠られんとよ。睡眠薬の量ばかり増えてね。もう、死にたい。いっそここにある薬を全部飲んでしまおうかと、今ね、電話の前に薬を並べとるとよ」

胃腸薬の壜を送話口で振り、弱々しい声を出して訴えると、女はわっと泣き出した。だが、女は、別れます、とは言わなかった。

「許してください、もう許してください」

「もう、ってどういう意味？　そんなふうに言われたら、私がひどいことしているように聞こえないかしら」

静かに、それでいてねっとり言うと、許してください、と女はやはり繰り返した。

「ねえ、よく聞いてよ。私が死ぬときは、ほら、新聞に投稿欄があるでしょう。あそこに、『夫を寝取られた妻の気持ち』っていうタイトルで投稿してから死のうと決めているの。どうかしら？　ねえ、どう思う？　もちろん、匿名じゃないわよ、工藤秋子で投稿するの。みんな、実名で書くつもりよ」

電話の向こうの怯えた泣き声を断ち切るように受話器を置いた。

賢治は私のもの。賢治の身も心も全て、私のものなのだ。泣いて賢治の全てが忘れられるのならいくらでも泣くわ。腹にぐっと力を入れ、私は込み上げてくる熱いものを堪えた。

「もうすこしで終わるけん、やってしまうか」

城島が草刈機を担いだ。モーターが再び唸りだす。私も家の中に戻る。流し台の隅に梅の絵柄の湯飲みがぽつんとある。縁にひび割れがあるこの湯飲みは、母がいつも使っていたものだ。それがたった今、飲んだばかりのように静かに置かれている。いつからここに？　先月アパートに戻るときに、使った食器は食器棚にしまって帰ったはずだが。私の勘違い？

蛇口を捻ると、すっと寄り添ってくる気配を感じた。私の手に、見えない手が重なり、二つの手が湯飲みを洗い始める。

母さん？　やっぱり母さんだね。

目を閉じてゆっくり手を動かす。ひとつに溶け合った腕の重みが心地よい。

洗い物をすませて、広告紙の裏にボールペンで、０９０―２３７――と数字を書き留め、ちょっと迷ったが、小さく折り畳むと、ポケットに入れた。

気がつくと草刈機の音が止まっていた。城島の姿が見えない。慌てて生垣の方に回る。いた！　軽トラックに寄りかかって城島は煙草を吸っていた。目が合う。息が弾んでいる。走ってきたことが恥ずかしかった。

「ビール、ありがと。遠慮なく貰って帰るよ」

城島が首にかけたタオルで額の汗を拭った。

「そんなもので、ごめん。鎌で刈っとったら、まだとても終わっとらんよ。それに、刈って貰っているあいだに、家の掃除もできたし、助かった」

「女じゃこれだけのものを刈るのは無理たい。いつでん刈ってやるけん、遠慮せんで言うたらよか」

そう言うと城島は車に乗り込んだ。

秋ちゃん、と城島が運転席から身を乗り出した。

「脱ぎなよ」

「え?!」

私は城島を見た。

「秋ちゃんさ、鎧を着けてるというか、肩肘張っとろうが。それを外せ、と言いよるとたい。心がきっと軽くなるよ」

城島の顔は真剣だった。

「お節介やね」

「なん、また、怒ったと?」

私は横を向いた。だが、不思議と腹立たしさはなかった。フロントガラスにぶら下がった交通安全のお守りを黙って指で弾いていた城島は、それじゃあ、とエンジンをかけた。

「待って。これ」

私はポケットからさっきの紙を取り出し、城島に突き出す。

なん？　と窓越しに受け取った城島は私の顔を見て、節くれ立った指で不器用に紙を開いた。

「私のケータイ番号」

たったそれだけ言っただけなのに額に汗が吹き出した。城島は、ありがとう、と照れた笑みを浮かべてアクセルを踏み込んだ。車が百合ヶ丘を通り過ぎ、見えなくなるまで見送る私は、額の汗を何度も拭った。

母が亡くなって一年半たつのに、家の中はほとんどそのままだった。

今日こそは思い切って片付けよう。髪を輪ゴムで一つにまとめると、風呂場の棚の物をスーパーのビニール袋に放り込む。毛先の広がった歯ブラシ。底に少し残った椿油の壜。取っ手の外れかけたアルミのコップ。錆びた安全カミソリ。かちかちに乾燥したマダムジュジュ。そして、白髪が絡みついた櫛。みんな袋の中へ。

タンスの引き出しを開けると、樟脳の臭いが漂う。夏物と冬物がきちんと分けて入れてあり、下着は着やすいように母が自分で手を加えていた。頭から被るシャツやシュミーズは、胸元を鋏で切って、ホックがつけてある。袖口は布を足し、腕が通しやすいようにゆとりをもたせてあった。パンツもショーツと七分丈のパンツが二枚重ねて縫い合わせてあり、一度に穿けるようにしてある。

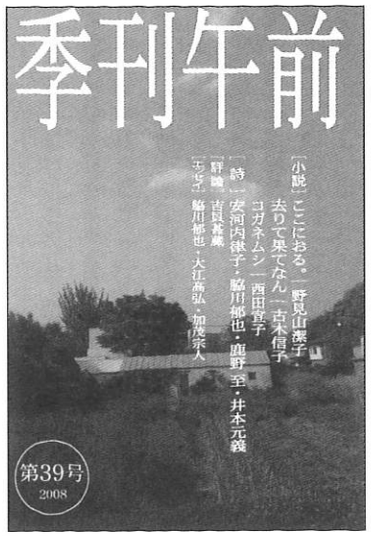
ふと、雪だるまのように着ぶくれた母の姿が目蓋の裏に浮かんだ。ストーブも使わず、しんしんと冷え込む薄暗い部屋の中で炬燵に潜っていた母。

風邪引くよ、ストーブくらい使わんね、と火をつけようとすると、ストーブは危なか、炬燵があればよか、と襟を掻き合わせていた母。
（うちは、一人でも淋しゅうはなかった。こん家が、うちを守ってくれた）
母さん？
振り返ると、いつのまにか夕闇が部屋に忍び寄っていた。下着を引き出しに戻し、灯りをつける。お湯を沸かし、昼間、コンビニで買ってきた唐揚げ弁当を卓袱台に広げる。テレビのスイッチを入れ、十四インチの画面をぼんやり眺める。疲れがじんわり体を包んでくる。
（明日は晴れるばい。テレビの天気予報が今そう言うたやろうが）
母の声がまたしたような気がする。

がらがらと音をたてて勝手口の戸が開いた。井戸端で水の音がして、誰かがうがいをしている。アルミのコップの縁を歯ブラシで叩いて水を切る癖は、あれは、母だ。
母さん、コップも歯ブラシもいっしょくたにビニール袋に入れて捨てたよ、と声をかけようとしたら目が覚めた。カーテンの隙間から粘っこい朝の光が忍び込んでいる。伸ばした手がプラスチックの容器に触れ、食べ残しの鶏の唐揚げが卓袱台の上から畳に転がった。
私は、卓袱台に俯せになったまま朝まで眠り込んでいたらしい。腕も腰も痛い。
ポケットの中で震え出したケータイを慌てて取り出す。
「秋ちゃん？　今日、帰るとぉ？　帰るんなら、俺、駅まで送っちゃろうか」
私は部屋をゆっくり見回す。
「帰らんことにした」
「え？」
「ここにおる。そう決めた」
「そうか」
「うん」
「俺、また、草を刈っちゃるよ」
ありがとう、と素直に言えた。
閉め忘れていたタンスの引き出しから微かに樟脳の臭いが漂ってくる。
母さん？
引き寄せられるようにタンスの前に行くと、太い木綿糸で二枚重ねに縫い合わせたパンツを取り出す。スカートを捲り、ショーツを脱ぎ捨てる。そして、二枚重ねのパンツに足を通す。ぶかぶかでくすぐったい。
母さん。
もう一度柔らかく呼びかけると、すうっと気配が私に寄り添った。

（二〇〇七年度南日本文学賞受賞作を改題、修正）

野見山潔子



のみやま　きよこ
1949　福岡県生まれ
70　山口県立女子短大（現山口県立大学）卒業
「笛」（都城市）・「九州文学」を経て、現在「季刊午前」（福岡市）に所属
宮崎県都城市在住
2002「島へ吹く風」で第20回大阪女性文芸賞受賞

第３回
全国同人雑誌最優秀賞
まほろば賞
公開選考会
2009 9月5日 土 PM1時
同人雑誌最優秀作品を自らの手で選ぼう
あなたも選考委員
同人雑誌界のエポックを
会場●山梨県立文学館
主催●全国同人雑誌振興会・文芸思潮
後援●山梨県立文学館・山梨日日新聞
協賛●作家集団「塊KAI」
参加費●無料（候補作品を読んでいただくことが必要です）
※候補作は「文芸思潮」29号・30号に掲載 詳しくは36Pを
参加申込 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 文芸思潮
メールでも受けつけます asiawave@qk9.so-net.ne.jp 宿舎も手配します

季刊午前

福岡県

青春の文学に挑む

由緒ある「午前」の流れ

『季刊午前』は一九九一（平成三）年、福岡で創刊された小説・評論・詩・随筆を掲載する文芸同人誌だ。

「自然破壊、大気汚染による地球の環境悪化はさらに末世的な危機感を強め、無気力、怠惰、狂気だけが地表を覆うにいたっています。もはや、人間らしい若々しさ、みずみずしさ、力強さはどこにもみられません。その責の一端は文学の衰退にあります。文学が青春を喪失したときから、人間の運命に翳りが萌してきたのです。／私たちはいまいちど、青春の文学に挑み、人類無限の可能性を確かめたいと思います。ここから、二十一世紀以降の世界を展望する新しい文学が開花することを信じます。」

これは、九〇年十一月、『季刊午前』の創刊趣意書に掲げた言葉だ。文案作成は故・北川晃二（きたがわ・こうじ、一九二〇～一九九四）＝写真。

誌名の「午前」の歴史を少し遡ってみよう。

『午前』は敗戦翌年の一九四六年、福岡の出版社・惇信堂が南風書房という発行所を立ち上げて、北川晃二を編集長として刊行した商業文芸誌（～四九年／全25号）だ。敗戦直後で、東京がまだ完全に機能していなかったことや、惇信堂が良質の紙を持っていたことなど、いくつかの条件が重なり、中央での出版ではなかったにもかかわらず、三島由紀夫、庄野潤三、中村真一郎、三好達治らにも作品発表の機会を提供するなど、高い水準を保っていた。北川自身、創作集『逃亡』（四八年）を上梓して注目された作家で、彼の作品「奔流」は五二年下半期の芥川賞候補に挙がっている。

北川はその後、同人誌として『午前』を創刊（五一年）、由緒あるその流れをくむ『季刊午前』は第四期午前ともいえる。北川は、長く福岡の文学の牽引者であり、多くの書き手がその薫陶を受けた。

現在でも毎年六月に北川晃二を偲ぶ会「南風忌」が開催されている。

青春の文学に挑む

季刊を謳ってはいるが、掲載作品の質を保持するため発行の歩みは遅く、最新号は第40号（〇九年）だ。だが、九五年に掲載した同人作品が芥川賞候補に選ばれるなど、そのレベルは高いといえよう。

編集は六人の編集委員が行っているが、「青春の文学」に挑むべく、斬新な編集をする同人誌でもある。ここ数年の企画・特集のテーマと内容は次のとおりだ。

●現代詩特集「充満と真空あるいは声高と静謐」（第32号／〇五年）

第18号（九九年）以来の現代詩特集。写真家・古城由香里の写真からインスピレーションをもらい、外部ゲスト二人を含む十四人が十七編の詩を書いた。写真と詩とのコラボレーション。

●企画小説「川向こうの、こちら側」（第34号／〇六年）

六人の同人が、共通の設定下で小説（六〇枚前後）を競作。小説と小説のインターバルには短い詩が付けられた。設定は架空の町だが、「雪の降ったある一日」だけは共通の時間として小説内に生かされた。掲載号では、あえて作者名を明らかにしなかった、同人誌ならではの取り組み。

●企画特集「本歌取り」（第37号／〇七年）

古歌の語句や発想、趣向などを素材に取り入れて新しく作歌する本歌取りの手法で同人九人が参加。万葉集や枕草子などの古典、童話や聖書、詩集、字典など多彩なジャンルを本歌として六〇枚前後の六編の小説と三編の詩が発表された。

●創刊40号特別記念企画（第40号／〇九年）

同人全員が参加してジャンルを問わず原稿用紙五枚を発表する記念企画「2000字特集」を組んだ。これは発行の節目となる十号ごとに企画しており、今回が四度目となる。また詩人・樋口伸子氏をゲストに迎えた座談会「漂流・鼎談～詩と誌と私と」を掲載した。

◇

一月を除く毎月第三日曜日に例会を開催し、発行号の同人合評会のほか、芥川賞受賞作品などをテキストとする勉強会などを行っている。例会の会場は福岡県農民会館（電話〇九二・七六一・六五五〇）で参加自由。同人加入希望者の見学も受け付けている。

入会には手続きが必要だが、文学とまじめに向き合おうとする人には広く門戸を開いている。福岡近郊だけでなく、熊本や宮崎在住の実力ある同人も多い。

（文責・脇川郁也）

■『季刊午前』DATA

創刊／一九九一（平成三）年
年間発行回数／二～三回
判型／A5判
本文ページ数／102（第9号）～254（第32号）
同人数／二十二人（〇九年六月現在）
売価／六〇〇円
発行所／季刊午前同人会
　季刊午前事務局＝福岡市博多区山王二丁目一〇番一四号　脇川郁也方
　電話・ファクス（〇九二）四五二・〇五一〇

表紙全面に写真を採用する季刊午前の最近号

季刊午前　事務局
〒812・0015
福岡県福岡市博多区
山王二・一〇・一四　脇川方
☎092・452・0510

新しい日本文学の潮流を

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

第３回全国同人雑誌 最優秀賞

まほろば賞

あなたも選考に御参加ください **公開選考会**

あなたも選ぶ、新同人雑誌時代の、新しい文学賞

2009 9月5日 土 PM1時

山梨県立文学館

●全国同人雑誌振興会・文芸思潮では全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を公開選考会にて決定します。公開による方法ですので、どなたでもご参加できます。

●候補作品はこれまで文芸思潮に同人雑誌優秀作として掲載された作品です。

文芸思潮 29 号 **「雲の向こうのメメント　モリ」**（梶川洋一郎「安芸文學」75 号）

「繭の中」（森崎房枝「文学街」253 号）

「カプセル・タイム」（大西　亮「北斗」548 号）

「どくだみ」（波佐間義之「九州文學」524 号）

文芸思潮 30 号 **「風景―月壷―」**（山口　馨「渤海」57 号）

「ここにおる。」（野見山潔子「季刊午前」39 号）以上の 6 作品です。

●選考会は 9 月 5 日（土曜日）に山梨文学館会議室で午後 1 時より開かれます。郵送による投票だけでも参加が可能です。

どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。

選考委員ご希望の方は全国同人雑誌最優秀賞選考委員申込書を文芸思潮に投票用紙とともにご請求ください。

選考委員申し込みの方に掲載号（有料）をお送りします。

文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいただければそのまま選考委員になれます。お申し込みだけで、文書選考委員となることができます。**詳しくは次ページをご覧ください。**

全国同人雑誌振興会
文芸思潮
文芸思潮　〒 158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13　TEL&FAX03-5706-7848
Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程

① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから（3年以内とする）優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌賞優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。

② 毎年**公開選考会**を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。

③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。

④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員（選考会参加）、および文書選考委員（選考会不参加／文書のみ）によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。

⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は第1回は設けない。

⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前に行い、選考会当日までに開票集計して発表する。

⑦ 最優秀賞は一人が原則だが、二人もありうる。

⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる）

⑨ 最優秀賞選考過程・結果は「文芸思潮」に発表する。

⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。

●この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年5月25日　（2009年5月1日※⑩を加えて改訂）

全国同人雑誌振興会

文芸思潮

第3回　全国同人雑誌最優秀賞

9月5日（土）
1時より 山梨文学館

まほろば賞 公開選考会

あなたの手で最優秀賞を

合評・討議⇒①投票⇒討議⇒②投票⇒決定

徹底的に話し合った末、第1回投票で候補を絞り込み、討議を重ねて、さらに第2回目の投票で決定いたします。

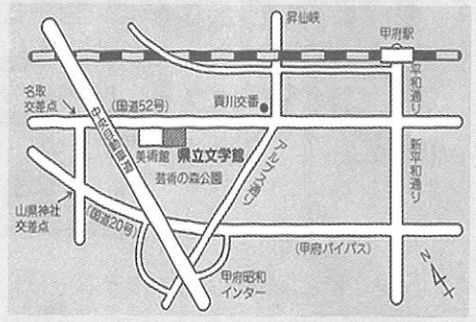
「雲の向こうのメメント モリ」（梶川洋一郎「安芸文學」75号）
「繭の中」（森崎房枝「文学街」253号）
「カプセル・タイム」（大西　亮「北斗」548号）
「どくだみ」（波佐間義之「九州文學」524号）
「風景―月壷―」（山口　馨「渤海」57号）
「ここにおる。」（野見山潔子「季刊午前」39号）

●お問合せ・お申し込みは

文芸思潮　まほろば賞係

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL&FAX03-5706-7848 電話・FAX・メールでも受付けます
Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp　※希望者は当日の宿泊も手配いたします。1泊2食付10000円

山梨文学館
〒400-0065 山梨県甲府市貢川（くがわ）1-5-35
TEL055-235-8080



第3回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞投票用紙

※点数は持ち点の中から合計最大が持ち点となるようにつけてください。一人に限らなくてもけっこうです。

番号	短評	点数
①	「雲の向こうのメメント　モリ」梶川洋一郎「安芸文學」75号　文芸思潮29号	点
②	「繭の中」森崎房枝「文学街」253号　文芸思潮29号	点
③	「カプセル・タイム」大西　亮「北斗」548号　文芸思潮29号	点
④	「どくだみ」波佐間義之「九州文學」524号　文芸思潮29号	点
⑤	「風景―月壷―」山口　馨「渤海」57号　文芸思潮30号	点
⑥	「ここにおる。」野見山潔子「季刊午前」39号　文芸思潮30号	点

持ち点 ※必ず記入のこと	選考委員名	住所　〒　TEL	文芸思潮会員の場合は会員番号を、非会員の場合は×を記入してください。No.

※批評文がたくさんになる場合は拡大コピーを取ってご記入ください。

※当日参加できず、郵送などによる投票の場合はこの投票用紙またはコピーにご記入の上8月31日までに文芸思潮・全国同人雑誌最優秀賞選考委員会宛にお送りください。